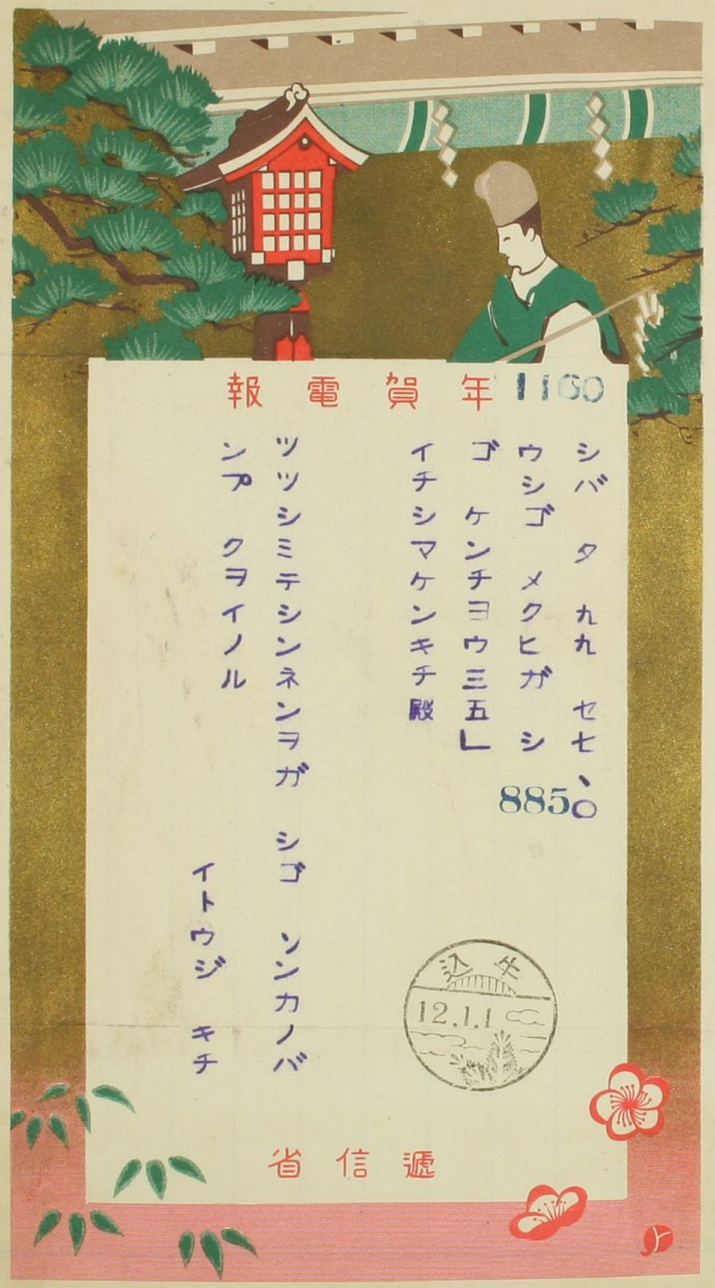
丁丑雜記

昭和十二年一月

特別
14
1919
482

176747



凸版印刷株式會社印刷

38- 9268

電報

電報 1253

マヘジ マキネン ミ セセ、〇
ウシゴ メクヒガ シ
ゴ ケンチヨウ ニ五」
イチジ マケンキチ殿

631

送出
12.1.1

省信遞

複原製

ツツシミテシンネンヨガ シバ イキウノゴ
アイコヲネガ フ マヘジ マキネンイケベ テ

ニ一 セセ、〇
ヨウ三五」 837
殿

送出
12.1.1

省信遞

ンヨガ シヘイソノゴ ブ
チヨウトオリ五コヤマカン一

電報

1253

マヘジ　マキネン　三　セセ、〇
ウシゴ　メクヒガ　シ
ゴ　ケンチヨウ　二五」
イチジ　マケンキチ殿

631

ツツシミテシンネンヨガ　シバ　イキウノゴ
アイコヨネガ　フ　マヘジ　マキネンイケベ　テ

込　12.1.1

遞信省

電報

400

ニイガ　タ　三五二一　セセ、〇
ウシゴ　メク
ヒガ　シ五ケンチヨウ三五」
イチシマケンキチ殿

837

ツツシミテシンネンヨガ　シヘイソノゴ　ブ
オンヨシヤス
ホンチヨウトオリ五コヤマカン一

込　12.1.1

遞信省

新年之年賀雲雀に美術的用意を用ゆること
昨年一月より初まる、本年元日に寄せる三
題極未だこゝに始めなく
○幸ハ不幸か又一髮をかく丁丑の七十八歳である。自
分のやうな明氣さうなあの生命がもいとなくさう。毎年の
年中もあるが、一月三ヶ日ハ、いくら明氣性でも何となく
こゝろもちく無邪気に囲らせらる。十二月大晦日で一年の
あらゆる決算が済むと、心持も清新で何となく清らかな
ちい。元旦の無邪気の心持が、即ち一切浄罪の心持で
あるとゝもまが、どんなにどちらへ心持いきい笑ひと、平生の
明氣性が一層いやまさるとく
○毎年の元旦に死と例へて演劇と寂しく金田に一杯を傾け

○、此歳相変らず無事なんとも故と雅客なら
ず、庭上席も清潔なる故庭にうづらの鳴物を
出す、殺風景を和ませる菜を故向をかへて会をなさく、清客
風物の俗なるを客と代まらるる風流、無邪気
なる清代なる。低迷沈の庭を入りて門に竹の響
が初めを地。うくうく長夫のうくうくと苦しのおもかげを何
んまふ有す、池辺を停
滞動かさるる地形の変遷
じもを得さるかもとが
お海を恋してあるうくん
あちくちらを柵を結て
人の往来をとゝめ給ふる

よう、快く石のみち、柵を張り
た勝手の歩けい、あまりの広
壮的の林もあり、北の盛り場
を強くしき風を感ず
庭の一部の乗庭の趣所
とうつるのみ、美観いうけん
ど名園とうつる迄。
○北宇宙本部の和気の御
影うつり村大の天の自然
を保る本部の御をうさ
く来りしかさしう板の
こあり、こん桑と西村と

複原製

ささえ祝めおく、
のこうしい丑の年干支であるので、丑と国人に御をうさ
るがあきらに出てゆる、自分も丑に就も越後へ行く
汽車中、つんくのまくば、考くも見れば、丑い傾名うし
とうしい憂しと言ふ、目出たいとも考
へるが、見受丑い大義大恩の動物である。俗名の
志成くおき、あの大きな体内から生まる乳液は至
純地上のうまい、人間の母乳に育つが、母乳の
無い、子供の母乳に育つが、母乳の欠の貴牛乳が補
いん、母乳の充ものと有まの、こともあるが、牛乳ないもの
からの人間の病体を養ふ牛乳であるとうくく薬
剤くもの、えんがくく剤く、あの真白な歌から甘味

の多い流体で、どんな悪弱の病体でも摂取する事出来て、之程
迄に言い難い感謝を与えるのは、もちろん人間の哺乳動物の乳
で生育したものであるが、外人の経験する所によれば
ソフト、ナルスはもいからうとあつても、自分は病中の経験から
之れを飲んで感謝と云ふのである。人間が幼少の時でも常に
飲み得ることの牛乳で、之れを摂取する毎に母乳を懐しく
思ふことを得るのである。支那二十四孝の内に老萊子が
母の乳を供する一節もあるが、今は之れを面倒のもので、どこでも
容易に得られる。之れが料理に用ひられ菓子
に用ひられ仁柔かにする點迄もあるが、特に美味を加へるのである。
世界の多くの家庭が之れを憐まれ、食料の大切なる
ものつとめて西洋の家庭は殊に家族に婦人の朝の務

榛原製

は乳の搾取とうつもあると自主的である。都会では牛乳配達が
貧者生活を助けるのであり盛んで、彼等が暁天に各家
庭に北の慈源と齎す者共は思ひ出さるべき、誰かこれつ
庶民と云ふのよい良肉で、牛乳の副産の功徳を忘れべき
であらう。
世界の人が一日飲む牛乳の分量はどれ程であるか見合はせの
物産といふべきであるが、おもふに量を合計したら小湖を溢す
乳のことであらう。之れを乳と思ひ出すのは、タンナトンを
振盤の為の物品の金地の方が全く清涼剤と共村は生
汁の方法を義するの止むなきに、もし牛の飼養を思ひ之
つて其の乳を各所に輸送することが前らし(なる)窓に豊かな

生活を豊かに得るやうなれば、あがこんな牛乳を飲む
道理と云ひ捨てるまでの。先づ角盆地と俗称の意味が去
つて人を養ふ意味と変じ、北のハ黄しうう海産民
あやしげな仏法を信じ、ても縁起を祝し所以が今日眼前
の事実を見るのだ。
印度の婆羅門がンデーは乳を飲んで活きて居るが、矣が
牛乳でもって山羊の乳と共に、あがく印度の国勢
も略々推量さるべし。尊い山中修業の時の牛乳
で生活したと傳へられ、牛乳が早く印度を行んでゐ
る。仏教国では牛を大切にするので日本でも人々牛を食
用とせざるべし。牛乳を搾ることも日数をかさねるうちに唯
に農家の耕転を専用さんと大切がられ、ちんぷ到使紙

標原製

く銀を搾くあんるで温順な小兒や婦めをやさしく、そして
牝牛は多くの日乳料を日生す、之れを搾りのハおの伽藍
の金堂を育てた山ぶのあれきこあで、金堂のかき
料のこのを生じたのハ牛のかき山ぶが牛乳の潤澤の
乳を供したかとなるとも、今世界を牛乳の産を行ハ
んるの人、国民を[illegible]牡する日るまとしても牛をウルシのが
セるやうとるる。日本の近世の文化のかきの牛を買ふことが流し
て小ぶでもきの。仏蘭西人が未だ牛の角を食ふことを嫌くもから、
子日等の先覚者の時代を牛肉が好を牛を愛ぶらしの。大根産ぶ長崎
るあれからの生時代を牛肉が好きで、百産の基本をいやうな
し此。その味が藩産のやうこえて別製ハ大根産から牛の
料理を教いつてある。西下の到いつも牛肉ぬびあつれと傳

たゝえ、後日は牛肉が大流行し、書生輩の宴会となり、一種
牛鍋と云ふ日本特有の自流創意まで生じ、日本文化へ
根強牛鍋の中から生れたと云ふも敢て誣言ではない。
明治の新年、陛下が北海巡幸の際、後藤伯の演説
が不漁であつたので、縁起物として牛肉二頭献上し及
人ひまつる。当時の牛肉は可なりまづかつたが
通国を代へて宮廷供奉品は洋食的
頃の嗜好も略々推量さるゝ。自分等は洋食生活
代から大の牛肉好きで、七十位の時大阪の同宏堂と
四条の牛肉店三河屋と合資し此時十人で五十三人
前平げたことがある。高島屋が古島と猪熊住吉の
牛の屠殺場をもつて日本の手始めとなつたのを、ひさく

凡和を行き渡る新しく屠殺の光の度を見て一種懐旧の
気持を抱かれたが、様々濃き辞典の日向ひ一行は浴衣
を掩ひ、自分は幸ひ其の表象を基人に求め牛肉の音的
者である。

○熱海の新く(全)中無聊を慰むるのみを考きつゝ先ず

自分のひらめいたもの

まづ賭けごと禁将棋を始め 麻雀 相撲
スポーツ 行きの放味があるから 海岸
仮色の奇言お)一戦 和歌 俳句 絵画
くゝこと 本西洋式の五位 西洋流
宜觀 蓄妾 かくしごと 西孫の味

自分の妙ひとりごと　中さきの除かれんど

官僚　大金持ちに成金　御商家

女文学者　如政流家　有名な美人

遊俗僧　漫りな美人　風張る人

素敵家　狡猾の人　田舎の小役人

酒婦ひとり人

自分のやりたくないこと　幸せやうで淋しかる

夜分おこさんる職業　医者　花柳　右豆

婦人のおとも　すべて儀式にみる職務

榛原製

獄卒　探偵　ポインドメン　捕吏

高利貸の手代　破産の債権者

養子　男妾

自分の一すやつてみたいこと

乗つてみたいの汽船　捕縛船

税関の婦人改め役　女の身上相談

難件の法官　高貴人の侍醫

名宰相の秘書　女湯の流し男

芝居の馬の尾　酒の升さし

燈台守

○自分は婦人の頭髪に特に趣味を有してゐるのであるけれども、
が、髪型やうを稍自ら敬遠中いつも目つくのは
婦人の頭髪である、此の七十歳の年輩で洋髪は
此が、まだも目慣れずに不思議な目つきを五六十年
間を以て洋髪(悪)もあるやうに此が、妻しいことの氣
當まりてゐる。此の此のやうに洋髪うまく、てざと
髪を断つたり、ちらしたりする西洋心酔の模倣髪
が多く行はれ出した此の、勿論近時の風俗上の大変化
であらんまいろく注すべきことがあるけれども、自分の
まんま就て今何も言ひたくない。何とまあ日本の風
俗を思ひ、毛髪の色と質と其の志やうさが、服装や
氣候や住居を思ふまの日本固有の髪容とあるまま

榛原製

其の頃日本の如く頭上に冠を置かず、髪容を全身の
装飾としてある。髪容の研究を先いつも重
き身をやつしたのも無理ならぬことであるが、
程度の髪容が二風さん、各時代の髪容諸の大冊を
為す程あつて、宮中や大名の奥さまを行はれたまく
変遷を見ると、婦人異様のものもあるが、何れも用
日本婦人を特有する美髪を能う限り美的に取
扱つたものである。生命が長くて今日ら行はれたものである、丈中
自分が最も注意を傾ひ且つ好みまるのは丸髷である。
此の髪容も元とは大名の奥さまの行はれたまく変化
を使はれたらしいが、これもまく二風さんれまのうへや

うん男女、えんぎ設計美を発揮するものとうい、こん
ぱと設を飾るものいろい、多くの髪容の年輩の限
さこで、島田ろいはいろいろあれが、若いものはふさいしい
が、年増ろいも（しろいの。一種五）しも亦然りである。丸髷
ろ言つもハ若年から老境のようなものまでふの髪
の女子が八ろ嬢すと例らして丸髷と使ふが決して悪か
くろい、あまりろ年老て極小の髷を載くのハ見ろく
いけめしも、美ミ拘らず飽まで此の髷を使ふこのがあ
る程此髷ハどの年輩ろも普通である。此髷に或る
意味を粋れ儀式的もあるやうに壮重の味ハあるでもあるか
ら婚礼其他儀式かいの此髷をハ婦人の此髪を使ふが常
である。此の髪を使ふと婦人に何となく威容かがの、人の婦

榛原製

とろろ人の母とろろもい、[illegible]れの髷ハ[illegible]威容が無
けんがいろんが、其の威容を備へることのいろんもある。此の髪
容を何となく反撥[illegible]や陰気を表象まろ、定
まつた婦のある髪姿が他の髪を使ふと此髷を使ふと此髷を
あろろ。併し此の髪容ろも拙くあつて、使方の巧拙ろ
依り、カタの大ふや丈の作り方の巧拙ろいい、極めて野蛮
な感するのもあり、壮重ろいろ容ろ[illegible]レヤレタ感
見へるのもあり、決して一様でろない。大体年輩ろ伴つて
カタの大ふが違ふの如く、亦一番ろの大がタは若い
婦人専用で三十四十年輩ろ成ると段々小さくろろ
なるろ。手がらの高も高が黄ろろ白と変化も
ろいろ。亦髪の結ろも近々毛髪が薄くろ

又と緊縮することが出来を得ない。年増又は男髪の
様のものは又出来なくしてしまうのである。町家の女房などの美
相応の結い方があって、洒落んのあっても品の悪いものとなる。
下つて都の女人は折角あるものである。今は乱脈となって
格別の区別もないのが苦しい同じ丸髷でも様いろの様
いろ、風があって中長や女中もあるから風があって頗
髪で一見何物であるかの分つた位のものである。なる程
心ともないが、ある程度丸髷を
強制する上方の中長も同様だが、えいあ
る者は礼儀でもあって女中自身もえんを伝て美化し
其の体裁おつとりしたものに分除毎日結い直さ放
いちゝ面倒もあるが、女性美い繋つて頗髪のある

複原製

から、まるまん式の面倒の忍の結へるもん
頭髪の装飾は其各国稽るものあって、日本は珊瑚金銀珠
玉の櫛笄などが、或は時代の女は、或人と章さ
て用ゐるものを、つまを載いたが、実を云へば、えんの假結の
あって、本来の装飾は自毛で作つたものに無けんばならぬ。
て後髪のものを継しても、毎日自身で立派な装飾とな
るまで無けんばならぬ。長い間の陳腐で美を感ぜい
もの、出来たもん、斯の髪を茶で塗る。丸髷は立体を型低
を縛りもなナダラカに髪を撫で体を変曲したものを載き、前
ついあくんれ為髪をあつくりと
拵り、昔後ろんも多ぶをちぶくかれ頭の後ぶまで美押
し、美がまく洲の部さんもあるが実いんもあって頭髪美を氣

人を魅ずに居られぬ。殊に男が扱ひ方ハ云へ。示んるほど大きく取髪
を扱つれるほど無い。法師星の髪がつやくしと光沢を放し
てゐるさまん人を魅することがある。美髪の形容ハ雲
鬢ほど云ふけれども、巻く北の形容ハ丸髷ハの外
ハマルこまむすびなどの切髪や等ほどが髪具とそれも
るが、北等が無くても美容を損じてゐる。手がうほど美
を深くするあの相違ほどが、面礼の時ハ手拭を通して
自毛を見せて丸んの捲くる男境がある。が、決して捲くること
北の髪の時ハ白い人の方の面から見て美観が、変も播の
ほど高くものがある。後ろを見側きをも美容ハ陶酔
と前面の本体を顔の酔ほどに二度びックリすることも
あるのハ、前ハ北髪容の美を深ほどあれば、酔婦の丸髷を

人をして勿体ほどの感じをい抱かせる。
但し丸髷美ハ髪の色や素質ハ人ほどの勿論が生毛ヤチ
レモビリがどうほどほどの珠ハ白髪が混して来ると、白丸髷の時
ハ既ハあるのであるとい云ふほどの直線ハ白髪を深める為が多く、
巧者ハ髪を作る法もあるから、おしやれハ毛を深める髪
を用ひる丸髷を選ぶ方がほどの。身分の高い婦ほどハ丸髷を深
ほどハ後ハ某ほどと云ふ女髪結もあつた。髷ハ型を作る者高
い家もあつた。其家ハ同時ハ型をほどほどセほどほ
北の陸髪を自制したから、金と共店が使用を目指した。かもしや
が匠髪を得ほど其ほどほど北ほどほど言はまれもほどの。兎角他髪
を以つて補ふのハ面白くほどが、落毛のほどハもあを深
いほど。今前髪の皆面のウロの高く他髪をつめこん

心理的の傾向のあるのは、其れみぐるしい。前段の皆後は
天然の口ではあるまいかとうらしいのだ。

○自分は毎年除夜の際に此年を迎へる、別に何等
感じもない。只だ本年も無事に過ぎ来たるかと、あ
つさり思ふ位に思はれる。自分の歳の数は古
稀を超へて本年は八歳になる。もう寿命は三年も
ないのだ。四十二三歳の時大患に罹り、運命
は既に絶体絶命であったが、遂に今日まで
も寿を保つことを思へば、いかにも幸福だ。
は六十を超へて、十七八年格別の違つて居ることも
を落ちたが、時々義歯を入れて、毎日
新鮮な視力も確かである。酒飲むことも喜くまず

榛原製

著作の能力も衰へて、毎年著書を出すこと
十数年継続してゐる。昨年の頃を振り返つて
較べて見ても、何も異つてゐない。若い時の無い山中
を住んで人と交はらずに暮らしつゝ、老境に入つた風
で、無いものと思ふ。係し人交りをしてゐると
生憎と自分が変つてゐることを感ずる。集会
の席などに臨んで見ると、自分は二三番先の班に入つ
てゐる。日々の新聞を見ても多くは自分より
年の少ない人が死んでゐる。西園寺公の訃報を見つて
其の年齢を数へて見ると既に六十を超してゐる。
のだ。自分は老を感じさせられる。
今の知る人で九十の齢を超へて矍鑠としてゐる

あることを思へと、まづ前途の長きことを考へ、[illegible]
日日に考へ、一生涯に亦いかに、なりそまで死仕方をすること
早いやうに感ずる。若し何人とあるまこんから先き幾年
生きるか解生とあべきであらう。自分は生を貪るあで
ろう、又息ある限り何事か成さんと頑張ることのみ
かり。あれら解生をムザ〳〵暮すものも惜しいやうな氣がす
る。何為ることもなく始て所を経つて生きるのを怒と自覚な
と言はんなら、自覚の生活ほど自分の境界が得らるべき
でない。身後の計画成つての解生ほど自覚も得られ
るやもしれんなれども、身後の計画から言へば成さんと
しないよりは人は死後遺文状などを書くが、自分は書い
ておくまこんを生き氣もない。全体遺文状

横原製

ものを書く人が多く主義主張のある人が家産の多い人
を限るやうに、自分のあることを持つてゐない。自分は長
い間放浪生活をやつてきて物来を受けもみず、今更放
浪生活を改めたくもない。遺文状を作るほど自覚自
分自分を物来することを欲しないから、これを欲しないの
だ。もし〳〵自覚の境界を長らへの私、自分を物来すること
とは自覚と義務からのである。自分の性来も金銭の時
蓄を知らないうえ且つ法を守んでも長らへ生びよ
く放浪生活を続け得ても怪しい人も成んが自分は来
ないと教着かるく、物を棄てる淡泊があるから家
まこんべ物を交るの折命或面かれ若集[illegible]九回者が
小数り手離しも其ものい十前回も及んでみる。これ

つて一家貧困家を放逐し兄弟を押口にすつて、合い一銭の負債もなく、自分の貯金の全いのが、同市の基集慰
い一種の貯蓄と見ることが出来ようと。此れ同五十五歳の
基集は自殺するまでも五年間ことごとく。哀残の後生まれ賊い
剰まれ或所もなく来書の意味は今い消尽したるも、地元いある丈
を消費し去つた日時に海渡れブードバイを失けるべき歟、如斯
い子孫と雖も無意味であるやらでもあるが、子孫の計を為
すことい子孫と思ふる所以でもある。子孫い子孫自ら
計を為すべきと、祝い其の在命中子を撫育して遺
憾なく、子の扶助を一切受けずして終えい、親の義務の
責任もなんぢ法律なんれとも務いるべきも自分自身も
親の遺産を一つも継承しないものであるから、何も無いから自

標原製

からが作つて今日まで至つたのである。四子孫をしても同一道を
踏ましめるが為めに、自立を勧
めることが親の合理的の措置である。これを以つて無慈
悲と云ふことあらば、人間日本の迷夢の覚めないか
らの事である。自分い家庭の主義主張いない保し難し
あるとすれば、こんな自分の身後に対する心係である。
（昭和十二年一月十日記）

○此度の印刷分配の祝として歌舞伎座の春劇を見た一番
目天神記の菅公左遷の場と時平牛車の場に、牛
車や牛天神などのかしらの干支と因んで此の劇
を思ひ起いたのであるが、実い菅公と牛の因縁がある
ともなく、当時貴族の車駕い牛を用ひたるものである

吉例

初春興行大歌舞伎

一番目　讃岐の国浦島の社頭　天神記二枚錦繪　二幕

中幕　鎌倉三代記　一幕

山崎紫紅作

所作事　春日龍神　長唄囃子連中　杵屋寅之丞　伊藤三郎　柏出演

中村歌右衛門
大谷友右衛門
市川染五郎
市川團右衛門
坂東村右衛門
坂東羽太藏
尾上菊十郎
市川瀧之丞
尾上竹之助
尾上芙雀

[illegible]が、[illegible]式の図式で天祈祀を[illegible]するのも[illegible]滑稽である。実の[illegible]牛の図式を[illegible]、歌右二つのやうな立働きの不可能な役優を出すさ[illegible]、北割でうけんかと[illegible]たのが[illegible]ナセうれい左[illegible]の[illegible]公は興を乗り、時平も赤牛車を乗り、其れ[illegible]りの歌右衛門つがつとめる。初冷天神記のつきまとしも杉王梅王桜の三兄弟が出場する。[illegible]左右二つ、[illegible]即ち[illegible]の三優を配したのも[illegible]が、[illegible]劇が面白い残端を残したあるものを見ておかしく感じられるのを引き興味を[illegible]れ、[illegible]三代記い三角義村と北條時政の息女の恋愛関係をあらいし、義村(初代[illegible])時姫([illegible])の[illegible]

榛原製

吉例 初春興行大歌舞伎

當る一月二日開場
毎日午後三時開演
初日 二日目 二時

一番目 曽根の曲浦 吉田の社頭 **天神記二枚錦繪** 二幕

中村歌右衛門　市村羽左衛門　尾上菊五郎
大谷友右衛門　市村家橘　市川男女蔵
市川染五郎　尾上松助　市川照蔵
市川團右衛門　中村七三郎　中村仲助
坂東村右衛門　坂東羽三郎　尾上鰕三郎
坂東羽太蔵　尾上菊次　尾上新七
尾上菊十郎　尾上琴糸　坂東笑三郎
市川瀧之丞　坂東飛鶴　大谷紫若
尾上竹之助　松本三四郎　尾上多賀蔵
尾上芙雀　中村歌女三郎　澤村千鳥
松本大七　大谷友美蔵　坂東鶴右衛門
中村梅花　中村時之丞　松本染升
中村駒助　松本高麗雀　坂東東三平
澤村淀五郎　片岡我久之助　坂東大三郎
片岡松壽　坂東三津太郎　尾上菊四郎
中村歌五郎　市川柏洲　尾上梅之丞
吾妻市之丞　市川若猿　松本錦四郎
市川團之助　尾上菊丸　尾上華幸
片岡大輔　中村播之助　中村錦之助
片岡義直　坂東又太郎　中村獅童
坂東光伸　市村太郎　中村梅枝
市川たか志　中村正太郎　尾上種太郎
中村兒太郎　中村又五郎　坂東慶三
岩井粂三郎　尾上梅朝　中村福之丞
市川紅若　尾上多賀之丞　尾上菊次郎
市川九蔵　澤村田之助　中村福助
澤村宗十郎　片岡仁左衛門　坂東三津五郎
中村吉右衛門　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門
尾上菊五郎　中村時蔵　中村吉之丞
中村辰之丞　中村吉之進　大谷力蔵
坂東薪蔵　中村辰右衛門　川女之助
澤村小主水　中村吉兵衛　中村吉右衛門

中幕 **鎌倉三代記** 一幕
山崎紫紅作

所作事 **春日龍神**
小村雪岱舞台装置
長唄囃子連中
杵屋寒三郎　伊藤出演
柏屋望月　伊三郎　朴清

中幕 **名橘譽石切** 一幕

二番目 **盲長屋梅加賀鳶** 三幕
河竹黙阿弥作

大切 **契戀春栗餅**
常磐津松尾太夫社中

御観劇料
一等席 八圓
二等席 五圓
三等席 三圓八十錢
座席 一圓
菊席 一圓

初日は上記の三割引

新年御観劇の特典
廿五名様以上の御観劇には御観劇料、御食事、繪本、記念撮影寫真等一切を含み……
一等席＝八圓四十錢（普通一等御観劇料八圓）
二等席＝五圓七十錢（普通二等御観劇料五圓）
△三百名様以上の御集りには大ホールの準備があります
△十人様程度の御集りには日本座敷を御利用願上げます

△前賣その他凡ての御用は
電話京橋自三一三一三一三五
△前賣専用
電話京橋……四七〇九……

凡ての御催には「松竹餘興部」を御利用願います
……電話京橋 七六七九番……

國劇の王座
國際の殿堂

歌舞伎座

木挽町
歌舞伎通り

難しく、義村が母方の父を殺せし逐と共の仇得
を掠すべき所が、志は孝らし重しとなれば、北条の
或は時流に相違なりかとも思つれば、七時勉合が異る
と云ふ事もまづ〳〵早く所〳〵なつた。

○御文反所宗光自筆の二本を賜る、一本は裏
表の詩帳、一は品山湯歌、後鳥羽の法皇の
す、丈枝殿の筆跡なり、宗の上なり、宗の中に北二本の内
乗院宗長法師帳、第四帳、帳面の意義一なるべし、
くく古跡の日本の春の、才一なるべし、北條刻は
新詩帳なり、奴めなり、是は共の法歌の内の中
一とうくうこ浸長二首の末と乗院の歌詩なり、北条の
孫なるべし、北の詩帳に曲り、山湯の歌一は往と云ふ歌

横原製

内の[illegible]文を屋に、只手本は即ち四こん也

東坡北海似李太白狂恐太白有未所
一義、北也五顔夢公指与四書面目
筆意、試像東坡後為之未見反此之
日為坡或之北也應只我於無佛堂
松尊也
北海云卷者と雪堂敬書の四大字なり

○ここの干支丑を男で前と牛乳のことを書いと見れ
が即ち武坊の牛なる新なる迷信いみ多く変ニテ生の
よれば牛乳実を大切ようして路殿らと家と迷い表ら
美を天陽に拵かりの拵物ことは誰の事へ

てみるが、牛の放尿に就て更に一言することゝ云ふ筆は、牛の放尿を二手に掬して家に持帰り、美を牛業とするかけるとゝあるが、どこまでも牛の排泄物を粗略にしるいのは、恐らく援及[illegible]は牛に生々力のあることを知から太陽の如く崇拝したからでもあらう。即ち牛を西北援[illegible]が佛の化身として或は牛を拝ひ切論の信仰を持ふしたんを牛を拝むすることを禁止することを禁止すると云つたのであらう。迷信的習慣はどこまでもあらうがこん日は極端の例だけで、牛乳が産婦に生々[illegible]大の役立をしたことが想ひ出されるる。

○銀杏の露結に就ては漢の倭洋は日本書紀を拾ひ出されて

樣原製

北面三の方ちこち概説を試みた。壮年時は漢学に熱心であつた。当時は別の感することもあつて、実は大切な国史のことは多くの書籍の編纂されたが、今を距ること二百年の昔しである。文献の不足の時代であつたから、如何であつたか。全部三十巻の特撰天皇の及んだ編纂された時が天武天皇の時で、勅撰で舎人親王が伝載せた十八年を費したと云はれる。全部漢文であつたから、修辞を備へた活潑の面白い漢文を読むことは、あつぱり相違ない。仲哀天皇人皇の想像されて漢文に書いた譯の当時漢文を意味したとも云はれる。或は日本の国体を支那其他に宣揚したとも云はれる。当時貴族の如き漢文を漢学の能力の無つた時、斯る文体を

傍信

遠人此のへ、外国に示さんとする意あつたことを不審とは思はるるまいが、実は意外と言はるる。古事記など
は何となく混り込雜駁の記録であるが、それは皇室の御事蹟を
根拠とした記録があつて、日本の国体をいはゞ歴代天皇の御治世
を知らうと以上天地の記録いろいろのものである。此の原案が無つたとすれば
日本国史の上代は奮い全く失せて、闇黒であつたに相違ない。此
の編纂を企てられた当時僅に存した、各人の私記と思
はるるものが、後世を傳へる資料であつたことは
のびあるまい。其の欠如せんとする資料が此の原案であり、これ
が、こうした後世に伝はらんことを思ふと、日本の史界を托
する実に彼天皇の大事業であつたと言はるるを得る。但
し後世から見ると此の皇記をいろいろ瑕瑾の見出さるる

榛原製

ことはいとゞ多を得ないが、其の瑕瑾のある故を以つて此の大
切の国史を軽んずることは出来ない。当時原案の状況として
はこれ以上に出ることは出来ない。私記完本の編纂されたとしても
其の文体の整頓が出来ない。二三を挙げて
年歴などの如きは、記憶に誤りを生ずること
の多きを免れず、年代を定めることが出来ない。
つまり稗史の類推して年代を定めるのである。
ば、つまり稗史の類推して年代を定めるのである。
配して漢国の事を記述した。聖寿を百七十九
歳と数ふる故を以つて混合したやうなもの
も多くあるやうに見えるのである。或は後世の見る所の記事の瑕疵
を見て、杜撰のものと言はるるものもあるが、これは割合に
き酷なる観察である。何んの歴史でも有り難のことは殊に上

代草味の歴史を病むべきものである。書紀編纂の古き
公家を主とし私意を挑し、其間経典の形跡は、外国の
書を参照し、私記もいろいろ挙げも
参照してあるけれども、武烈帝の残虐の御事
跡などは悪もも除くべきものあるのに、見てそ挙げを長る
ものもあるを主眼としたことが窺はれるのである。
日本の四史は漢語で書くのが本筋で漢語で古人の心の漢
の風潮が然らしめたのだが、当時は漢文を国訓を附し漢
語で読まるやうにしたのは、国の用意もあったに、実
は漢語に書いた原稿を漢文に訳したのだ。訓んでいかに分
るやうにといふ、漢文の方が解し易く、漢語の甚だ解し
難く全く新例の趣から、古来国学者は此の難解

複原製

の和語を解するに苦労し、漢文の訓読は、
り見かねる長部正義と江戸時代
の度会延佳、山崎闇斎の玉木葦斎が
公卿出身の河村秀根を任じ出世領の武郷の日本
書紀通釈が大成されたといふことである。
貴方の得た本は漢文を解して、見て漢語の
訓を施し、漢語の解を敷衍して、特徴を極の
ある所を示す者の学者と見るが貴方は二三日地方を歩
関して漢語を解する者を求めて漢語の注解の方
を伺ひ、貴方は貴方の注解の方
がよいと。

十一月一日
九の記

名士談話室

自覺と自批

市島春城

「若木の下には笠をぬげ」といふ、昔農村に行はれた諺だが、好い諺である。僅かに發育したばかりの木は、丈も伸びず如何にも弱々してゐるが、決してそれを侮つてはならぬ。忽ちの間に伸びて、亨々天を摩するの大木となるから、若木に敬意を拂ひ、脱帽して樹下を通れと云ふ、後世恐るべしと云ふ意を寓した教訓である。

兎角老人は若いものを輕侮するが、老人は青年を輕侮してはならぬ。青年も亦自らを卑しめてはならぬ、卑屈は青年の大禁物である。

青年は他日どんな偉い人になるかも知らぬ。青年は英傑の卵子である。

私は、人一人の力がどれ程のものであるかに就て考察して見たい。人間は微々たる一小蟲であるが、其力は往々國家を動かし、甚しきは世界を動かすものである。歴史を案ずるに、ナポレオンは世界を動かしたではないか、その英雄が英國の壯年宰相ピットにやられたではないか、ビスマークは一人の力で獨逸を背負つて立ち、列國を戦慄せしめたではないか。

「ムソリニー」や「ヒットラー」は伊・獨を各々一人で擔つてゐるではないか、如何に一人の力が偉大であるかを見よ。

豐太閤は卒伍より身を起して天下を一統した。頼朝は平氏に助けられたばかりで、遂に覇府を開くに至つた。

學問や藝術の上に就て見ても、一人傑出したものゝ思想が、百代を支配した例は、いくらでもあるではないか。

近頃は兎角人間の集團に重きを置くが、そのために一個人の力を往々閑却する。一人の力は集團の力に及ばないと見るものもあるが、それは必ずしも眞理ではない。

英傑は一人の力で集團を動かし、稍もすれば五大洲をも動かすことを思はねばならぬ。

一人の存在が國運の消長に關する一例として、大隈侯の逸事を想ひ出す。侯が維新の頃國事に奔走中、幕府に忌まれ捕はれんとした時、江戸の前橋侯の藩邸に逃げ込んで助かつた。侯はいつぞやこの事を語つて、前橋侯は自分の再生の恩人だと云はれた。

私は曾つて前橋の有志者と會した時、此事を語り、若しあの時侯が捕はれたら恐らく他の勤王諸士同様の運命に出遇つたかも知れない。侯が非業に斃れたならば、維新の鴻業にあれほど寄與された功は何もなく、國家はどんなに損をしたことであらうかと、侯一人の存否は國歩艱難のあの當時に、如何に大なる關係があつたかは、委しく語るまでもなからう。

一人の力が斯くも偉大であるからには、何人も自らを輕んじてはならぬ。事實に於て、誰も彼も英傑となるとは云ひ得ない。が、さりとてそれが絶望でもない。

從つて、志は大でなければならぬ。自敬自重が大切で、青年は自己を作り上げる事に努力せねばならぬ。

近年自覺と云ふ語がしきりに用ひられ、國民はまるで夢から覺めたかのやうに、自己をしきりに振り廻し、他人も亦それを認めて、どんな地位の卑い人に對しても、曾ての如く呼び棄てにすることがなくなつた。

これは自覺の反映で、誰れも自己認識があつて見ると、他人をも輕蔑することが出來ず、いくらか敬するやうになる。

これが世界大戦以後の傾向で、これがため子供が親のいふことを聞かず、更もすると橋を突く。職工や傭はれた人が、工場主や傭主の命に服せず、學生が校長に抗爭するやうな頻りと起り、天地が全然舊時と變つて、人を使役する者、人と共同する者が餘程面倒に感ずることになつて來た。

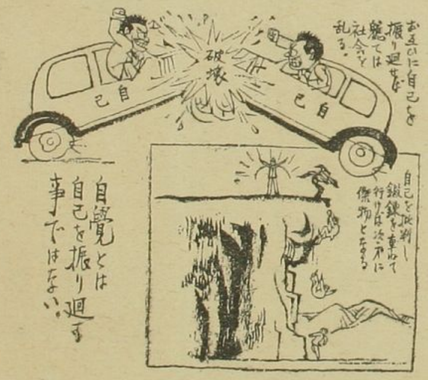
これがもつと甚しくなると、社會の綱紀が全く紊れて、收拾の出來ないやうに、なるかも知れない。

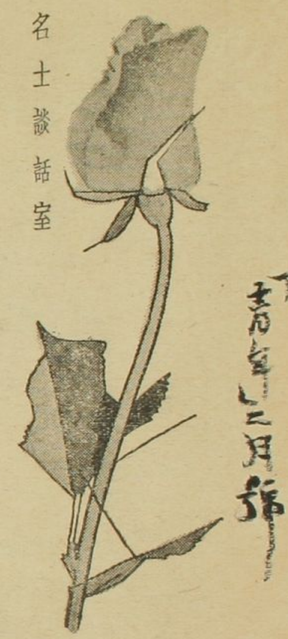
全體自覺はわるいことでない。己れの本分を知り己れの才能を覺ることは大切なことであるが、しかし自覺は案外むづかしいことで單に自己を知つたからと云つて、それが自覺でない。自己にはいろ〳〵の相があつて、己れ自から愛想をつかすやうな醜面もある。自覺は自己の美醜、長短兩面をよく心得て、その美なる方面を本領としてその上に立つので無ければ、眞の自覺でない。

自己を認識することは自己を空うすることの反對である。自己を空うすることは、人に服從するから之を御することも容易であるが、自己を認識すると、自然自我を張り、己れを主に立てゝ事に當る、だから人に傭はれてゐながら服從しないことがある。

瑣々たることが氣に喰はぬと云つて爭ふたり、我儘勝手を云ふたりして、これを御することが面倒となる。下手に御すれば反抗するし、甘やかせばつけあがる。

これが人を使つてゐるものの難題として個





名士談話室

自覺と自批

市島春城

「若木の下には笠をぬげ」といふ、背憂村に行はれた諺だが、好い諺である。僅かに發育したばかりの木は、丈も伸びず如何にも弱々してゐるが、決してそれを侮つてはならぬ。忽ちの間に伸びて、亭々天を摩するの大木となるから、若木に敬意を拂ひ、脱帽して樹下を通れと云ふ、後世恐るべしと云ふ意を寫した教訓である。

兎角老人は若いものを輕侮するが、老人は青年を輕侮してはならぬ。青年も亦自らを卑しめてはならぬ、卑屈は青年の大禁物である。

青年は他日どんな偉い人になるかも知らぬ。青年は英傑の卵子である。

私は、人一人の力がどれ程のものであるかに就て考察して見たい。人間は微々たる一小蟲であるが、其力は往々國家を動かし、甚しきは世界を動かすものである。歴史を案ずるに、ナポレオンは世界を動かしたではないか、その英雄が英國の壯年宰相ピットにやられたではないか、ビスマークは一人の力で獨逸を背負つて立ち、列國を戰慄せしめたではないか。

「ムソリニー」や「ヒットラー」は伊・獨を各々一人で擔つてゐるではないか、如何に一人の力が偉大であるかを見よ。

豐太閤は卒伍より身を起して天下を一統した。朝廷は平氏に助けられたばかりで、遂に覇府を開くに至つた。

學問や藝術の上に就て見ても、一人傑出したものゝ思想が、百代を支配した例は、いくらでもあるではないか。

近頃は兎角人間の集團に重きを置くが、そのために一個人の力を往々閑却する。一人の力は集團の力に及ばないと見るものもあるが、それは必ずしも眞理ではない。

英傑は一人の力で集團を動かし、稍もすれば五大洲をも動かすことを思はねばならぬ。

一人の存在が國運の消長に關する一例として、大隈侯の逸事を想ひ出す。侯が維新の頃國事に奔走中、幕府に忌まれ捕はれんとした時、江戸の前橋侯の藩邸に逃け込んで助かつた。侯はいつぞやこの事を語つて、前橋侯は自分の再生の恩人だと云はれた。

んでゐる點である。兎角自己認識はずん〳〵進んで行くが、自己批判するのでなければ、唯だ自惚れるのみで鼻持がならない。併し自己批判には相當の倫理的能力を要する。

又或場合に相當の勇氣と忍耐を要する。これが自己認識に伴へば自覺も結構だが、兎角片輪であることが病である。

然らば如何にせば自己批判を公平に行はしめ得べきや。矢張り教育の力に依るの外はない。文化の進んだ國には、自覺の興奮のあるのを憂へない。その譯は一方自批がそれを善導し抑制し調節するからである。

青年と誘惑

山室軍平

ある時一人の青年が私を訪ねて來た。彼は風呂敷に一杯の、眞面目な雜誌や書物を持つて來て、私に見せながら言うたのである。

「私は鄕里の中學を出て上京し、某專門學校に籍を置くものであります。上京の當座は學校の餘暇に、こゝに持つて參りましたやうな書物雜誌等を讀み、眞面目に勉强したのでありますが、二ヶ月以前に某新聞社の刊行したこれ〳〵の書物を讀みました。さうして東京の片隅に一種風變りの場所がある事情を詳かにし、よせばいゝのに、それを見物にまゐりました。

一度行つた時は無事に歸りました。二度行つた時も辛うじて無難に歸ることが出來ましたが、三度目に遂に捕虜となつて、誘惑に陷ちたのであります。またゝく間に深入を致しまして、その結果學業はすさむし、身體は衰弱にかゝり、國元の父はもはや學費を送つてやらないと申します。

先生、私の生涯はもう駄目になつたのでせうか。まだなんとか救はるゝ道があるのでせうか？」と。

彼はおど〳〵しながら、忠告を求めるのであつた。卽ち彼は、讀まんでもいゝ書物を讀み、又知らんでもいゝ消息を知りたいと試みたために、誤つてかくの如き徑路を辿るに至つたのである。彼は誘惑に近づいたために、誘惑に陷つたものと言はねばならない。

支那の孔子は「少き時は血氣未ださだまらず、之を戒むる色にあり。その壯んなるに及びては血氣方に剛し、之を戒むる鬪ふにあり。その老ゆるに及びては血氣既に衰へ、之を戒むる得るにあり」と云はれた。

つまり、青年時代は性慾のために身を過る者が多く、中年壯年の人は喧嘩口論、公事訴訟等のために、面倒なことを惹き起す場合が多く、老人に至つては、慾得づくの算段から間違ひを起す者が多いから、之を注意せよといふ意味であらう。

これは大體から見て、極めて適切なる忠告である。

凡そ誘惑は誰にでも來る。この世に生きとし生ける人間で、誘惑に遭はない人は曾つてない。

「誘惑に陷らざるよう、目を覺まし、かつ祈

「苦難の下にこそ偉人は出る」

行はれた藤田男爵、好い、好い、藤田男爵！

・藤田男爵・

名士談

賢明をもつてゐるから、若し藤田男爵が、後世恐らく藤田男爵ほど、人生の教訓を與へる人は、若くは無いであらう。

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

藤田男爵は、「苦難の下にこそ偉人は出る」

○私の流行用いはさめデパート見物し、種々のまゝ用
がとまるの新しきの羽子板の集部であるから、自然羽
子板を高価に買ひ求めるやうになつたが、羽子板形の額
を作り、中に小袖や千ウタメイクを入れた日無額
用もいろいろあるを見た。北の家のやゝ優美なる、蓋に主
流る押絵で飾られてあるから、両家をえりすぐれし羽子
板としても仕用が出来るやうである。祝儀物の絵柄
の服紗が新に裏らす用のうんとあるが、出来えるが
高価が施さん、一寸見ると気が魅惑が三本家
えつめてあるこうるくるが、実は鶴亀と酷似の色
の布物を巧みに節形に折畳んだのである。香包
なども布物で出来てあり、甘納豆を家に詰めれ

複原製

ばこうの観を呈してあるこれも流行の一つか、こんなどいか
ヤツキのやうな小紋のある絵柄を利用した人の
目を驚く趣味で、個性あることは日本特用の美術
であるが、なるべく巧みであるので一寸感心させられた。
為と世の中が実用本位となりてきて、七面倒な包装や箱
詰などは粗略となりてきた。也ばかりでなく京都がまんで
鄭寧で高価なハボ！と第で済ますものを高価
をかくし木の箱を用ゐてあるやうな差がある。古かし柴
薬でも反新の気分ある所が近来漸やく若き人
道を加へることが或る方面に流行り出してゐる。菓
子屋などで千代紙や錦絵などを美事に貼りこん
だ箱を菓子に使用してある、まら婦人子を

素材を数多くで、白きく箱を使ふて工風してあるが、総合手数のかゝつたものであつて、外部は美麗な紙を貼つてあるが、内部は別段の工夫もなく、或は二段三段重箱を快く入れたものもある。一段造りで心づかひ細工もあるが、北海道は数多くの菓子屋いの家もあるが其一例で、勿論洗練の二重三重の重箱なども出来てゐる。こんの時分のことであるから、四五日前から行はれ出してゐるが、寒冷などの引菓子を折詰めるものを粗略としてゐる。相当の菓子鉢は菓子を詰めるやうなことが行はれ出し、客の之んと珍重かつてある。交換用し取扱ぶ清酒の文庫おるいは雑節を納めて進物とすることも行はれてゐる。白き箱を珍重かるる取向であることの

複原製

同一である。

衣服の寸法切を利用して袖度数を整理することが行はれ出した。白きつき、手の箱や針の箱や玩具箱、裁縫箱等を作んで貼りつめたものゝ如きは、女用の小品年頃の柚子机の引出し、豆棚の戸袋などに応用した。若し客の注文に応じて樹を作りのしれない皆女子の素人であつた、千代紙の奥やたゝみの奥や中一などが著しやうなことは、既に今見るのは工匠の細工で、一点もさんとみるが江戸趣味の後法と見るべきである。千代紙などに紙屑を入れるのは十年程前から見へるが今は廃程も出来てゐる。白紙に絵を描んで人を驚ろかすものもあるから婦人は素人の包丁方が技味的であるから婦人は素人

細工は見事が生命であるが、今日いえんを得るの難くるる。適度の半切の模様が面白の如き様式が変化したから、サヤ形や口紅皿の半切の復興を見るのが、分秒の文業を経るの長遠かかくれ、一下吹き新都のさくらるから出した文業の一隅るの彩色を施した常都名所の美絵の風があり、新の風も全面を極彩色の絵があり、近い一時婦人子を美しい人物東京を来たのれが、絵を浮屋のある風俗あるのが、業つたが、北の冊子の巻者を初めとやうん、沙の曾信を限られたいのるが、其の用実を絵模様のあるのを見たもの江戸趣味の復興気運が盛に着取もとる。

江戸時代のは金米糖の箱を焼絵を絵を

刷ツクりしたが今はそんな間のるかこと云人は、自分の変化をるこ

橋本蔵

とを考と深田のうち間のなんで居たが、筆圧、極彩色の鶯蕪の抱き合つてある絵をくんれ。その葉まと小鳥を彫板化したものが、其驚嘆の絵を考えると面白く業をかけ出すと、古風橋の風景が深世絵の描かん彩色を施したものが、雪かんもあるが、今僅にそうん多働人れの多のは浅黄の鳥屋の金田び、主就山の三十六の手中行事をパートを画き先に可が添くも印刷さん、其の気に印象を見相応するものを用ゆるものを任しるる。固板を印ゆる意は休人れが、印刷術の進歩とともとの商店の宣伝の印刷物は一般に繁栄をるつれることは勿論である。世相の推移循環の一端を示すと関る任セ

東京新聞

無政府主義事件へ初の治維法適用

組織、運動方法の特異性

平等自主所謂たる理想郷を夢想した今回の農青社運動は等しく動いによつて國家新の實を擧げようと計畫した點、從來わが國家革命、或は革新運動として度度か國民の心臓をからしめた三・一五四・一六、五・一五、神兵隊、近くは二・二六事件等左右兩翼に属つて類發した大小革命運動と計畫及び目的達成の手段において共通してゐるが、その組織、運動方法に至つては著るしい特異性をもつてゐる、しかも同じアナーキズム運動でも先に檄擧された相澤尙夫一派の日本無政府共産黨とも全然異なる體制をもつてゐる點において またわが國無政府主義運動に治安維持法が適用された最初のものとしてわが思想運動史上特筆さるべきものといはれてゐる、いまその特異點を擧げると次の諸點である

△**組織** 一、自主分散―中央部、長などゝ名づけるものなく從つて上層部から指令が發せらるゝことなく一切が自由平等でしかも自らがいづれも主となつて各府縣に分散し各自勝手にそれ〳〵の地區で主義の徹底に努力する

二、ハウスキーパー、オルガナイザー、レポ等特殊な連絡機關を持つてゐるといふ實踐的見解

二、自然發生的に蜂起し同時に都會人への糧道を絶ち革命の波を全國に押擴げて都市文化を根本から破壞するため

三、陰謀が暴露して檄擧の手が延びても分散主義であるから中心を失つて運動が潰滅することが無い

△**方法** 一、主として農村に働らきかける―その理由

一、農村は檄擧の眼が比較的遠いといふ功利的見解と農村の生活は政治、法律はあつても無きが如く從來の慣習として村民の共力作業によつて生活が維持され、無政府共産主義の要素を最も多分に含んだ「萬事」寄合ひと會合によつて以心傳心で運動を續ける

複寫

危かつた信州各都市

資金稼ぎの銀行ギャングに失敗

窃盗團で一萬數千圓

先づ同年八月十五日東京市中野區野方町農村青年社のアヂトで宮崎晃以下首腦部が會合し全國各地から多數同志を信州に動員、長野縣小縣郡大門村、上伊那郡富縣村を革命中心地として同縣下一齊に武裝蜂起し、長野、松本、上田、上諏訪その他の樞要都市を燒き拂ひ同時に交通通信機關を破壞して、軍隊警察等の急援を阻止しこれをアナーキー全國革命の導火線たらしめんとの計畫をもつてこの準備資金、武器購入費等十數萬圓をつくるため銀行ギャングを決行するとしとし銀行襲撃用のピストルを入手すべく資金は鈴木晴之の指導下にある相澤尙夫昭和十年十一月檄擧された日本無政府共産黨の首魁に託したが不能に終つたので更に屢々會合しつひに第一グループ宮崎、望月、平松、第二グループ星野、村上の窃盗團を組織して忍び、空巣、掻拂ひで一萬數千圓の資金を得、以來運動は俄然活況を呈するに至つた、一方、わが國に於ける革命の完行その他多數の文書を出版し一般にアッピールすると共に各府縣同志と頻繁に聯絡策謀し既に蜂起可能の水準に至つた地方も少くなかつた、この客觀的情勢に對應するため、田代儀三郎は上海に渡航して急速にピストル、手榴彈等武器の入手に奔走する一方、中央からは星野幸二、八木あき等の指導分子が頻繁に入信し下諏訪町龜の湯、上諏訪町、大門村等に重要會議を開き着々一齊蜂起の準備を進めたが、八木あきの如きは同志を伴つて松本聯隊に入營中の知人を訪ね内偵するなど準備は尨大周密を極めた

右方針に基き宮崎、八木、星野等の入信と共に同縣下同志は全面的にその新指導方針に共鳴、機關紙農村青年の配布をうけて活潑な活動を開始し日常闘爭を通じて意識分子を獲得、左翼陣營の潜落と共に一般的にアナーキズム的思想動向を示すに至つたが

特に

富縣村伊澤八十吉は村青年會、農家組合に潜入して多數の同志を獲得する一方『富縣時報』の指導權を握り、これに農青社の主義主張を堂々掲載し思想の宣傳、意識水準の昂揚に努め、大門村鷹野原長義もまた大門時報に農青社の主張を載せ、村内急進分子獲得のため宮本武藏、荒木文右衛門、思田巖等の講談本の如く表紙をカムフラージして農青社主義の出版物を回覧し又炭焼小屋を利用して座談會、研究會を開き多數の実践分子を獲得、加藤陸三は幼稚園の園兒からアナーキズム思想を注入し國家、國體觀念に疑問を抱かせねばならぬと幼稚園の設立を計畫する一方信州黒色青年聯盟の結成を準備し実践的な意識の宣傳擴充に奔走した、かくて漸く同縣下の運動の發展性を望み得るに至つたので、昭和六年八月中旬八木あき子は中央から重大使命を帶びて入信し松本市外浅間温泉に縣下同志の會合を開き

情勢を聽取した後蜂起地區を確立

整備し革命地區として佐久地方以下七區に區分それぞれ責任者を決定して組織的統制ある同志の參加を得るに至つた、當時農村は繭糸價の暴落により農民生活は極度に窮迫、思想的にも非常に動搖し不況對策運動としての自然發生的な農民蜂起の情勢を生みつゝあつた折柄なので、八木あき子の報告によつて客觀的、主體的條件の熟したのを看取した農青社指導部は時機至れりとし、全力を擧げて信州に農民暴動を捲き起しこれを全國革命に誘導發展させんものと企圖した、無政府主義運動がかゝる戦慄すべき大陰謀計畫にまで及んだのは實に幸德秋水一派の大逆事件以來はじめてといはれてゐる

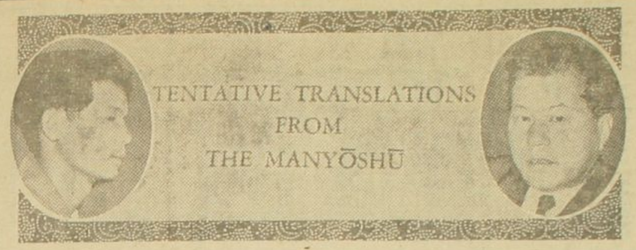
裏面へ續く

原製

物の盗賊を厳しめ人の出入をきびしく禁じて外からも内から家を修める人間の修行室をも行商を始め人々ことを恐れて家族の入ることを禁じ男女をも禁ずる。西洋家屋の地下室がありて、いろいろの秘密がこの内に潜むが、日本家屋には縁のない秘密がある。土蔵の穴蔵などの地下室などがいろいろ、秘密の物がここに蔵せられ、探偵などの見通かさるべき所とこの中の物は家の家屋の光りを拝借して秘密を保つ。不思議な秘密を望と見せかけ、まことの秘密の実があるこの方法は坐の犯罪と関係の無い方面であるが、あれど未だ人へ知らせざる秘密の実がなくてはいけない。況んや外出を恐れ隠遁を望むものは家を捨てて、秘密が生命である結婚をもって家を捨て隠遁する者室内にあるべきなり。

横原制

元心と思ひ出すべき便利なる天地もこれを居り、秘密の犯罪を隠す者の家、富貴、奢侈、贅沢、腐敗、堕落、盗賊を隠す所、秘密の場所が多く、天井裏で往来隠し所となり、犯罪者を隠す所、地下室、地下室、地下室



萬葉集の世界一英譯成る

努心苦るたわに本日る諸に界世華精の學文典古本日る諸に界世華精の學文典古本日る諸に界世
巻一第で本華豪の冊二全判大　たつなに事るみを版出のれ晴　成完に中年本々愈てつよにカ
にチーペ右を首千歌名はに巻二第　等史歴の譯續語國外び及畳語物植動圖地　記傳論總はに
歌渡の士博治正崎姉員委篇編夏今　向意るせさ照對を歐原で字マーロにチーペ左せ載で文英
るあて定豫るめしらた版出大的際國てし刷印で地同し壓に肆書流一のンドンロてし托に

【氏畑小が右　氏井石が左内圖と字題本稿の集葉萬譯英は眞寫】

我が國古典の壓卷

ロンドンで上梓

四年振りに慰勞會

今回の英譯萬葉集は昭和九年學術振興會によつて企てられ龍博士を委員長に東大から姉崎、辻、市河各博士、京大から新村、鈴木兩博士、東北大から阿部教授、民間から佐佐木博士の合計八名の委員が同年六月から特別委員會を組織して事業開始、全二十巻中から翻譯すべき原歌千十四首を決定し英譯者として外務省囑託小畑薫良氏と埼玉縣粕壁中學教諭石井雄之助氏の二人を選んだ、爾來兩氏は相談役たる東北大の英詩人ホチソン氏及び土居光知教授とラフカヂオ・ハーン翁の弟子小花清泉氏等の熱心な盡力により各五百首の英譯に沒頭したかくて一年半振りで翌冬十二月初め英譯を完結したのだ、その間に新村、姉崎兩博士は萬葉集の總論を執筆、また辻博士は各歌人の傳記をまとめ上げた、そこで同委員會では來る十九、二十兩日神田如水會館で協議會を開催し印刷その他の具體案を協議すると共に四年ぶりで最初の慰勞宴を張る事になつた

大體三月までに最後の推敲を終り前記の如くロンドンで印刷發刊させる事に内定してゐるが、校正は全部日本で同委員會が嚴重に責任擔任するため發刊は本年末になる模樣である

〝手間どつた〟

小畑薫良氏談

萬葉集の英譯は日本でも宮森麻太郎、岡田松藏兩氏の抄譯があります、私は從來の譯を色々參考にして委員會の方針に從ひ自由詩の形式で現代語譯を試みました、一昨年四月から着手して昨年六月頃終結する豫定でしたが何分第一譯集、第二譯集と改譯する毎に印刷して委員に配布し毎月一回の協議會にかけるので手間取り漸く翌冬十二月に完結しました

昭和十二年一月十四日　東京朝日新聞

○近年早中の盛容多くの
と呼ばれ人々の井二位
八八の部家係譯を生じて
ん事結の多折角奏多
子馬路祐任表弱表
やつと四比多機と生れ
と空まの名前半歳
一生をとして研究を社会人
原因の複雑があるが、一口
子人会とこ
ろの比とこ
があるが学校の

中等程度の教育は校長の為すべき仕事にしてこそよい
教育もちゃんと得ることがあるべきに、皆様で廃制すれば
校長は[illegible]後人を出さうとしても、それが行はれず、果たして
長や教員が迷ひ出すべきものである、早中の新の給費も
必ずしも[illegible]原因であるとは、出来の悪い行ひであることが
[illegible]概のしきことをうらやましき人をして教育家を校
長に奉けることが最も大切なることで、それを得ないと
義務教育に信頼すべきである、法律面の行政がある
ものとうくうくうくうくそれが教育を毒する例としてこ
この大波を知らずして、早中の祝賀会は昨日開かれ
た、貴会も社会をして出席せしめ[illegible]
の以上の文章は女海化家の才一にしてこれは梅口一葉

複原製

うつ、貴会の北の女子の閲歴を知り、学つて筆録したこと
もあれど、其低い一向に淡々、偶々話河文学校
集を得たれば、四五編の論と淡々たる北の[illegible]
さてある。今さも才筆なれども、文体は古雅なれども
あの女史の和文や和歌をもなほ
あの高時面影の文法行もしたんがその創作者もあ
り、今さの行のん難い文をんで、女の作の多くは考
北ことで、女の作の多くは考察
をもり[illegible]なるのに、どれも
[illegible]と雅を得てある點は、流の筆として[illegible]
か、荒しを寿を保ち得たらば、
しもべし明の早世とは。

文の徳をとゝのへがたきものは「新古今月」の一首なるべし

生

世が心の何方に走めるかも知れず、乳に飽きん時は乳房に顔を寄せ、寝入る兒の頬に薄紅さしたるやうなれば、何ものを捨てんとや、わゞ曲くる口元の愛らしさ、肥えたる腿の二童たちまでも、斯る人さんある身を、我れ二心を持ちて洒あやまきやゝ、わめさら二心は持たぬまでも我が良人を不足と思ひ、ものゝ上にはかすかに、はかなく、橋姫の名を忘れぬ限り我れ二心の不足のあるべき。

兒を静かに寝床に移して、かはやをさら立ち去る。

眼ざし定まりて口元かすかに紅ひらめき、墨の色れも定まり、心ざすは何物ぞ、菖蒲の庭に花めかるゝ一二枝の花を打返しし浅黄絹の帯揚のうちに立直し、数のれは十二通の文を出して元の座に戻り、慌のかはゆし時きを捻ち出すまもとして名ある殿の名、よく一送名なりも北眼に感じ変るまで、今の世おしを解かざるべしは我れ、ちゝと心をしと湾りなる淺はかさゝ、胸のうちやゝ動き射る矢のおそろしく思へば、年性の振舞ちゝ、身の行ひ清くあれ心の腐りの業雖くば同じ不足の身ちゝなれ、辛さ、ちゝ心試しに挿し、春ちゝ、殿を我心を

又後、我が良人も御後世よ、
祈もおはしまさば我家を捨て止まると御後世も
よ、佛もなく我が北手元し近うて御後世よ、
我心の清めるか濁んるか、
封じ目ときん取出せば一尋あまりん筆のあやもうて、
荷雖きこ事の数々、辱けなきるの山々、思ふ、寒ふ、
忘れがたし、血の流、脳の炎、北苦のみ家を絶
横こ敷くん、文字いやかて年の側に恐ろし
き彫りを呼くるかし、一通に千もとあるを巻
数めば、二通七回しく三通四通五通六通七通八通九通十通十二通例
数の色かはるえしかば、八九、十通十二通例
きて涙ぬ、よみて一通、又字に目を入るあかひ

複原製

くも消えるまぬか。

・・・・・・・・・・

涙この可愛き兒の寝姿みん、膝の上こい無情の流よ我ひを
折捨て後ふかと、殿の御形ちくしく少をて、外面こ
良人や戻ん更けるまに雪さもし、ひとへに我が良人
今北窓に戻らせ後ふと、我人に恥ふしさん面あかを
北窓こ文を吸りかくすべきか、恥こ心の疾しけんば
り、行ふは隠さん
殿今もし北窓こおはしまさば、例の辱けなきし御河の数こ
さて根ぬん増々の色ひて御形ちくしく、さて物体な
き御命いまを限りとの後ふと、我へに北眠の動ん
の外、北胸の騒ぎんものか、動くの音えひき悲ふ

聽くい下れ恵〜けんかう。

（下巻）

○毎日二回位牛乳と蒸パン来る、郵便物のはがき、今此紙行商庶旅館などの宣伝書が多くハ一見直ちに反故紙にすべきものなれども、住書ハ傷痕して他ハ毎日大きな紙屑籠に移して焚料とする、ちんがらくらく少きもの、且つ年々増つてあり、此の反故紙のおく物の包紙となる入り来る、ボール箱やボール紙や濾紙や、木綿や麻屑などの類も皆な焚料に供するから、特に日清を沸かす用ゐと竈を炊いてゐる長家とい、大抵一日溜まつたあの用ゐ竈の中で仕末さるから、敢て目障りもつうるのハ、荒しきまで

複原制

も積み重ねられとしれら、隣分目の上のあかることであらう。毎日定時に行のる大掃除の時家前に掃き出す塵埃、紙屑や行きの廃物ハ、家ごとに多く大家に到る少きのに、小屋に居る人が狭く仕末がつかないからであらう。此行のまい大家ハ自分の家の如く家賃を築かすとも、何等かさ少く風かあるのに小屋よりも廃物の排出が少ないのであらうが、実い排出物の量ハ家の大小や家族の多寡に比例するこの事である。俗しかも庭と言ふ名称を庭とすることあるのであらう。

からい概に家の大小の比例するとい之いのみならず、私い学生と何とかそれ一ヶ月毎日

[illegible]

[illegible]と云へば恐らく最貧の家を量産し得るであらうと、此家ハ味噌のみ何を買ふ力もないから

紙●紙一つ云、記録係者がうちとまが何一つ化を言も
来るまいまい。一斉の引札すら斯る家まく死んでこな
い。一家い全く空虚び掃き無てるのが全然ういのが最
貧民の状景だ、こんを考くも見るに、毎不用のものが死
び込んだきを席を乱すことをうるさがるるが自家の仕合
せを心得ぬまあ云いさるを得ぬ。多くの廃物が出る家不
び実い家又餓死があるかくもあると思べ、又を幸福と
のしと自殺しばかりまんるもあるて、個さう人家ばかりでなく、
市町村まを市町か新家すんべきまるもの廃物が多く
なる、去年るどい年るどん死どこ廃物が増加するか、見の
統計を調べても見るまいが人口数が増加隨て殖へるのいも
死でもあるから、近年の場合が年八死者のほうが多い。

榛原製

例と御国の新聞紙に柏崎町の廃物が記さん
とあるまんの去の切切抜の通りで、去年の町の廃物と
比較するいろんが、都下年で増
加する廃物の多きかを
見を想見すし得るべあらう。
ゴミのも家が家や町村の廃
物をトし得るとまん、ゴミの

柏崎總ゴミ量　柏崎町も近年急激な進展と併行して生活のレベルが引上げられて行く關係から逐年街のゴミが量を増し現在人夫十三名に運搬車六臺が不休の活動を續けて居るが十一年中に於ける柏崎全街四千九百三十三戸から搬出された總ゴミ量は二百九十六萬九千百キログラムといふ數量を示して居る

ゴミとあても実い単純でもの基所から出るゴミの
内植物廃無数るどのもいが、而例ばからゴミ中植物を入
るからえを埋めてもらいが自分の家まハ畑があ
れもあくと腐敗して臭気を放ち夏時ハ蝿を生ず

すると、直ぐ毎日ゴミ車が各所各戸を訪ねて、バケツに入れ人々家前に出しておけば、それを車に積んで行くから、ゴミ箱は殆ど不用となるが、この流れを各戸衛生上の仕合とでもいいたいよい。自分の母校の相南の庭をみるしもあるが、秋のころ落葉が堆積し、年二度園丁が庭掃除の手入をすると、枯枝や枯葉が堆積する。枯枝や落葉は竈の焚料として或は畑の埋めるから、どうせ片づくが、北のゴミの分量は頗る大きいもので、定期の大掃除は自分の家から出すゴミは北数である。

自分の家は毎日出ない未だ大きなゴミは紙屑であるが、それは竈の焚料としても有り得るから、

榛原製

ゴミと称せられて、最も多数と云ふべきものは、都市の事務所、官庁、会社、商店、一般家庭等から、一定期間保存したる相当の量となる雑物の内でいい保存するものは、古紙とも云うべき、これ相当の分量となる。屑屋の手を経ずして、全くゴミとなるものは、屑紙の内封書紙はいい習慣的保存されるものが、年賀状の如き及ぶべき物質を迅速に検査をつけて、つまり不用屑屋の手を経て運命のままである。端書紙はいい保存の習慣がなく保存しようとの思ひもなく、毎年の賀状と称ひ七、八千枚となり、これも森羅一種のゴミである。

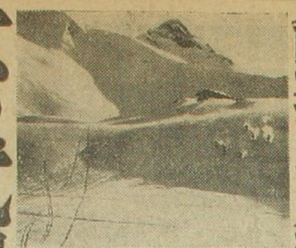
ゴミの内で最も高級のものは書籍である。書籍をゴミと云ふのは勿体ないが、毎年一回ゴミと同様の扱ひ、之

あを仕末するからゴミと呼んでゐるのだが、えんは随時集積する
後ち来る或る人のパンフレットに、二年宮田さんは現在海あや
うく近刊書、早大出版部が刊行する学徒の講義録
の数でこんなのはゴミとも言ふ或年の例を生ずる。何人か
る一年の内毎日他ふ家を集る近刊書が二百冊以
上も溜るので書架が一杯となつて終る空所がなく
なるので勇気を揮つて不用品を焼却することも
あを得ずの但し和漢の書籍は北堂ひとりの人の
雑誌の数七千冊も溜まれば数十の書物を見れ
ばゴミのやうなものだが、こんは今の整除の
しるべ。

火災は忘れべきものだが、ゴミと掃除する方法大なる

法である、貧の幸をして生涯の内常つて火災を罹つた
経験がなく、絶つてゴミを食家を相続した多いが敢て
火災を一掃りて掃除を欲しまい。

○本年は維新から七十年、富士が創まつて五十年ところ
を紀念する時、国家の進運を具体的にあらはさんと東
京市大阪毎日両社は陽春の候を期して政治経済人
を聊俗まんことを企て、今年(一月十四日)の日誌の左の如
く発表した。こんなことを見きき改善を要望する事の出
つサハの発芽を新聞紙に招き要望の指導を仰
かんと社員を一新した。山来デパートと今伝えし
注意衛の後援でいろくの長続分不日折を別人さ
んとあるから、陳列の注験は長を待人ひとみるべきあらうが



シムプソン夫人

蔣介石・宋美齢・張學良をめぐる ロマンス夫人

動乱支那の現狀

婦人に意外に多い不感症の秘めたる

血統の不安

中年婦人の髪の若返り

女の武器

文學、音樂、映畫、舞踊、美術その他婦人の教養として の近代藝術を論じ女性の眞の武器を示す！

私生兒と母子保護法

南米より紐育へ

藤村夫人 島崎靜子

室生犀星

與謝野晶子

私と宗教

私は宗教を知らない、けれども自づから一つの宗教を攝んでゐる

誰か狂へる？常人か狂

女歌

時事總評

二月の映畫

（女だけの都その他）

二月のレコード

女性月評

内政的にも外交的にも國際的注目の國の現狀を解剖す

太田宇之助

青野季吉

・物價はあがる

・國債と金の茶釜

下田將美

北川冬彦

あらえびす

・英帝御退位

・妻を賣つた議員

山川菊榮

一つの心境（僕の頁）嶋中雄作

婦人に意外に多い不感症の

スキー一年生虎の巻

□スキー・エチケット　今井壽美子

□スキーおしやれ指南　黑田初子

□スキー撮影速成科　鈴木八郎

特輯・子供

□私はかうして

□成長を失つた

□健康への道

あなたの血ににごりは

相手に血統の不安はな

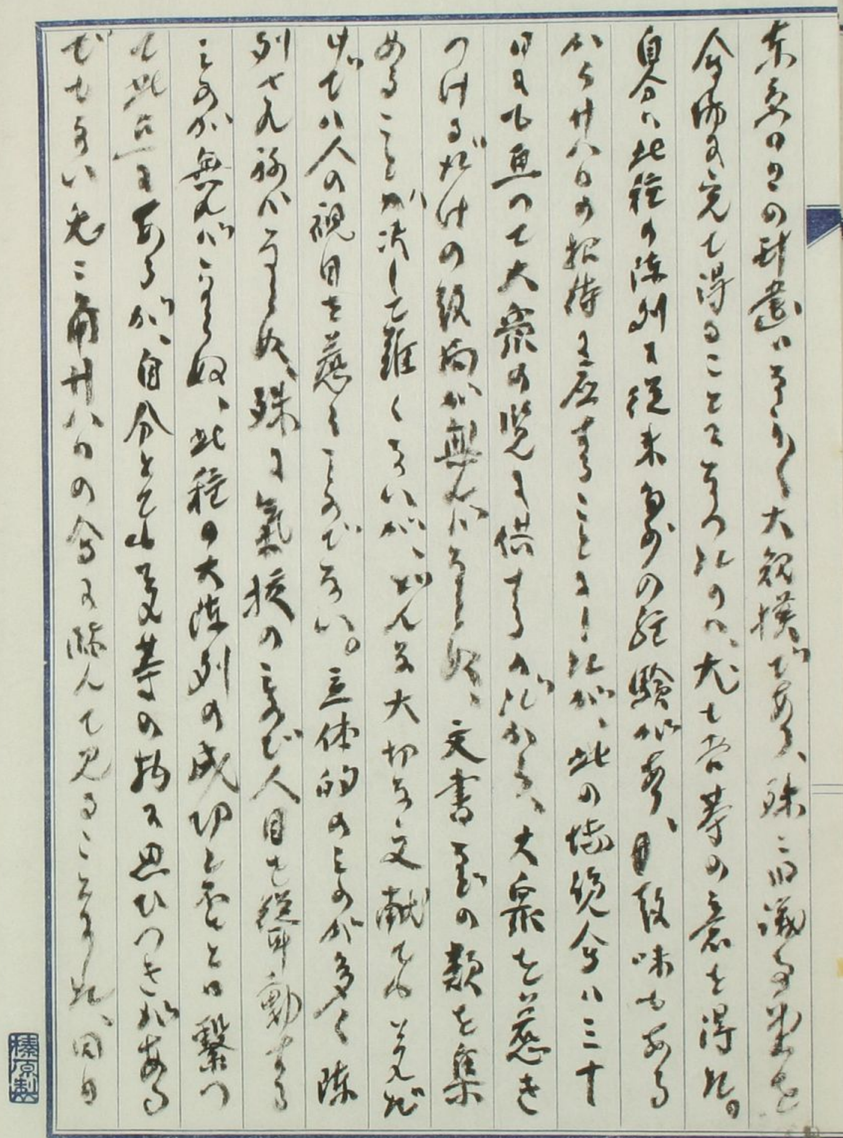
統の不安』に惱む人々

就學兒童の爲の健康な家具　豐口自

裝身藝術の指導（色、形、調和コン トラストの解說）　松永イ

驚異的な男女たらしめたい！ 申し込みレコード等を巧に取り入れる仕組で、少年少女は勿論、一般入場者

戰線狀況を如實に見ることが出來るであらう。 直撮日本の



容陣の"會覽博治政"華豪

貴重な文獻資料・一堂に動員

主催 本社

昭和十二年の開幕を期し、編輯事業において本社主催の下に憲法博覽會開催のことは既にしてあるが、いよいよ明治維新以來七十周年に相當するのみならず、憲法發布五十周年を明年に控へ、議會當局においてもすでにこれが特別委員を設けて、記念施設を行はんとし計畫しつゝある折柄でもあり、ひとたび本社において『政治博覽會』開催を發表するや各關係方面は固より、一般大衆はこれに多大の期待を拂ひ、極めて時宜に適した企てとして讃辭を寄せられつゝあるは、本社の期する會心にたへぬところであります。加ふるに、今や、新聞事業の成るあり、あたかも躍進日本の樂滿と壯大とを象徴するが如く、燦然として帝都中央にその威容を誇る。この時、明治、大正、昭和の三代を貫流する興隆日本の躍相を一堂に盛つた「政治博覽會」の開催を見ることは、最も意義の深いことゝ謂ふべきか自負する次第であります。しかして展觀に供せんとするところの文獻諸資料は、これを内政、外交、軍事の三大部門にわかち、その配列按排に最も苦心を拂つた結果、大體、左のとほり取りまとめんとするものであります。

憲法館

光輝ある三千年の歴史の上に一新紀元を畫して躍進の第一歩を踏み出した明治維新――五ケ條御誓文の草案から始まつて憲法發布當時の貴重なる各種文獻、明治廿三年議會開設當時を語る各種の資料等々を網羅し、憲政の發達經過を說明して、余すところ無からしめようとしてゐる。

軍事館

(陸、海を含む)無條約時代に備へるわが無敵艦隊の全貌――無條約時代に對する關心、なぜ今日に至つたかの經過をヂオラマ等で表現した上わが海軍所感の精髓二百卅余隻の各種種模型を陳列して太平洋を睥睨した一大場面を展開せんとする。また、陸軍は本年恰も陸軍始まつて七十年の意義深き年に當る。この間における編制制度、兵器變遷、被服、糧秣、衛生等の沿革を語り、全陸軍を擧げて戰つた日露戰爭に重點を置いての大出品。

交通館

「駕籠と馬」の乘物時代から飛行機、飛行船、グライダー等の航空機の發達、川蒸汽から蒸船を誇る歐米航路の優秀船時代へ、陸と海と空の交通機關の七十年の躍進の跡を「時代を語る遺物」に、或はまたパノラマ、ヂオラマ等によつて「われらの足の發達」を示さんとするほか、飛脚から郵便に、さらにテレヴィジョンなどの科學時代へと交通文化の史的陳列を整備せんと期しつゝある。

滿洲館

東亞の新興國、滿洲國と滿鐵の出品を中心として、全館を五族協和の五色旗のもとに王道樂土を示す。滿洲國と滿鐵は昭和十二年度以後において日本からの移民を大いに奬勵することになつてゐるので、この機會に際し、新興滿洲國の興味を惹くことであらう。

『興隆日本』を描く

絢爛競ふ全十館

外地館

伸びゆく日本――新日本の版圖は南に台灣、南洋、北に樺太、さらに朝鮮と島嶼を伸び擴げたのである。今や日本外地における躍進は、政治に、軍事に、花々しい發展を示してゐるが、この外地發展狀況を朝鮮、台灣、樺太、南洋等から重要物産を取り入れるとし、土人が驚愕に感激し、皇威を謳歌して日常を喜々と生活してゐる情景を目のあたり展觀に資するはすである。

國際館

世界は今赤と黑の對立を示してゐる。ドイツ、イタリー、フランス、ソ聯、スペインをめぐる赤と黑の旋風と複雜なる世界情勢を一目瞭然たらしめん計畫で、更にまたムッソリーニ氏、ヒットラー氏に關するもの、動亂支那では近代支那の指導精神をなした孫文氏に關する資料を筆頭に、蔣介石氏を中心とする現狀を說明せんとし、また國際スペイの活躍、英國戴冠式に關する資料等、通俗的にわかり易く示さうとするものである。

人物館

明治維新以來「躍進日本」に貢獻した朝野の人物、或ひは女性を網羅した凡そ百傑を選定し、その個々の人物について特色、人間味、交遊、家庭、各方面から國事に奔走せる資料、遺品、記念物等を蒐集し、これを大體の年次的に配列し、最も意義ある活躍場面をつくつて、見るものをして摩天楼たらしめんとする。

更に日露戰役以後、今日までの國防の情勢を示し、回顧的のうちに現代を知る豐富な資料を蒐集せんとしつゝある。

外交館

黑船來で德川三百年の夢を破つて、明治、大正、昭和――と對外的に躍進した日本を知らしめる外交館。開國、交易以來、日本が諸外國と折衝をもつてきた躍進ぶりや、日清、日露兩戰役における外交秘史、さては條約上の歴史的機密文書の公開、國際聯盟の脱退から滿洲事變に至るまでの外交上におけるその時々のエッセンスをとり入れて、一目直ちに躍進日本の外交全貌を展開せしめんとする。

地方館

地方自治發展の狀況を、各府縣が秘藏する郷治資料、門外不出の逸品等を一堂に集めるほか、産業發展、優良町村、自力更生村の活躍等をも取り入れて、伸張する地方自治並びに産業興隆狀況を一眸の下に配列したい。

議席等の施設

會場内貴賓院においては、玉座親觀をはじめ、議席の狀況をそのまゝ展觀に供する。また衆議院會場では會期中絶えず各種の催し物をなし、維新史に關する觀覽者の史話を初め、政治講演、映畫、明治七十年間の流行歌、その他政治關係にふさはしい各種の趣向をこらさんとする。

協賛館

滿洲、外地、地方、交通等の各館における陳列によつて、躍進日本の姿を見て協賛館に入れば、現代日本が持つあらゆる部門の生産品の實物――各種商品、重要工場等が一流商店、會社、工場等によつて協賛出品され、躍進日本の躍進狀況を如實に見ることが出來るであらう。

東京日日新聞社・大阪毎日新聞社

所望社員募集規定及会費のあらましである。

順不同

大森洪太殿
渡邊千冬殿
市島謙吉殿
長世吉殿
田口弼殿
大熊喜邦殿
尾崎行雄殿
元田肇殿
三上參次殿
松平頼壽殿

德富蘇峯殿
尾佐竹猛殿
藤井甚太郎殿
竹越與三郎殿
古島一雄殿
濱田國松殿
芝葛盛殿
伊藤痴遊殿
近衛文麿殿
富田幸次郎殿
岡田忠彦殿

自分の自身衛を南つてこんら迄試みに往年の陸列會を
つき思い出るまくを書きつけて見ること、自分が早大
の図書館長であつた際、度々往の図書の陸列
をやつた中で、可成注意を惹いたのは馬琴の
遺書原稿全部であつた。彼義を馬琴の遺
が多くあるからの故である。勿論他所のものも借り
て来た。いつも貴の折んさの本を借りて
出つこと、迷の公開覧をすることで、彼等の目録を
御覧ました。
自分の試みは陸列だけでも成功したのは文明協會で日本
文化の進運を探討する會で、大震災後も行つた。拾角
移入れ文化が、其の後無と歴史する念

かゝ、どんなものか文化が誰の力で伝つて成つたのかを知らうと
考へる長い間日本の文化を育てた基礎は本来外人の行
跡を研究した一冊子を書行した位に過ぎない此の陳列
品の最も意義ある仕事であつたが、陳列品の中に
えまむ彼等と称される学者が世に出ない、維新革命
以後の種々のものが始めて出た。維新史研究の史料と
して最大切なものが出たことは実に驚くべき
事であつて、今衆人の目を驚動させた其
際の写真は数十枚今者掲げてある。
大隈侯爵の遺品を大隈伯の陳
列した時も東京の五橋夫衛と帝つた。大隈家では
何一つ秘さうとはしなかつた。

複原製

から勲章も多くの親戚で陳列した。遺品
御筆遺墨の被服等あるものが出たので、
大いに注目を惹き家族に関西でも北海を偲す
ことゝなつた。大阪の大丸呉服店を今始めとして
数多の海外に出張した。
新聞の最新と称ん、英一蝶が有ると自分も持参
出張した。新聞者の熱心な勤かさんは今
物の人口に到を使つて居る人衆に停車三時間の間
人びとも別に若干も云はなかつた。自分の陳列の新
記者も感ずして接拶かたく説明をした。記者の
あるものは、もう新聞を通じて関西
迷い来つた。実に勿体ないと感じた。

つゝ住び、北の貴重品の運搬するに相当費用もかゝり、心配もあつたが幸いに無事であつた

大隈伯爵が報知新聞の社長であつた時、同社と海世界の原稿代を借りた時、利息本高と倍額を載きこまれくの家とせと目合せ番号であつた

こんの時の大親様の海外の家の賣代は大抵出来さんが、色々な伝記もあつたお蔭もあつたであらう。こんの入物料を取つたのに、報知新聞の収入も多く大成功と云いたいが等委員は出郎さ相談もあつて為り茶菓の費と金子、赤字の異常なる銀杯の賞を受けたことがある

複原製

○大阪名産の名物川柳の種俗三味線名人を讃み古川柳の三四をあげます、

葉鶏頭不動に負ぬ立姿

大根に取巻かんとする二階家

本家へも形板をいふ迷ひ所

洗ひ髪干す向祇代の立姿

大般若醤油の手物をしたくり

迷ふ子に拘の言ふ迷ひ旅

盃の流れ矢の立つ拘あ

盃い夫の顔を見て受る

去原いお行に持て入れい所

立身を妨げそうな男振り

○夏の例として或時浅草市街を出て、散策する、其都度見て面白き或る特種の展覧会を見ることもあるが、何人の目的もなく唯漫然と徘徊を歩く、立ち寄りトんで茶一杯を飲む、或は何人を誘ふて、何人の目的を定めて、何人の高尚を鑑賞することが多い、何を見て目慣れないから異を感ずるやうなことはあるが、或る時二三外人のあるのを見て、アト考へた。彼人こそ邪魔と目慣れないから、何人の高尚を定めるのが、外人が見たら何と感ずるであらうか、デバートに出る外国の貨物等と共通の点は、外人の邪魔と同様の用品があつて、

複原制

外人の初めて来るものが多い、自分の傍らを外人と知つても、観察を試みることは一興であるが、さて外人の目に何が異様に見えるかと感ずる、彼が彼等に対する心と共に、立ち寄る毎の時いつも、自分の家つてある未廃でありたい自分でもきく教育者未廃で大現在の傍を廃女術種を疑数しても歩くの

をめて芝へ行かうと外人で

そこで、ちょうどこれに入り集る男女老弱の者を以つて数人間の傍観者の如く何とも、

赤丸

赤丸をもつて示す。ちょうど風俗の人心を見ることが出来るかと北物所に初めて来る一番日本人の概観を得るであろう。北等群衆の中に外人の目を映するのは女装であるが、デパートの中心は呉服であるから、女装は模本として多くの人形が美を凝し

奚隣の交情を立つてゐる。葬儀外人の学ぶあこがれである、友禅
もちりめん、縮りめんまでランダに端物するそうな出さんとゐる、
金襴の帯地も天保の金部の日乙くるやう飾んもある。尚は婚儀
の女装のかき嫁礼の席列るるでもきけんべ見ることの出来
るまいまが此の場不るもいくつも飾んもある。婚礼附属のあ
で外人の目に映ずるあい祝儀物のもあるる。縮りめんび
心の如翁や丈化目出度さを種数象する武多の作り
まで絢爛目を奪ふまがあつて、日本特有の風俗である。
尚は雛人形などの外人の目をどう感するかいらるのが
大きな室一杯に雛や附属品を陳列した雛市の
光景を恐らく外人の眼を惹くであらう。更らに絢爛目を
奪ふものとあるまんが金色燦爛たる佛壇、珍珍無下の神

橋原製

輿などもある。既其の数ゐい羽子板が載るどが載る千
千と騈人である羽子板市も喜観びあらう。
絢爛のきやいやうるまく目を惹きやすいが外人に珍らしく
思はるるものは却つて日本家庭で使ふ家具調度
であらう。夜具蒲団箪笥鏡台持を初め石端の台所道
具などで外人の学ぶ見るものがいんるびあるるが腰
桃等の食器を始め火鉢、アンカ、釜、竈、風呂、日本家
庭に住した経験のあるあい眼の物数多の外人は徒に日本の茶儀を見たがるが
芸者の踊を見たがるが、美妓の用
ゐい珠を外人の想像を出来ない石端のものがあつて、穀類の一切
業びも無数にも南つてゐる。殊に寿司を日前

[illegible]も歓迎する傾向にあり、食堂その他の用器類は外人が多く飲食する[illegible]
[illegible]の状景もそうである。更に工匠の用具とする
と大工[illegible]の用器類はもっぱら外人の眼を惹くに足る[illegible]
[illegible]が少くないようである。カンナ、ノミギリ、ノミ、マサカリ、テウナ、北等の
[illegible]が外国のものと様式が異っているため、外人の目を惹く新しい
を使用して日本人にはよくも器用に巧みな建築をやる
と不審がるであろう。五百載を経た所の外人の足を絡
め放ハうとしたのの盆栽であるから、ホンの一鉢の
[illegible]、山河森林家屋[illegible]千万を本
を配置して完から自然の風景を縮模することは
日本独特の芸術で外人の知らない所である。
点等が不素人ながらも、僅かに外人の立場をあ

内外風俗の異同[illegible]ような物を楽しんでいると思うと面白い。
の代物の半分位くらい以上外人の目を珍しがるものであろう
[illegible]私は考えるに、外人がまた日本の風俗を知らんとするに殊
に[illegible]日本を賞さず、極めて短時間に[illegible]の観察した
ところ、デパートは迎えることが捷径であると、数年
後のリンピックの大会を本邦に催す場合の第一次の数
へる歓迎外交が来るであろうが、彼等[illegible]に別庭を
[illegible]帰れしても日本の風俗を徐ろに知るための地位にあるまい。
彼等をも偉[illegible]二三日の[illegible]も大略を手取り早く
紹介しうる場所はデパートが一番であろう。多冷[illegible]南の
ガイドをあるまいことは加冷[illegible]歓待の意味を
以て迎[illegible]南方面素と異行まくきいて[illegible]。[illegible]外人の[illegible]特

化法を借りて陳列をしたと外人の興を引くこと甚大切であらう。外人の日本に来て見たがるこの日光、ちゃうど日光の模型を陳列すべしば、絞芽の見たがるこの封建時代の武具、甲冑刀剣の数を陳列すべしば勿論日本国産の進展を或る方法で示すなどは格別面倒のことでもあるが。絞芽が多忙の間に我国俗の一端でも理解し易を興あることとして喜ぶ人も沢山、こんなデパート奉公をすることが出来るなど考へたのが、教育中の一考察であつた。

（月廿日記）

○以上を第一部四篇俗説今の日本的な陳列ものを内示せしもの今が高砂とあつて高砂を交はしたこと一度経過したが、これは日本のデパートとまつて全く外行きのようであつた。いろいろの品物を日本物のように陳列してあるこの外国の趣味をもつてゐるが、殊にロテスクな感、日本味をもつてゐるなど木地で日本を出来神社もあり日本の木地を作られたものあり、自然外国風の椅子テーブルであることは敢て見難いが、きて来て四畳く花瓶などもあること、此等を陳列の色彩などに舞踏会などの時人の目的でもあるが、舞踏会の色彩の変化の寄結の結び人に芸能が何等趣味もなく、見て全く日本の貴族的用ひられないものであるコンナ日用品のようを出すのいとんでもないものであるが、程々の漆器などを見れば外人の趣味を主とした為の義と日本の物を

八淺印さんとある。世に武を以て立つ人形を造る工程漆器と
と称する工程をも標示されてあるが、コンナもの
もモット極めて下手の意匠のことを標本
とするとのことと思はれる。大体これ所では日本産
の特色を示す為めの陳設品であるが縁遠い。以(四)
の方面や貴族達の目を楽ましめるかもしれないが、真の日本
風俗と実生活の用いられてゐることを獲ないとする人々
は、寧ろ田舎の風俗を素朴の露はれと実生活の日用具が
歓迎を受けるだらうと思ふ。コンナ陳設品ならば陽明を
も恐るゝに外人は日本風俗を何等感ずる所もないだらう。
なぜならば日本の古代文化の方が寧ろ優れてゐるからである。
と思ふ。西洋版味を補充致着するあるのみ

日本版味その儘を見せることを外人も恐るゝに、日本版味と風
俗を理解することを思はんとする。
○私は二三日梅風閑話を読んでゐるこんな西家梅風の子
迷が、父のことを書いた随筆である。私は梅風の才業
を感じてゐるのだが、実は交のかなりあるらしい。就て梅風
の履歴などを知りたくもあるとも思ふ。あまり此者を読んで
面白く感じたのは、著者が洞也いろゝ相手の文章を有
する事柄、子息で而も女の説く所は敢て父を物くらうが
目的でもあるらしい。父を崇拝するのが主眼のようでもあるが
又なるべく父はこうしたこと、或は世なる学問をも、思ひ出さるまゝを
無駄四角はらずに、淡泊に書いたのは無味があるの簡単な
書き方は、俗化さるを吉とこれ異のもの秩序も定まるもの。往々父の

欠点や失敗や短所まで筆端から漏れてくる。そこに天真爛漫の味があるのだ。マトモの価値を知らない人間にとっては無味乾燥の人物を失敗し、批評家の筆ぶりは無記名が体裁のいい失敗を免かれて、穴子があいたことあるから書生の誤りが多い。奥さん方と北海道の筆法とはどうも作り物臭い。泥臭さがあるから繁昌しないが、繁昌した価値を獲得いうがある。美人多く現書生は偏屈、変人まで人が変な書いたりそれを誤印するやうなデテールの書が多い。北の些事は本体を忘れるあまりのあげあいけんで、却って美が本南の書をあべいはず、北のデテールは本人をそれ云いうことである。而して美が男人の性格や男人の性癖をあらはすもの北海道の人と信ずる側面を見逃さない者

榛原製

りがあるが北海道の側面観の我物顔であって、正面をもとらえようとしないことが印の一側面観が浮山のある。北海道味を北海道の内弟子と称するあの乃ち師の家庭の起伏も朝夕観察し或は親人や教第子等の本陣へ入りやうまあがり師の心持を飲み込んで他の弟子ことを得をする。必竟師が陰時まあまる長所をもとれあのの方の弟子ことを得をする。北海道の者は内弟子ことを親しみ乗る親しみ親愛の背内関係があるから義務的よりも仕心を長ずるあるから男女関係がかくまでもあるから、男女関係を得ることを長ずるやうに思ふの栖風自力としてい味しくおしらいのことまれ世ある。栖風自力としてい知って美をさらけ出して多分の栖風が後人で、変人を馬鹿げた者と思いれうと丹頂鶴の風立ち、或は天機を漏ら

迄きゝうしにはやうなことをいふ限りないであらうが、そこに真実もあり、資料としての貴さもあり、又淑人と異味もあるべきである。私人の伝記の発展するにはこれが基礎を成むものであり、此行のうちを能く知り、多くの知り合ひを結ぶことが、自分の注意を惹いたことがあるから、夫人は平素の生活の模様を書き綴の置かうと思ひ立つたのである。若し此の夫人無かりせば、多くの日デテしまひ、良人の人々の記憶も絶滅や時代の感想や其の一喝一笑までも捉へて残してあるから、自分のゴレヨンリンルボスウエルのやうな記憶の細部を有つべきことを想ひ、文集あるを思ひ出したことがある。

複原製

事もまた一つの歴史であるから、此言行録を感じたことを記して、小家は雪が降り花が咲く大の日数部が、八雲と記憶されて諸家と活動を進捗文を集めて出版したが、其中で最も優秀を誇るべきは八雲夫人の談話の業績であり、可愛ゆしい、あの花が家庭の模様を、ばかりでなく、文学の方面及び、確かに歴史の稱賛の値することがあつた。元来婦人は男子の様のつよい細かく事を輝くる能力も有してゐるかと記憶が特別に鋭利であるの概して藝術家の心を所道と集注する傾向、ある事物に就ては全く敬心であるかと時を刻を遂しある言行を概概むるの意義、個心が而して終始女人を待するが無んかうして此度この話も能のある夫人は雖ども教書の以上であることが八雲夫人の談話と係りを伝播致そうんだ。

[illegible]

一月廿三日

日露戦争の終を受けた廣田内閣は重大使命を[illegible]現なんとしが、帝国議会の初幕に[illegible]もろく倒れた。外から倒れたのでなく内から崩れたと云へば安当かもしれぬ。準戦時なるべき国家の危期に当り、秘策兼ね備へ開国以来未曾有の大紀摸の案を立てるうち、見使命を果すべきはずの議会[illegible]政党の紛擾で脆くも潰くれた。何故に政府は其位置を[illegible]と曲直を問はず後進退[illegible]ようとしたのであらうか。政府の政策

の[illegible]を見ると勅皇二日間の停会を命じ、一見の議会の解散を内決したと傳へられたが、興論の理由なき解散と非難し、閣員中にも難色あるかと傳へられ、永田海相の如きは、政党と陸軍の間を調停を試みたるも、政党は後和しても陸軍は絶対強硬の態度を崩さず、政党特に[illegible]は[illegible]の不統一を来したと[illegible]。時局[illegible]を考慮する[illegible]。大時局を控へ[illegible]政府の進退[illegible]と許さるべきであらうか、[illegible]の進退をつゝめて[illegible]解散も決してなおそれまでである。永田海相の調停努力は決して故意[illegible]の[illegible]事の変を利用する陸相が政党の挑戦に応じて政府をして停会を[illegible]

セしの、[illegible]と陸軍ハ背後の強制ニ支配さるゝを飽まで海
軍の補佐を拒否し以て不統一を生セしめたのが、内閣崩壊
の主因である。回顧すれハ政友内閣の成立ハ初組織セらるゝ時陸
軍ハ閣員の所出を拒絶し喰へ込み、殊ニ政党者の入閣を
実現させ喰へ込み首相ハ元ニ角忍耐を辛抱して内容
を但見ることゝなつたが、再組織陸軍の意を迎へさせんが
政務の運転が出来ない情勢で、未曾有危大の緊張
を陸軍ニ与へるかまた略を庶し
たのハ、時局の難しきを湛さるを由るといふ、実ハ陸軍
の強硬なる主張を雖も結果であつて内閣ハすべて陸
軍ニ引ずられてきたのである。[illegible]
陸軍ハ内閣[illegible]と云ふが安南であるとまでの心、吾等

ハ政府の行ふことかと常ニ心配をしたが国
ゝ引き出政府を崩潰しまつたのも又陸軍であることを、
吾等ハ今ニ於て政党の[illegible]戦の可否を批判することを
ハ、斯くまんが斯くなるものと知りつゝ斯くせざるべ政
党の面目が立たないと考へるのが政党の立場止むを得
ないのであつて、政党の[illegible]殺すかあつて遂ニ憤怒するに
ないと云ふ訳ハ、陸軍の強圧の批難ハ政ニ陸の[illegible]
ニ発生したを陸相ハ法治ニ立ケて雅量を示し
のであるが、同一陸相ハ前ニ[illegible]後ニ発生するハ何故
内閣の交迭ハ或ハ必要あるも[illegible]折角立て[illegible]軍備[illegible]
の決定を延ばすことを今日の危急の時局ニ於て陸海軍の
為ニ有利とハ思ハれない。後備内閣ハ立て組定[illegible]

して、[illegible]解散い必至に陥いんとするのは、[illegible]寺の
通過が難いからの事にて、陸軍は解散の後果[illegible]
る自信があるのであらうか、今の国際時局は大きな軍備
をなす必要あることを国民が納得まんば、政党は一概に反対
しるいであらう。美を納得せしめず、政党の念怒
を来すの結果を出ることが果して国民の納得を得ずして
あらうか、表等い陸軍が進を政局に進出して、政治を
混濁せ任験せるに拘り、国は寸毫疑を今後の政局
に徐想して懸然たらざるを得ざる。

一月廿四日記

○二十三日内閣が後藤内閣の首班は廿
四日の夜西園寺公に依つて奏薦があり、宇垣大将に大命
が降下した。えらと先き後藤首相候補の下馬評があ

つたが、宇垣は候補の内の一人に過ぎず、軍部の忌避
する所であるから、恐らく西公は之れを忌避けるであらうと、
表等は楽観したが、楽観のよいことは今つもあれば
があるので政党要のよいことは今つもあれば。憂志かし政党
は受けがよいが、実は政党嫌ひの軍部は陸軍を
ハ之を受けがらない。志かし宇垣は志ばく陸相として入
閣した経歴があり、陸軍の先輩として陸軍部内の
事情に精通してゐるが、常つて軍縮の先鋒軍部の
試験を破つたことがあり、実は根強いつもの陸軍は宇
垣嫌ひで、宇垣が志ばく内閣首班に成ることは今日に
至つても北の障碍の為めであつた。斯る事情にあるも
宇垣を今次西公が推薦したのは深慮の存するこ

が為とて、此月さき宇垣い閣歴と識見力量とに於て軍部を政堂を押しがキくと西公の見れのも無理いない、陸軍と政堂が西南衛戍をやつた後を収めしまる北人が主任となれるあらうが、北人が大命を拝すると、堂の人集れよく政堂は共後感を以つて西公に従令代表を南洋と国交とを支持を辞さないと云ひ飛界を牡をも活動が、ひとり軍部も出界く反省を表し、陸相を西園寺公を拒ふの意を漏らしたのも宇垣始ひの陸は一意向の宇垣の大命を拝すると共に暗礁とうつた歌りんをき出。貴公とは北多を移武れることもあるが、扨て陸軍は何を理由とも忠誠するかと云へば、粛軍を亂るとの事が理由であるが、元は軍

標原製

此日実力思きないのが、毛頭ひが真因であらう、宇垣の果しても之んを如何に處理するか今の家の分り難あるが、或は陸軍がいかに條件を持ち出し宇垣が見を宥めれも、ケりがつくが、能まず頑強に反抗しも蔵と組閣を流産とするらしいが、こゝ二三日の推移を見ないと解の実は立氏の時南の相つた形勢は軍部が政局を干與して横暴を働くことがあつても、之んを治めるとすれば、今後の政局は安定を得ないのが、宇垣の使命は北の難局を拾ひ出すことが、恐くは西公の養嗣の真意もあらうの宇垣は果して之れを収拾するの平静があるかどうか疑問である特別に重大なる陸軍庁の癒着の数まるまで、早く決断せねば死に道すく危険があるのだ

一月廿六日記

軍部政黨の融和に
宇垣氏は最適任者
西園寺公奏薦の事情

西園寺公は後繼内閣の首班として前朝鮮總督陸軍大將宇垣一成大將を奏薦したが西園寺公の意圖としては廣田内閣瓦解の經緯が少くとも現下の時局認識に對する軍と政黨との正面衝突、殊にこの危局の收拾方針に對する陸軍と海軍との忌むべき對立と云ふ憂慮すべき一線を辿つたといふ不祥事實に照らして後繼内閣首班の詮衡に當つては時局の安定

擧國 一致の實現と強化、軍民對立の禍根絶滅を期して具さに熟慮した、候補者として一應園公の頭を去來したものは宇垣大將近衛公、平沼男、南、林、末次、大角各大將であつたらうがこの呼聲の中から遂に時局收拾の最適任者として宇垣大將を奏薦するに至つたものである、即ち園公の詮衡つたものである、即ち園公の詮衡に對する根本方針としては

一、後繼内閣の首班は軍部と政黨との衝突を緩和し更に進んでその對立を芟除すること

一、國民の輿望を自ら一身に負ふ如き幅廣き人物で政治的手腕と政治的經驗を有する人物たること

即ち前二内閣の首相は岡田、廣田兩氏共政治的經驗少く手腕に欠くる所があり所謂ダークホース的の人物を拉し來つた結果時局安定策に失敗を來したがこの失敗は園公として今回の詮衡に當り大物主義に赴かしめた、後繼内閣の首班は現下の軍部を中心とする澎湃たる

革新 意識、革新政策に全然無縁の人物であつてはならず、相當程度陸軍の革新政策を實現し得る人でなければならぬ

一、現下の複雜なる軍部内を止しき意味において指導しかつある場合はこれを押へ得る人物でなければならぬ

一、形式上外形上の擧國一致でなく實質上の强力擧國一致内閣を組織するに足る人物たること

以上の詮衡標準から園公は昨夏朝鮮總督を辭して悠々伊豆長岡に閑居中の宇垣大將に白羽の矢を立てるに至つたものである、園公の此決意に先立つて過後内府は廿四日朝平沼福府議長と會見後繼内閣首班に對する議長の意向を聽取したが平沼男も園公の方針と完全に一致し人物についても宇垣大將を推薦したものである、園公と内府に加ふるに陛下の御諮詢府の最高地位にある福府議長が一枚加はつて

時局 收拾に與つたことは、齋藤内閣瓦解後における重臣會議と共に特記さるべく今後における後繼首相奏薦に對する新例を開いたものであらう、今回の後繼首相の詮衡に當り中老公の頭を去來したものゝ中

平沼福府議長は五・一五事件後既に三度びの政變毎に常に噂の前面に出て來てゐたが、同氏は既に責任政治の分野から去つて福府議長として陛下の御諮詢府内の地位に轉じたものであり殊に今後の後繼首相の詮衡には内大臣と共に重要なる樞機に參劃すべき立場にあるので老公としては一應考慮はしたものゝ結局樞府議長の地位は原則として恒久性を持たしめる方針を堅持したによるものである

林銑十郎大將は閥軍の一部で擡ぎ出しをしたが現實には殆ど問題とならなかつた

陸軍 部内で要望された朝鮮總督南次郎大將は朝鮮總督の地位から直接に首相の地位に持つて來ることは困難であるのみか朝鮮統治上面白くない結果を來すことが憂慮され遂に現實の問題とはならなかつた

海軍の大角、末次兩大將も多少呼聲もあつたが、今回の政變の直後だけに海軍出身として園公は現實の問題として考慮外に置いた樣である

かくて園公としては宇垣大將の外近衛公、平沼男、南、林、末次、大角各大將であつたらうがこの呼聲の中から遂に時局收拾の最適任者として宇垣大將を奏薦するに至つたものである、即ち園公の詮衡つたものである、即ち園公の詮衡に對する根本方針としては

一、後繼内閣の首班は軍部と政黨との衝突を緩和し更に進んでその對立を芟除すること

一、國民の輿望を自ら一身に負ふ如き幅廣き人物で政治的手腕と政治的經驗を有する人物たること

即ち前二内閣の首相は岡田、廣田兩氏共政治的經驗少く手腕に欠くる所があり所謂ダークホース的の人物を拉し來つた結果時局安定策に失敗を來したがこの失敗は園公として今回の詮衡に當り大物主義に赴かしめた、後繼内閣の首班は現下の軍部を中心とする澎湃たる

革新 意識、革新政策に全然無縁の人物であつてはならず、相當程度陸軍の革新政策を實現し得る人でなければならぬ

一、現下の複雜なる軍部内を止しき意味において指導しかつある場合はこれを押へ得る人物でなければならぬ

一、形式上外形上の擧國一致でなく實質上の强力擧國一致内閣を組織するに足る人物たること

以上の詮衡標準から園公は昨夏朝鮮總督を辭して悠々伊豆長岡に閑居中の宇垣大將に白羽の矢を立てるに至つたものである、園公の此決意に先立つて過後内府は廿四日朝平沼福府議長と會見後繼内閣首班に對する議長の意向を聽取したが平沼男も園公の方針と完全に一致し人物についても宇垣大將を推薦したものである、園公と内府に加ふるに陛下の御諮詢府の最高地位にある福府議長が一枚加はつて

時局 收拾に與つたことは、齋藤内閣瓦解後における重臣會議と共に特記さるべく今後における後繼首相奏薦に對する新例を開いたものであらう、今回の後繼首相の詮衡に當り中老公の頭を去來したものゝ中

平沼福府議長は五・一五事件後既に三度びの政變毎に常に噂の前面に出て來てゐたが、同氏は既に責任政治の分野から去つて福府議長として陛下の御諮詢府内の地位に轉じたものであり殊に今後の後繼首相の詮衡には内大臣と共に重要なる樞機に參劃すべき立場にあるので老公としては一應考慮はしたものゝ結局樞府議長の地位は原則として恒久性を持たしめる方針を堅持したによるものである

林銑十郎大將は閥軍の一部で擡ぎ出しをしたが現實には殆ど問題とならなかつた

陸軍 部内で要望された朝鮮總督南次郎大將は朝鮮總督の地位から直接に首相の地位に持つて來ることは困難であるのみか朝鮮統治上面白くない結果を來すこと

號外發

政變ニュース等を盛外を發行洩れなく配

『ドン垣』豹變して
遂に輝く天下の宰
宿望達した宇垣

岡山から五里ほど東に牛窓といふ瀬戸内海沿ひの淋しい港がある、この牛窓の近くの一寒村に明治元年六月、一自作農の五男坊に恐ろしくきかん坊が生れた、名を宇次郎とし前掛け姿で大根を賣つて歩いてゐた、この小僧が新首相宇垣大將なのだ、小學校を卒業すると岡山の町に出て最も金の要らない勉學方法――岡山師範學校に入つた「あの大根小僧が師範に入つたぞ」とこれだけの

飛躍 ――でさへ眼をみはつてゐた村人を更に尻目にかけてその翌々年には「これでは校長先生が關の山、俺はそんなとこでは我慢出來んぞ」と中途退學し、僅の旅費を懷中に上京、同樣學費の要らない上級學校をと志して陸軍士官學校に飛び込んだ、その頃長兄十七八氏に書き送つた便りに「これで

標原製

宇垣大將

俺は大將までゆけまする」と大膽不敵、すでに將來を讀み取つた氣概は家人によつて今日まで語り傳へられてゐる、明治廿四年錦木莊六、白川義則の兩大將と同期で優等の成績で卒業した、この頃幼名「李次」を百姓臭いと投げ捨てゝ「一成」と改めてゐた、日本一に成るといふ宣言だつたがこの通り日本を背負つて立つ男となつたのだ、「ドン垣」の綽名で陸大に進んだ、丸々と太つた鈍重らしい風貌から同期生にこの名をいたゞいてゐたが、「ドン垣」長じて「豹の髭起き」となり傲岸不屈、政界の惡星で永らく

暗夜＝の片隅に光つてゐたのだ、陸大を出てからは鰻上りに上つて大正十三年清浦内閣組閣の折陸軍大臣として入閣、翌年大將に親任せられ加藤、若槻兩內閣に同大臣を重任、濱口內閣にも陸相となり同六年軍事參議官、同年六月豫備役となり同時にこの大鯰は遽に朝鮮總督に就任、同十一年夏まで名總督として「宇垣も政治家」になつてゐた、その頃上京毎に瀧澤のフンプンたるにほひを立てゝ政界を泳いだ惡星の名も久しかつた、久し過ぎた理由は政黨と接觸し過ぎて軍縮に手をつけたのかたゝつてかかれが上京の時の東京驛は「警官の一癖かいな？」とお上りさんの瞻を奪ふ程の警戒振り

黑服＝帶劍に埋り「宇垣大將何處にありや」と探さねばならなかつた、一男五女の子福者、また有名な愛妻家でもあつた、昨年秋貞子夫人を失つてからは少尉時代の機動演習の折初めて知つた伊豆の出湯、長岡溫泉に蟄居して「寢起きの釣」はらん〳〵たる眼をおしかくしてゐたのだつた

宇垣組閣の顛末

宇垣組閣の顛末は既に二日を經過したるも何等進展を見ず、宇垣果して乘り切るの秘策ありや、或は流產に畢るやを思ひ、なほ暫く成り行きを見る必要あり、陸軍の強硬と宇垣との反抗する何を援るか、先ず理由とする所一部の軍部を私るる者なりとの事なりとの解し得さるも、何故に宇垣内閣が軍部に不利なるか、廣田内閣組閣の當時を想へば、陸軍は閣員の人選に容喙し、政黨をして閣員を私するを言ひ、廣田をして困惑せしめ、所謂軍部と政黨との入閣を忌むの在るか宇垣は既に政黨を黨一掃を脫せざる入閣せしめざることを選き又政務官を廢することを組閣の要件とせる論ら一長一短の如くなれども、軍部の反對理由列挙せつて、公言し得さ

複原製

るものとせば、或い陸軍本位の首相を得んとするの為か、斯の如き陸軍政治をフアシヨ的に行はんとするものとせば、彼等の欲張る真意こそ存ずるとせんば、こん悪例を作ることもまた憲政を危殆に導くものなり、彼等の真意の或い議会政治を排するものあらんも、こん許すべからざるなり、但閣の大命を拝し居る人の陸相詮衡を拒絶するは閣僚の大権を犯すものなるべし、仮令、私案に寡政の要道也、已んの欲する所を毒するを人権を干犯したるものとせば、私案を張らんとするの憲政の賊である。彼等の私案の如く首相の斯くせよと求むるべもなく、斯くせざれば兵用を乱るるとせば、宜しく一を拒否一を張りて大命を拒し私利を固執せしめるは是れ国家の為にあらず、寧ろ、寧ろ、宇垣が漫る後継者と

複原制

安協するを欲せず、而して、の難関に解決を流産こうらーあるを望まず、此の難関を無理切り抜けることが宇垣の大なる使命であると思ふ、宇垣一応陸相を辞長の要を基し、国家の大患を生ずること必ず、宇垣の使命の大なるはこあつて、兵用の真と意味あるは彼等の跋扈を抑制するに在り、彼等の斯りの兵用を口実に利用し、兵用更に大切なるは兵政を乱すこと、兵用が為の為に宇垣こそ自重しの努力を望む所以はここに在り、

一月廿七日記

○一月廿七日の記）宇垣大命を拝じ組閣工作成こすべく、陸軍部内の人の奏上に依り、或い今日中流産を実現すべき恐れ、一二日延び

陸軍部内一部に
宇垣擁護派
對立は相當深刻

【巷の噂話】陸軍部内の反宇垣熱の焦點は今や本當政策よりも宇垣大將個人の過去の行動が軍に変ありとして

一、同大將が加藤内閣時代に四個師團を廢止した軍縮責任者である、軍工作を必ずならしめるやうな三月事件の關係者である等の諸點をあげて激烈に迫つてゐるが、他方これに對してはまた一、加藤高明内閣時代に四個師團を縮減したと云ふが、當時の情勢は蹈々たる軍縮論時代であつて、軍政責任者としてはこの輿論と職員の削減を斷行すると同時に、他方それによつて浮び上つた千八百萬圓ほどの經費は全部これを新規要求として軍備の新設の確立、空軍、自動車隊の新設就中、今日の質的に變化した高等軍備の礎石たる科學戰隊の創始等に充當したものであり、單なる軍縮論者と斷定することは、事實を歪曲するものである

それどころか、第一次西園寺内閣當時、二個師團增設問題では内閣を瓦壞せしめたのは當時の一佐官たる宇垣軍事課長ではなかつたか

一、又今日の軍工作の端緒を開いたといふ三月事件に宇垣大將が無關係なことは既に確認濟みのことであり、且つ現在物的證據もあるが、この問題を今日公開的に引用することはいかなる意味に於ても不見識極まることである

右の如き宇垣大將擁立派の反駁的見解もあり、同大將の身邊をめぐる反宇垣派、宇垣擁立派との對立は相當深刻なものがある

硬態度に出たのであるか、陸軍が頑強に宇垣内閣組織の線に出た理由は主として左の如き根據に基くものとしてゐる

一、宇垣大將は、かつて陸軍大臣在職中、一種の獨裁政治を企圖した某重大事件にある程度の關係を持つたと相當厚く且つ有力に信ぜられてゐる、該事件は種々なる意味において今日なほ世上論議の對象とされてをり、陸軍部内に與へた影響も尠しとせず、然るに陸軍としては相澤事件、二・二六事件等のあとを承けて、全面的の粛軍工作に最大の努力を集中してをり、寺内陸相も粛軍を最大使命の一として今日まで多大の犠牲を厭はず粛軍の完璧を期し、いやしくも問題視される如き人物は隈級、地位の如何を問はずこれを淘汰するに躊躇しなかつた、かゝる新たなる部内情勢において同大將の出馬は將來各種の不穩なる事件を招來するおそれもすくなしとせず、且つ部内に對する影響も甚大なるものあり、こゝに陸軍が粛軍達成の大目的の上より宇垣内閣反對の絶對的根據を持つ

一、既往において陸軍部内の統制を害したことに關しては直接間接に有力な責任が宇垣大將にありと目されてゐる、部内統制は粛軍工作と相俟つて現陸軍の最大の熱意を傾注し來つたところである以上、曾て部内統制上問題視された宇垣大將の出馬は陸軍として到底容認し難いものである

なほ陸軍としては現下の非常時局において國論一統を强硬に主張せんとするに際し宇垣大將の如く現狀維持的勢力との關係容易にたちがたかるべき宇垣内閣の出現は十分考慮の余地あり、以上の事情に見るに陸軍が宇垣内閣に反對する理由は既報の如く宇垣大將の個人的事情に基づく絶對的のものなりとなしてゐる

東京朝日新聞 昭和十年 月 日

べき人ぶるへ。陸軍と偏することき人を交ける如き危険の老と
甚しきこあり、陸軍に或い陸軍を入自身の便宜ルボットを首相
とし陸軍大臣に知人を入れ、海軍に海軍の所長を、陸軍に
庶政の更新を図ると云い其の業績を言はんと云ふ、
而して宇垣を組織する政党や政治の因縁あることを以て之を排撃
し、政党商人を、政治を利用せんとする、政党や政治を無視し
無因縁で果して何事か成し得るか、宇垣が奏薦さ
れたる理由は北長所なるが故なるか、宇垣が曾つて陸相たりし
時の前後を知りし某重大事件に関係あることき
宇垣に之れを諒解せしめんとするの如き
政治の運用上時を異にしてなすべき事、陸軍大臣たるべき
見識としても、変通を変ずるも必ずしも陸軍部内の志向

原製

を托箱せしめ、宮廷に一見の所に入れ、吾輩は宇
垣を交ずるに恩怨の関係全無なるを以て、彼れを信ずる
の時尚て之の如き人、西園寺公の奏薦決して誤らしこと
思はず、然れ共強固なるボイコットを行へ、大命拝辞
を任ずることの時の如き先例が開かるとも、誰れか今
後大命を拝することを甘んずるか、吾等は此の悪例を
開く陸軍を憂慮する者とせざるを得ざるなり。
九日宇垣に大命を降し大将辞任を奏聞し、
の多行を弾劾の宇垣の心事を洞察すれば左の如し
流産内閣の往年浜口奎吾の先輩たり今回の二
度目なり、
宇垣に次ぐ大命を次期枢府議長に降すべきも不祥事

東京日日新聞

時事新報合同

明治二十五年三月八日
第三種郵便物認可

昭和十二年
一月二十九日
號外

編輯兼印刷發行人
相馬基

發行所
大阪毎日新聞社東京支店
麴町區有樂町一丁目
十一番地三號
東京日日新聞社

宇垣氏、陸軍大將を辭す

『軍の現情遺憾に堪へず』

廿九日午前九時半宇垣內閣の組閣本部にて參謀長格の林彌三吉中將の發表するところによれば陸軍の反對に遭うて組閣難に陷つた宇垣大將は廿九日遂に陸軍大將を辭することに決した、同大將は右決意に當つて陸軍の長老たる鈴木莊六、河合操兩大將に挨拶狀を送つたがそれによれば同大將の決意の動機は「今はファッショか、日本固有の憲政かの分岐點に立ちありと信ず、軍を今日の如く政治團體的狀態に至らしめたるは予も亦微力その一部の責を負ふべきなるも聖明に對し轉た恐懼に堪へず、然かも永年愛する處の軍が此の如き情態に至りたるは實に遺憾に堪へず」といふにある

今や御採納相成るや否やは拜察の限りに非ざるも、最後の軍に對する手段として陸軍大將の官を辭するの決意を固めました、大勢の判斷が違ふなら格別なるも若し私の所見に御同感ならば私の毀譽浮沈は別として救國救軍の意味において一臂の勞を垂れられるの餘地なきや、おそらく餘地も存せざることゝは拜察致しあるも多年の愛顧を蒙り軍の長老としてあらるゝ閣下に對し軍と袂別する前において愚言を申上げて御諒承を得置く』

との旨をうけて御挨拶にまかり出たわけであります

河合閣下はこの時泣かれて

『辭表がまだ御手元を離れてゐないならばこの際切に思ひ止まられんことを望みます自分の見るところでは決して軍の總意で閣下を排斥してはゐないと信ずる然しながら三長官の決議とあるが故に私は今まで躊躇してゐたわけであります

この時局は宇垣閣下に非ずんば斷じて救ひ得ないと思ふから最後の御努力を訴へる次第である』

と述べられました、そこで私(林中將)は三長官の決議については充分に御檢討を御願申しておきました、しかして後は兩名(河合大將と林中將)とも何もいふことが出來なかつた

(裏面に續く)

報知新聞
昭和十二年一月廿九日
號外
（昭和廿五年三月十七日第三種郵便物認可）
編輯印刷兼發行人 藤木武
發行所 東京市麹町區 有楽町一丁目十三番地
株式會社 報知新聞社

宇垣大將重大決意

陸軍大將を辭して

軍と袂別組閣に邁進

宇垣氏の親近者として組閣工作に奔走しつゝある林彌三吉中將は二十九日午前九時半組閣本部において記者團に對し次の如き宇垣大將の組閣に對する牢固不動の決意につき重大なる發表を行つた

私は賴まれて宇垣閣下のお手傳ひに上つたものであります現時局の重大性を察し國家及び皇軍のために一臂の努力をなさんとして來たのであります、私はこの重大時局に宇垣閣下に非ずんば斷じて救ひ得ないといふ信念を持つてをりますこれより昨日（二十八日）宇垣閣下のお使ひとして河合操閣下とお會ひした時の事情を申上げます

先づ宇垣閣下の挨拶として『軍の現狀及び世論は御覽の通りで宇垣氏の見るところには權力の地位に在るもの數名が中心となり當局を强要して軍の總意なりとしていひ觸らしそれが大勢なりといふが如く裝うてゐるそも〳〵軍は陛下の軍なり過般來の行動は陛下の軍の總意なりやは問はずして明かなり三長官の陸相後任選定の如きも形式的のやり方だけにて著しく誠意を欠いてゐる現役將官個人の中にはこの際進んで難局に當るを辭せずとの意氣を有する人もあるけれども、その進出が梗塞されてゐる、もはや殘されたるところは自分としては變通の手段を有するのみ、また世上傳ふるが如き優諚を奏請するが如きは考へたることもなし若しも余の拜辭後軍の成行き及び君國の前途は痛心に堪へざるものがある

私は今はファッショか日本固有の憲政かの分岐點に立在りと信ずる、軍を今日の如く政治團體的狀態に至らしめたるは余もまた微力その一部の責を負ふべきであります事は聖明に對しうたゝ恐懼に堪へずしかも永年愛するところの軍が斯くの如き狀態に至りたることは實に遺憾に堪へず

今や御採納相成るや否やは拜察の限りに非ざるも、最後の軍に對する手段として陸軍大將の官を辭するの決意を固めました、大勢の判斷が違ふなら格別なるも若し私の所見に御同感ならば私の毀譽浮沈は別として救國救軍の意味において一臂の勞を垂れられるの餘地なきや、おそらく餘地も存せざることゝは拜察致しあるも多年の愛顧を蒙り軍の長老としてあらるゝ閣下に對し軍と袂別する前において愚言を申上げて御諒承を得置く』

との旨をうけて御挨拶にまかり出たわけであります

河合閣下はこの時泣かれて

『辭表がまだ御手元を離れてゐないならばこの際切に思ひ止まられんことを望みます自分の見るところでは決して軍の總意で閣下を排斥してはゐないと信ずる然しながら三長官の決議とあるが故に私は今まで躊躇してゐたわけであります

この時局は宇垣閣下に非ずんば斷じて救ひ得ないと思ふから最後の御努力を訴へる次第である』

と述べられました、そこで私（林中將）は三長官の決議については充分に御檢討を御願申しておきました、しかして後は兩名（河合大將と林中將）とも何もいふことが出來なかつた

（裏面に續く）

時事新報
明治二十二年第三種郵便物
昭和十二年
編輯兼發行人 相馬愛藏
發行所 大阪毎日新聞社
東京市麹町區有楽町一丁目十番地

首相が文官たる以上

軍統制に何の關係ありや

林中將所感を述ぶ

（國體明徴）

これから後は私（林）第三者の位置に立つて所感を申述べます

首相は文官である文官たる首相が軍の統制に何の關係ありや軍の統制は軍の首腦部さへしつかりしてをれば可なり、故に宇垣閣下が首相となられても軍の統制は何等の影響もないと信ずる然るにも拘らずその統制を保ち得ずとは何たるぶざまでありますかそも〳〵組閣行爲は純然たる政治行爲である、これに向つて軍を提げて反對するとは違勅ではないかと思はれる愼重にありたいものである

過日來軍の發表軍の『總意』軍の總意といふことがある、そも〳〵軍は大元帥陛下の軍である

陸相は果して陛下の御裁可を經て發表せられたものであるか、まさか陛下はこんな政治擧出を御許しになるまいこれまた切に愼重を望む、現役軍人は政治に拘はることを禁ぜられてありますからこの際何もいはれぬのであるうが願くば朋輩相いましめてもらひたい

在郷軍人は忠良の臣民として在郷してゐるものであるから個人としては勝手に所見を述べ得る筈であるから喋てば進んで意見を述べて貰ひたい

今や軍なる組閣問題を超越して國家皇軍を救ひ得るや否やの分岐點にあるしかるに正論は閉塞せられて邪論のみ行はれてゐる如く見える、日本にはなほ正義の權勢たるものあり〳〵と信じてゐる、我輩は天下の志士願くばこの國御高見を發表して貰ひたい私のそんたくする處ではこの輿論の歸する處を見て宇垣閣下はいかがなるべき〳〵早〳〵やつて貰ひたいんづく軍人の意見を徵してもらひたい、ついてはなるべく早〳〵やつて貰ひたい

さらば伊木銳十郎大將大命を拜す

時事解説

林内閣の弱點

組閣第一歩に方針の變更

閣員銓衡上の矛盾

林内閣は兎にも角にも、閣員の顔ぶれを揃へて親任式をすました「清新明朗」を標榜したが、出來上つたものを見れば、少しも清新はなく鑑じて明朗ではない、近衛大臣の相場は隨分下つて、陸田内閣の時も相當にあつたが、今度は拒絶者までを拒絶したものが入閣

林内閣の組閣方針は一体何處にあるのか？不思議に思ふのは先づこの點だ。憲政派の林大將が、急進派の中心板垣征四郎中將を陸相に要望し、海相には末次信正大將を望み、逆に陸、海両相の方が中村孝太郎、米内光政の温和組を推薦した、先づ不思議の第一である、ところが卅一日夜あわたたしい第一段の動きがあるとすぐ、板垣大將はヘナ〳〵と折れて中村、米内を承認した、が今度は十河信二氏が貰つて、參謀長をやめ、内閣書記官長の椅子を振つて自殺に向き掛けてしまつた、急遽より前進へ！林内閣の第一歩に於て、その方針に變更を來してゐるのだが、それに反對する結城が今度は樞密院、末次を望んでゐた林内閣の藏相になる、何といつても話の近橋が合はぬではないか

× × ×

河原田内相は、近頃こそ近衛に近いが、大政翼内閣成立とともに、中堅内相の下に於て内務次官となり、政務次官松野鶴平、警保局長薄岡二郎と協力して、總選擧に際しては政友會三百三名を獲得した政友會にとつての殊勲者だ、鹽野司法は、司法部内におけるいはゆる「清新」といふから、若い進歩的な人物を銓衡して入れるのかと思ふと左樣ではない、「明朗」といふから本当に明朗な人物を入れるかと思ふとそれも違ふ、革新的意見を持つてゐる者のみ選ぶのかと思ふと左樣でもない、新内閣のピカ一は藏相結城太郎だが、結城は華族内閣當時、藏相井上準之助の推薦によつて、藏相になつて以來、今日に至り、押しも押されもせぬ資本家の代辯者だ、現に馬場藏相の財政政策、就中、秘税の廢止、取引税の廢止等多くの計文をつけてゐる、馬場の案は革新的な重部の主張を多分に入れたものだが、それに反對する結城が今度は樞密院、末次を望んでゐた林内閣の藏相になる、何といつても話の近橋が合はぬではないか

× × ×

河原田内相は、近頃こそ近衛に近いが、大政翼内閣成立とともに、中堅内相の下に於て内務次官となり、政務次官松野鶴平、警保局長薄岡二郎と協力して、總選擧に際しては政友會三百三名を獲得した政友會にとつての殊勲者だ、鹽野司法は、司法部内におけるいはゆる四流五流内閣だ、田邊治郎に迄も入閣を拒絶される樣では林内閣も

× × ×

「清新」といふから、若い進歩的な人物を銓衡して入れるのかと思ふと左樣ではない、「明朗」といふから本当に明朗な人物を入れるかと思ふとそれも違ふ、革新的意見を持つてゐる者のみ選ぶのかと思ふと左樣でもない、新内閣のピカ一は藏相結城太郎だが、結城は華族内閣當時、藏相井上準之助の推薦によつて、藏相になつて以來、今日に至り、押しも押されもせぬ資本家の代辯者だ、現に馬場藏相の財政政策、就中、秘税の廢止、取引税の廢止等多くの計文をつけてゐる、馬場の案は革新的な重部の主張を多分に入れたものだが、それに反對する結城が今度は樞密院、末次を望んでゐた林内閣の藏相になる、何といつても話の近橋が合はぬではないか

× × ×

河原田内相は、近頃こそ近衛に近いが、大政翼内閣成立とともに、中堅内相の下に於て内務次官となり、政務次官松野鶴平、警保局長薄岡二郎と協力して、總選擧に際しては政友會三百三名を獲得した政友會にとつての殊勲者だ、鹽野司法は、司法部内におけるいはゆる四流五流内閣だ、田邊治郎に迄も入閣を拒絶される樣では林内閣も

× × ×

かうしてみると一体いかなる方針で銓衡したのか、サツパリ判らぬ、全くの行き當り主義内閣だ、

舊友

助とは非常に親しい、山崎達之輔は政友會の出身、岡田内閣成立とともに、牛蒡抜きに嘉んで

を捨てて飛び込んだ男何とかして自分の局面打開を考へてゐた矢先だ、農林大臣の交渉なんて全く眼からボタ餅だ、政友會から引き抜かうとした中島知久平に至つては、かつて廣田内閣成立當時には、重部にケチをつけられて、入閣出來なかつた一人である、それを今度はねらつてゐるしかも世間の眼では、林内閣は廣田内閣より遙に重部意識的だと思つてゐるのだ

× × ×

榛原製

一月廿七日 東京日日新聞 掲載

言行録を讀んで

私は今「栖鳳閑話」を讀んでゐる、これは畫家竹内栖鳳の子息逸氏が、父の言行を録したものである。私は平素栖鳳の畫記を愛賞してゐるものだが、實は交りがあるでもない、强て栖鳳の言行を知りたいと思ふてもゐない。しかしこの書を讀んで可なり面白く感じたのは、筆者が識とは畑違ひから相當の文能を有すの子息で、その說く所は敢て文を綴ぐるのが目的でもなく父を繼護するのが主眼でもなく常に座右に倚して見たり聽いたりしたこと、或は從から聞いたことなどを思ひ出るまゝ、秩序もなく率直に淡白に書き散らした所に興味がある。

斯る書き方は傳記などをかくとは異つて筆に拘束がないから散漫乍ら純眞の味がある往々筆が走つて、文の缺點や失敗や短所までも迸り出る。そこに赤天直流露の味がある門人などの筆は往々崇拜の念から師を揚るに失するし、批評家の筆には、天機奥理が伴ふこれは實子の筆だから、以上の失を免れて事實と觀察に誤りがない。私は此種の筆錄を好む、どうせ片々たる思ひ出の記であるから讀つてほるないざる貴いものがある。

それは多く瑣事デテールで兎もするとそんなことはどうでもよいと閑却され、傳說等に漏れ勝ちであるが却てそれが本當の事をあらはし、傳記の數百千完よりも重きをなすことがある。是尊のデテールは本人としては氣もつかず勿論自から口にせぬことであるが、而もそれが其人の性格や習慣や氣分などを知るに此上のない資料であつて、人の傳を作るに側面觀を必要とすることは言ふまでもないが、是等の記載こそ多く側面を知るの好材料である。

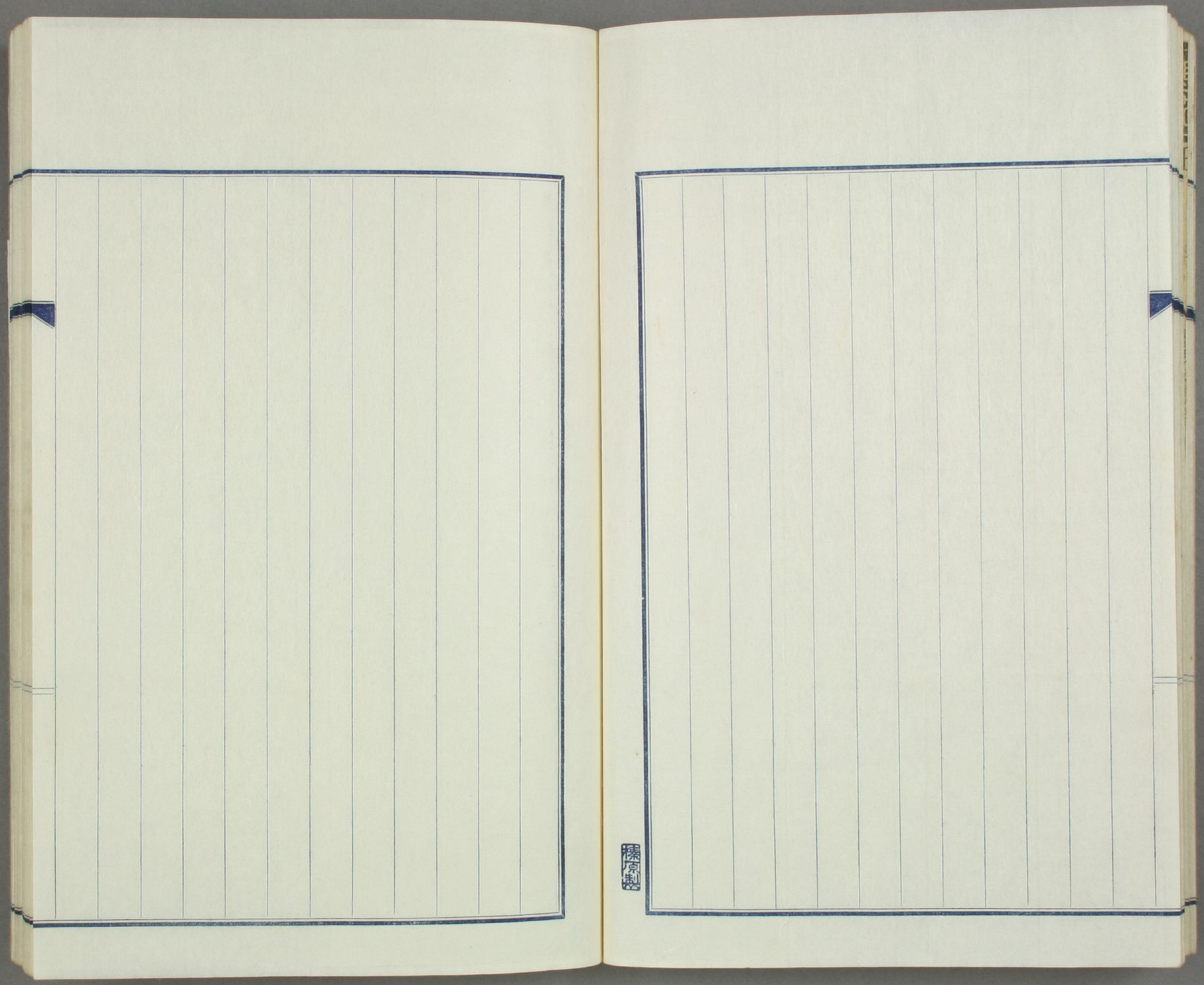
藝術には内弟子と唱ふる門人があつて常に他の門人に奏まれる、此の内弟子の師の家庭に起臥して朝夕師に親しし、或は師策や旅行に伴はれ、他の門人が見たり聞いたりすることの出來ないことを見聞する爲めに、師の心持をよく呑みこんで得をする。耶寛師が國時褒する言語などで自から感奏されるからであつて、他の門人に奏まれるのも無理はないが、此の書の著者は骨肉の關係があるから、内弟子に比すると親段好位地に居るものので、其說く所は栖鳳本人の說くよりも、要を得てゐるかにも思はれる。本人としては決して口外しないことまでも洒々としてさらけ出してゐる。本人から云はせると、そんな馬鹿げたことを書くでないと顰蹙すること、或は天機を漏らし過ぎたりするやうなこともあらうが、そこに直實もあり、資料としての貴さもあり、讀んで興味もあるので、私は此種の言行錄を讀むことを好む。

しかし私は見聞が狹いので此類のことを多く知つて居らん僅かに知るのは、いつぞや佐々木信綱氏の謹筆に、其の夫人の新說が削はつてゐたので私の注意を惹いた、夫人の平素良人の傍に侍して、何かと良人の言動を書き留めて置かゝる習慣があるらしく、それが一種の隨筆となつてゐる。勿論その記事は概ね良人の瑣事に屬してゐるが、良人の半面がよく描されてゐる、乃ち良人の日々の動靜や人に接する態度や、時々の感想や咳拂までとは云はんが、本人自身の氣を留めないことまでも、よく捉へて筆記されてゐる、若しこの夫人無かりせば、多くのデテールは埋没却するであらうに佐々木君は仕合の人だと思ふた、文學者にはジョンソンに於ける、ボスウエルの如きは好秘書が容易に得られないとしても、文筆ある人を細君に有つべきであると感じた

別にもう一つ親近者に書かれた言行錄に感じたことを云ふと、小泉八雲が歿した時、早大の出版部で八雲に親炙した諸家の追懷文を集めて出版したが、其中で最も價値を覺へたものは、未亡人の談話記であつた。可なり委しいものであつたが家庭の瑣事ばかりでなく、文藝の事にも及び亡夫の面目を躍如たらしむるものがあつて、確に興味深であつた。

元來婦人は細心で男子の氣づかざる點に氣がつき、しかも其の觀察が周到であり且つ鋭利である、藝術家は大抵心を斯道に集注するのである事柄に對しては全く放心である。隨つて其舉措は時々刻々常去るのが通例であるが、これを摑むものは唯だ始終左右にあつて、忠實で且つ能力のある夫人でなければならん。

八雲夫人の姪きは確に優れた秘書以上の人であることが、其の談話に由つて首肯せられた、肉親の人の書いたものでも一概に重んぜられない譯で、或はすれば何か爲めにする所があつたり、或は、誇張があつたりするものは勿論採るに足らない、唯だ純眞なるものに至つては貴行錄の冠とするに定る、私は此種の文獻に重きを置くものである。



以下
7丁
白紙

の身分の四十次から蒐集した図書を集めたが先祖代々数代
今の金石に関する印書拓本のかなり何もないが二十数種
を元にしてあることの自筆本や自家の雑著である。自筆
本などの身後どうなったもよいが、荒干の家書だけは
散逸しないようにと。自分の家は家祖を仙山海翁の如きと考え
があったが、徳川時代の御用学者家としたがって
印章が徳川の代用の時、目先の良い図書の字の附し
残りの古い家の庫に移りて家に存したのは唯仙
海翁の未刊著書撰言仲氏易一部あるのみあ
つた。身分の卿位に散逸した蔵書を買集めた譜ひもないが
数十年の間まぼろく千の入りたるが荒干あるいその多
くは祀族の家に保存されたが、代々海翁の蔵記があ

榛原製

の著書目録を以つて家のセンレンとなすが少なくなかつた。其の一二を云へば冊子ならば家のセンレンとなる。書面、短冊、其の印譜が皆伝家の手沢に係ることもあるし、所持者の同姓かゝ伝海の自筆の中庸全文の墨帖、同じく伝海の自撰自筆の白雪の碑文（こゝに所持者の前身）同姓の祖先で伝海の兄弟の人である）横巻一、祖先家から出のセンレンとなる三領の手写の寸珍本つゝく草がある。泰嶽の春夜（紙本彩色）掛軸の屏風のマリがある。羽ヶ橋の岡井氏から贈られた祖母姉妹の長の歌集写本が十数冊ある。芝田の成文堂が余の家の巻を記する故を以て特に贈り送られた活版がある。史記活版、三國志活版の数々

複原製

八伝海の手沢がある。自分は一時家系の稿書の家の庫を捜索し、幸ひ文の許を得て捜索一十数部の同書を大半以中まで、初刊の集古十種や唐本の孫氏の伝海の文集の稿本二冊があつた。伝海の文集十巻は家蔵版で刊行されたが其の稿本は無いものである。幸ひ貴重の家宝である。新潟を行李の個を納めて立江津の船で運送中、衣類等と共に紛失した。これが逆罪をかゝり全部失つたのは残念のことである。就中文稿を失つたのは誠に取返しのつかない不幸である。

妻の実家和泉家の家書は幸ひ自分の手にあつた。

家系の一部となりてあり、また、同家の家の記があり、紙背宮台帳の記（久淀家同筆で住野の陣勤王の故を以つて屋敷が西宮寺分となせ、こ初めを記されし時の記）二冊があり、住一家（真の父）の勤王に用捷した陣の自筆日記が四冊あり、久淀家の諸稿があり、国家の墨跡を一巻に巻したものあり、和泉家の花鳥巻三巻（国家歌集）と水墨集（夫の東仮が流阪を描したもの）と久淀住一家の什一とす事蹟を載せたもの）があり、外に余の叔父日嶽家の手写者と偽る三国会盛図（盛城の図）従華地図、大日本日史手写本（全部のあるべき）などがある。

家書の内で幸ひに散逸手写の系譜と泰嶽家の書かれた家史があり、これ重要家書の書き始めを自分が偽り五家の一史と署されあり、尚は泰嶽商陸と称する帖面の家礼其他の事を委しく録したもので、帖面形のもので泰嶽自筆である外に彩修終時稿一冊の泰嶽家の自己の詩稿である。

尚は他と家廟の遺係が四恒街で居り、住人同家山が五家と未だ時機を伸民男を記録を方いたしまが久く絶にならでなれの方模書を段数しも居り、尚は同じく易を跡ともいれこまが一冊あるこれは秋月住樹が五家に来た時を方いたこまで、外に二三の色情も有りしもあるが、城庫の系図もこれと数使して居るこれとまがある。尚は前五一城と奥手面輪が余の家と宮の第九代会之丞の墨跡も保存すべきか、前原のい余の幼名雄と称名入りて忠義の義と一行を方いたこまの

で余の家から離れたことが後と余りあしたことがあり奥平の詩情八四幅あつても皆堅幅もあるが、これ四東京の書画屋で得たことがある。他に尚一幅雑文を拵へたことがあるこれも亦の家と奥平が縁があるので友人五岳様から出来たものである

家蔵の遺墨遺書は幸ひ多く遺つてゐる、家蔵の中より歌系秋書を師として早く書を学ぶ、書を以つて仰間に学へ

外人であるが、晩年書内省に奉仕してから志きりれ義也を研究され北道を学に入られ家を嘉永の往歩があり、蔵の遺法い以つて死ることが出来る、蔵い晩年多く書を作られ賞心し、行を工夫され北学引の極本が武程もある、それは二部を充るもある、尚は北海自宅の九住家係が有り後世編が有る八家文の零本があり、余の清を容れたこと字宮さんに詩文其他十数冊がある

いつもや家方を整理した折小長持に一杯納めたが、先を編んで数乱してあるこのが可なりある、其内時機を見て纏めおく可きものである。其整理の際家の日記を心つけから、一と書名を保別する炬を廻けず、尚は其漆片々の文書は アんバムを始り込み保存する便しこれ但しこれ自家の経歴と関するものが多いので、書 アんバムの種類と慎存文書として ある。尚は友の書簡を巻にしたものが十数あり大アんバムに貼り込んだものが二帖あるが北海道七年後山部屋長頭の現かることを知まるの多数らしく保存すべし。

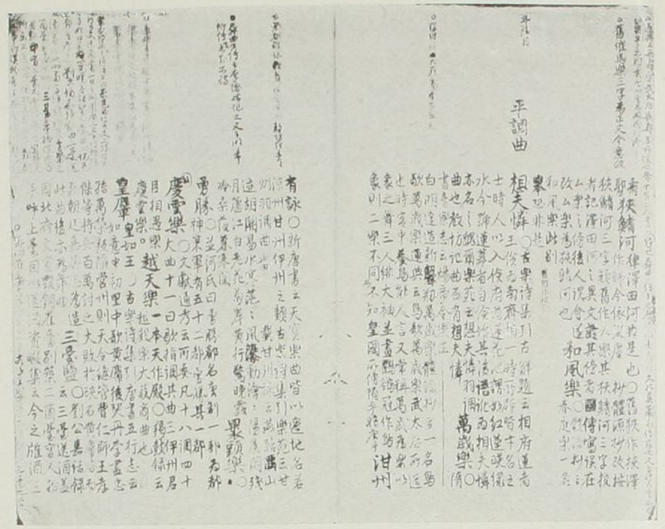
尚追記と家族のこと家廟墓碑墓誌墓碑墓碑の手間墓碑ある

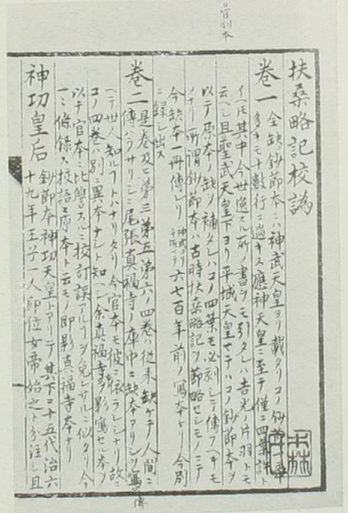
出すべきものである、書畫部數は毎の實家の五條氏人の書
幅や名人作の清幅（[illegible]作）の際に[illegible]の書畫として来た
し[illegible]の時奪り[illegible]を受けた[illegible]（外国[illegible]）
光明院四四野水鳴の清幅。岱海堂の三[illegible]を市場に出た
の類、[illegible]の白雪[illegible]の清幅の三、白雪[illegible]の[illegible]
くし、岱海[illegible]の[illegible]金華[illegible]の[illegible]幅、叔父[illegible]の得所
清稿、[illegible]の[illegible]、岱海[illegible]の自識
[illegible]、光房の印[illegible]、岱海[illegible]の印、[illegible]、三[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]、岱海[illegible]の[illegible]、[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]（桐[illegible]）、叔父[illegible]
次郎[illegible]のかくしの[illegible]、[illegible]眼の[illegible]
壺[illegible]に[illegible]等[illegible]と[illegible]印[illegible]やう[illegible]と記

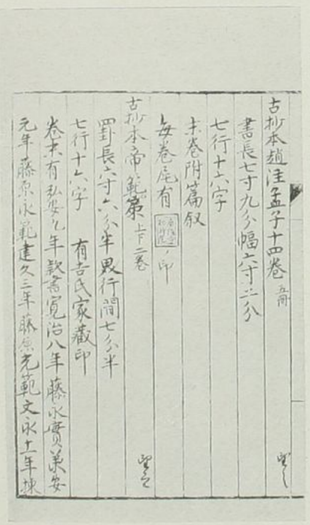
[illegible]

[illegible]

本文は逸して補足を要するものも
の清幅二幅である。家祖の遺墨は家宝と極め
て少ないから珍重せねばならぬ。北の二幅も良
品が甚だ粗略だから改装を要する、尚ほ摸
写仲氏の記も附記を要することゝ、あんな家の
自筆かゝる門人の[illegible]、大[illegible]寺村の[illegible]
塚の先人が[illegible]の門下で世人の[illegible]と[illegible]と
[illegible]
貞[illegible]ものである。どうかもよいと言ひたいところ、[illegible]時
代賞[illegible]から下賜された菊の紋[illegible]の[illegible]
三の位大銀杯のみきいの[illegible]を[illegible]する[illegible]



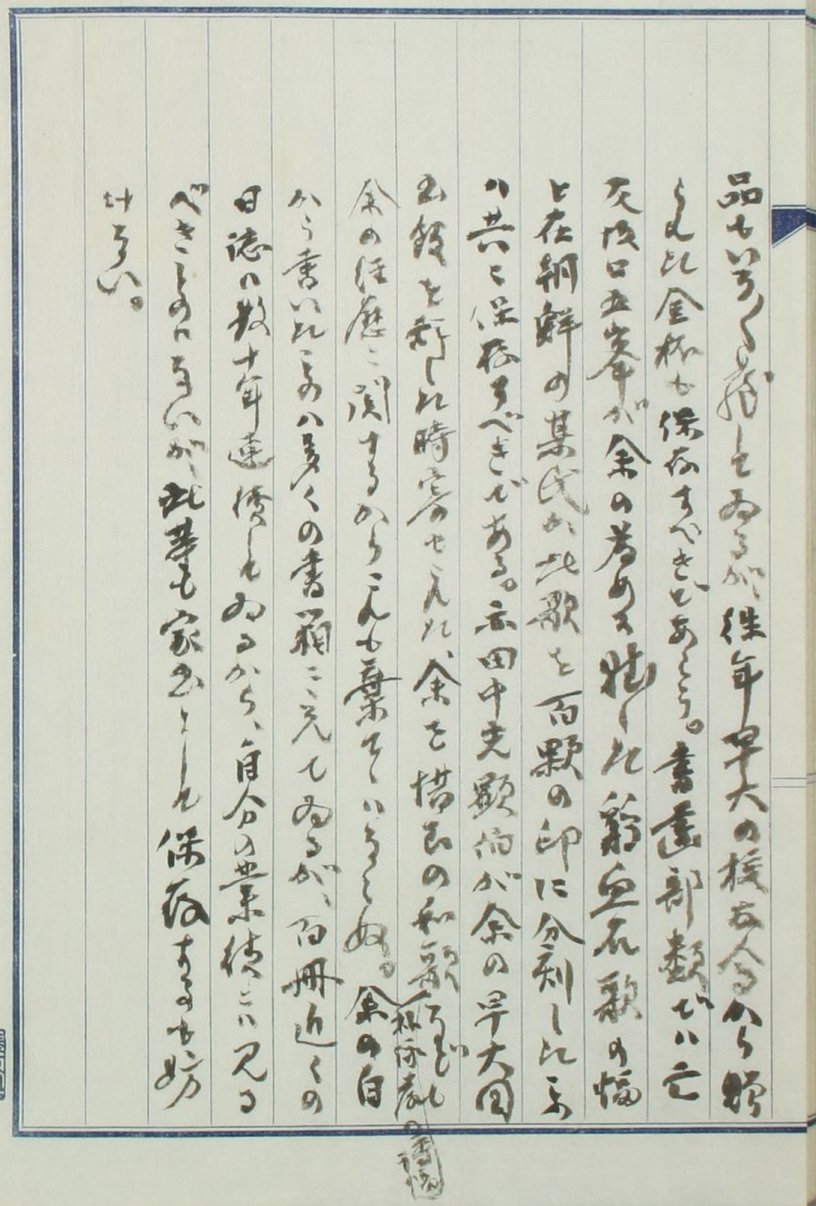




本筆自齋彼谷狩

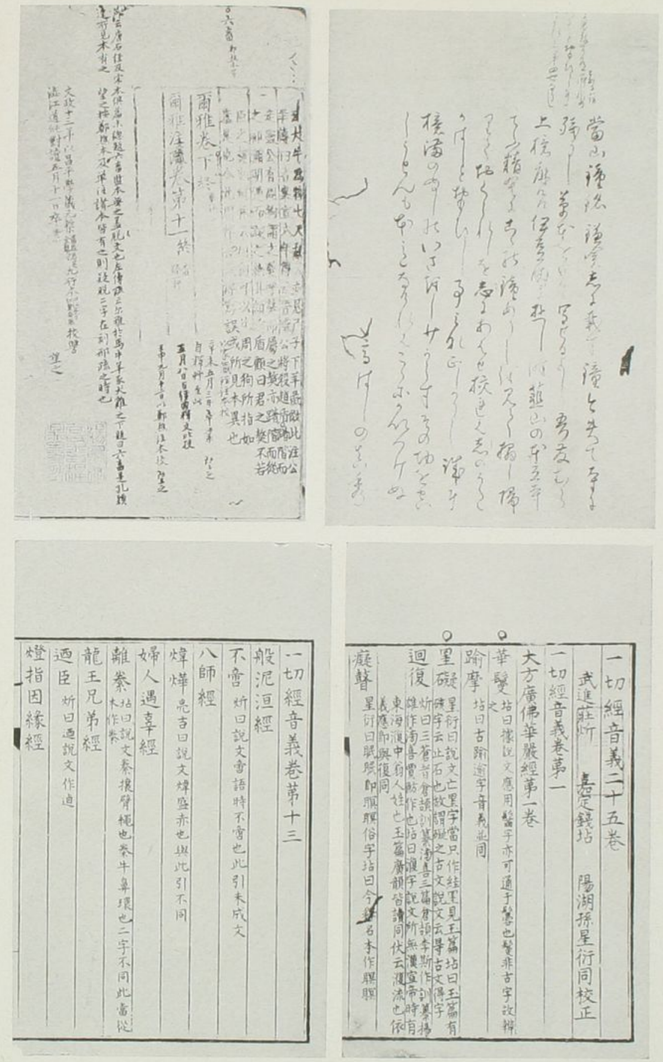
本稿部曲樂令時抄聚類名和注箋

本稿目書觀展樓古求　　本稿記略桑扶



○右掲のプアクレミエールは原本の一覧を経ず、今の原本から出版した旨記載されたから、ここに改めて他の参考に供する

○北斎の挿絵の一部の挿絵を書く画家が誰かが未だ一人も出ないが、夏目漂太郎氏が、高等学校の夕刊に連載されたる邦枝定二の浮名三味線」の挿絵を見ることに、自分の時々ずいぶん上手の挿絵を切り抜いたことがある。その筆者の岩田省大郎氏、夏目の共人の俳優の絵をもいろいろ、みずから活躍したもの。北人の特色の線が細い刺入れ、うまく着想も斬新で、みずから人物きのする画が取り入れ北



一切經音義二十五卷
武進莊炘　嘉定錢坫　陽湖孫星衍同校正
一切經音義卷第一
大方廣佛華嚴經第一卷
華髮　坫曰樓說文應用鬢字亦可通于髻也鬢非古字故辨之　坫曰古踊通字音義並同
踰擥　坫曰古踊通字音義並同
星礙　星衍曰說文心罪字當只作挂罪見玉篇坫曰玉篇有礙字云止石也故曰礙之古文說文云得古文礙字
迴復　坫曰三蒼字書無復字說文所無復字作𢓊字
凝瞽　星衍曰說文瞽目無眸也

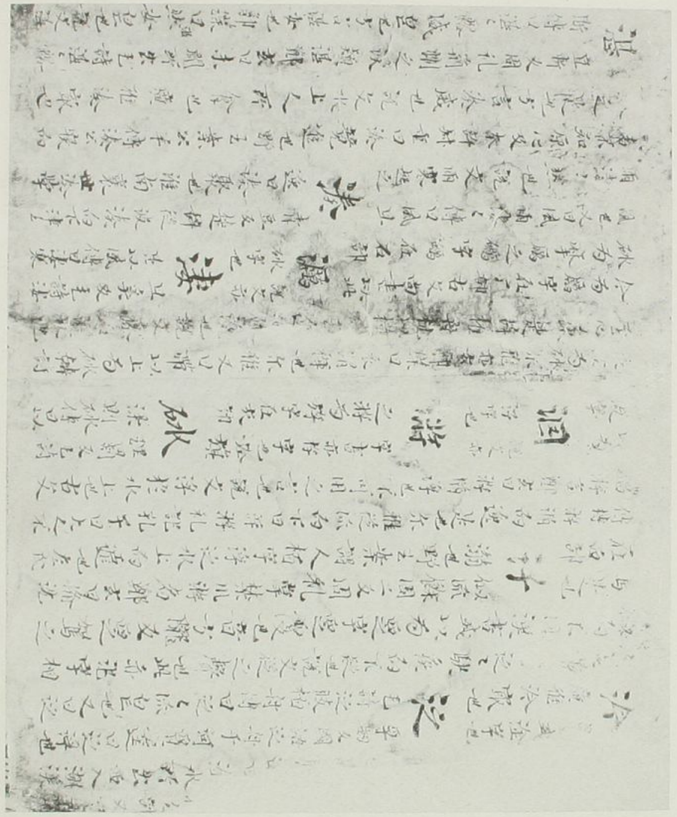
一切經音義卷第十三
般泥洹經
不啻　坫曰說文啻語時不啻也此引未成文
八師經
煒煒　亮吉曰說文煒盛赤也堊此引不同
婦人遇辜經
離叅　坫曰說文叅攙也叅牛辛壞也二字不同此當從木作叅
龍王兄弟經
迺臣　坫曰迺說文作乃
燈指因緣經

本筆自齋椹谷狩

手寫鎌倉松岡山之記（見返）　爾雅手校本（巻末）

一切經音義（右椹齋手寫）（左陽山頼寫手）

人の畫いたロテウリでは説の本文とよく調和するので、自分の
えれ輝俊ひい北人を第一人者と推さんとする、世間較もす
ると北の人の畫い春畫を良いとするものがあるが、その深い
南らものいひもえ。春畫を者かせたら定めしうまいこと
であらう。全体春畫を者くほどの婚筆を有れちい
ひい婦人の媚態を能く模写描き得るものである。自分い
故人小波をいつてゐるが、こんも輝俊がうまく殊に女の
媚態を描くことがうまかつたが、岩田と較べて何んが優
ることがいい自分い寧ろ岩田と優ると云い人とする。



古事
三議
水浦
騎馬
（全）

人の盡くエロテツリでハ説の本文とおく御和まるので、自分の

大概氏から南田文庫くに出した玉篇の断簡に貴重の
[illegible]、其の来歴に就て川面一馬の記する所あり
研究の餘地も多く東大斯學研究の資料となる
ハ疑ひ無い、古逸叢書所收の影宋本を底
本としてあるのが常者と隔りのあるのハ怪しむる
[illegible]、是れ古墨跡を採用した為めに[illegible]
[illegible]と断載されて[illegible]
[illegible]田中伯[illegible]の廟堂玉篇[illegible]
[illegible]断[illegible]
[illegible]本ハ弘文館の刻[illegible]
[illegible]弘文館の刻[illegible]
[illegible]

玉篇水部の斷簡に就いて

大槻磐溪が晩年に古寫經の斷簡、一枚摺・拓本等を蒐めて大型の張込帖を作成し、「知見開導帖」と名づけたものが安田文庫に藏せられてゐる。其の中に磐溪が左の如く手識を添へた顧野王玉篇の水部の零簡一葉がある。

顧野王玉篇零簡

聖武帝朝唐僧鑑眞所齎來此書閑本今尙散在南都東大寺及城之栂尾山諸處云

此片則東京湯島圓滿寺僧舊藏所贈

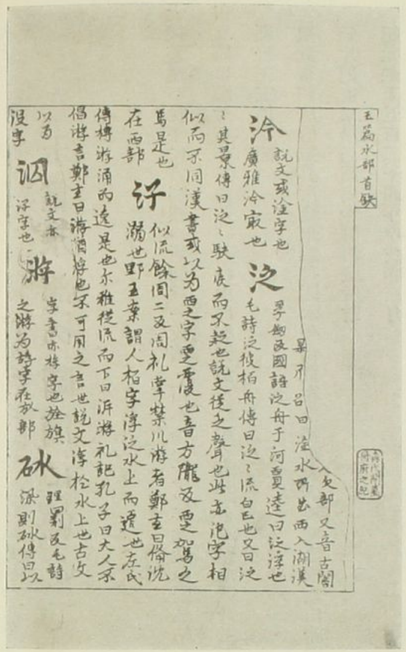
紀元二千五百三十四年甲戌春三月

愛古堂主人記

右の前半には誤記もあるが、磐溪が明治六年以前に某僧より入手したものであることは確かである。其の料紙の大いさ横約一尺一寸、竪八寸八分。界高約七寸九分、行間約一寸、水部「泠」より「湛」字に至る部分である。行數にして僅かに十一行ではあるが、口繪の圖版に示す如く、唐人若しくは奈良朝の書寫に係るものなるは一見疑ふ餘地を存せず、支那に佚して我國にのみ殘存する玉篇として貴重なる古筆である。而してこの部分は、古逸叢書に影印せられてゐる水部の第一葉に相當し、蟲損の部分も符合するから、古逸叢書第一葉の原本に相違ないと思はれるが、なほ兩者

を比較すると、古逸叢書本は行間の界線を現はさず、且つ、書風等にも若干の距りがある事を見出すのである。

然るに、柏木探古が其の家藏にして、もと東大寺尊勝院の舊物たる玉篇卷十八後分一卷（一冊）を明治十五年に摸刻した際の手識に據れば、右の「泠」字より「湛」字に至る十一行は、其れに續く湮字以下潦字に至る十五行と共に、即ち合せて二十六行（即ち泠字より潦字に至る）をも余之を藏し、其の後の部分「湮」字より「洗」字に至る部分は、同じく尊勝院に藏せられるとある。處が、これより先、天保六年に伴信友の寫し傳へた一本（京都帝國大學藏）の水部は、「湮」字に始り、其の原本は奈良にあると言つてゐるから、即ち、信友の傳寫した親本は、既に水部「泠」字より「湛」字に至る十一行（安田文庫現存分）を失つてゐた原本を移寫したものであつて、天保六年以前既に、尊勝院の水部殘存古寫本は、其の首の十一行を失つてゐた筈である。然らば、柏木探古の家藏と稱する水部二十六行が探古の手に歸したのは或は同時であつたかもしれないが、少くとも尊勝院よりは十一行と十五行との兩度に分れて脫出したものと見なければならない。而して同じく尊勝院所傳の卷十八の後分（柏木探古の手に歸し、


玉篇水部首殘

泠 說文或淫字也 廣雅泠寂也

汊 罕無反國語泛舟于河夏逵曰汊浮也 毛詩泛彼柏舟傳曰泛泛流皃也 其景傳曰泛泛駛皃而不起也說文汊之聲也與古泡字相似而不同漢書或以爲亟字亟更也音方龍反更駕也 馬是也

汗 似流餘同之反周禮掌禁凡游者鄭玄曰游流在西部 溺也 野王案謂人柏字淳泛水上而遊也左氏傳游涌而逸是也尔雅侵流而下曰游禮記孔子曰大人系偽游吉鄭玄曰游猶游也尔可用之言也說文淳於水上也古文以爲 沒字

泅 說文赤 泅字也

游 字書亦游字也旌旗之游爲游字在放部

砅 疋罔反毛詩 梁則砅傳曰砅

玉篇水部の斷簡に就いて　三

古逸叢書に借印せられ、又、柏木の手に據り、摸印せらる）が、界線を具へた鈔寫であり、現存各卷中、最も奇古であると稱せらてゐる點から、之と相似の右の安田文庫藏の水部斷簡十一行はもと尊勝院の殘存古寫本の首部に相違あるまじく、さすれば之は曾て柏木探古の手にあつたものとなつてくるのである。

茲に於いて又立ちかへつて古逸叢書の影印を見るに、柏木本たる卷十八の後分は西洋影照法によつて原本と毫髮も違はずに之を刻したとあるが、水部（十三葉）に關しては何事も述べてゐないのみならず、且つ其の影印を見るに唐人若しくは奈良朝の書寫たる原本の書風が著しく崩れてゐる事が見出される。之は直接に原本に據らず、影寫本等の副本に基いて影印した爲ではないかと推定せられるのである。其の影印が水部の「泠」字から「洗」字に至るものである點も其の傍證となると思はれる。又、安田文庫藏本の部分に存する界線は極めて薄墨であるから副本の際之を省略したものであるかもしれない。然るに、大槻磐溪の明治七年の手識には些も柏木探古の舊藏に係る事を述べてをらず、又、明治十五年に探古はなほ家藏の如き言辭を記るしてゐるのは、大いなる矛盾である。何れか一方が事實を誤傳してゐるのか、或は、水部の「泠」字以下の十一行の寫本が二部傳はつてゐるのか、兩者の何れかでなければならない。柏木探古舊藏の玉篇、卷十八の後分と水部斷簡及び續く水部（尊勝院舊藏、後北畠男等の手を經て）とは、藤田男爵家に傳はつてゐるが、故あつて、今之を見る事が出來ないから、他日の機を俟つて此の問題を解決したいと思ふのであるが、新たに發見せられた古筆水部の斷簡が玉篇研究上に大いなる寄與をなすべきは茲に言ふまでもない。（丙子九月三十日）

○上改志伝研究が行はれんとせしが、孰れも今如何まつたくとりのこされ、神谷の研究することは今が始めで、地方を追ふて之を傲ふものかもしれん。清吉と謂ふ印さん、四天四人の語り芸と謂ひけんとあれど、遠信長の話柄もまた取上げられやうとうたはれのに、文化の一現象たる民俗研究家も考へ名ものかい人の長者村節伝もたびたび其著姓海笑話の研究を上伝流とこそ云へべきこの比、北秋雪後もとも七一曲新の地方を限つて振るかんも上伝流である長者丸の志ん谷金鶏が只子の紹鷄が著したるを大改の風伝と江戸の風伝の相違を指摘したものがあるかこんも上伝流である。雑芸者と擬作された遠中之志

複原製

を風伝と注いれたるもの少かれども今日の研究之志料となるものが、自分の初年にあるのに、屋代弘賢か冬満之上伝まはいて賀問状を発したる其の芸を求めたことのある一事は、文化十四年のことで屋代は幕府の祐筆であつたから、北の賀問きは権威があつたに違ひないが、どんなことを賀問したか自分の年中行事もあつたらうが、何かが芸案の出れるものに俳文秋田豊橋も富岡狭岸山寄文淡路浦島の八篇はさぞいくら拙しきなれの八篇ひの芸案ハ出てこうないとこともある。

○自分所蔵狩谷棭斎の遺印二顆の捺さんれ古書がある が、其ハ後に捺したものとみえ、自分又捺したやつれことが

あるのと川瀬一馬から聞いたことがあり、自分の見たことも
ふれたが、今川瀬の編し比較語彙「もいとの」と聞くと鈴鹿亭造
氏の内容左の記事が入くてあるもの

六臣注文選（三十一冊）寛永二年刊古活字版、冊表紙附大型本、
巻末終葉裏に寛永二年の刊記を記す。慶長十二年刊
行の直江版のかくに擬へてあり。本書のいまと「絵本」（稽用形）消息
特に氏が古横図書記」の二印記があるが、右二種の印は市岡
春風氏の所見に依り、学士図書刊行会の展観に出陳の際
現存の史家集成のいまかに妄補したものであると云ふ。他の
諸法集解、伊勢保物語の二種印も同じく妄補である。
と鈴鹿亭の見た本三種とも三種共に稀なるものであり、鈴鹿亭は高名のまし。鈴鹿亭は妄補
の出と後の婦人入れたものか、生前後の出くことも問題である。

○市岡氏来）尾の印は「林下一人」と刻したものがある。花
書印とも往々使用されてあるが、印語の意を解しそう
つたが林家の門人と云ふ意味と、此印の後に林崎橋
書こ使はれ、僅かに林家の門人生存中のみ唯天生存中のみ
云を用ひ、今も林崎の家、あるとの鉄印で四角の陰
刻であるとやうに、小島氏のおもい「ちかひより」と後
あべきだと推めるかもやうへたことも多いが、小島自身が
斯く自ら云ふのは証拠は鞍口本紙の校正書入本にも
この左の手識がある

文政元年山風戊寅秋七月朔以来古物所蔵
古鈔本校正了

故思摩茅鹿太郎花押

の景色は文学にも絵人に格別名山名
を与えて及ぼすように思はれる
思はれるまま今となっては
いが蜀の奥深い景色をそれいと
思あるが宝食天の蜀の滝
も書いた紀行をそれのは二三十年
前に神秘の思ひがあるたの国
蜀の桟道に似た所は日本にも無
いといふの。御山桟道もあり塩原
あり紀行の東海道や岩船駅
の吉源一泉の著しあるを人らは
ろう。この景色はあるうち孫

榛原撮影

くらくらへば日本にあるのは特別の祝福がなければ論ずる
足らぬ。(佛)蜀道を行く桟道を行ったあの蜀道
を想像して見ると恐ろしい。

○見合は毎々新世界を数に乗ってビルデング前を歩者と
ある基礎を目の原がうたのはあるいとみを行くの気もなく歩
しても長らが考くるまもなくえんが地下室の天窓でえんを出て
多の之のとを入れて長るどある。雪の日は日仰向の後
雪を想い道路が積雪の為め天窓より高く或
る庭頭か路をすぐつて輪廻し天窓を塵しても高とも
家と天井つたことるとも想ひ刻り、今は天窓の上を不気
で踏人いるのも一奇なるべしとせずと猶災を恐れ浮な
ろうと。

○碧梧桐は河東碧梧の俗人で蕪村流の男であつたが、其許
音を慕つた人、自分も卿か交りがあり、いつか蕪村の古一路
を求集りを出版を企てた時、自分の為めもやつてきた。
自分は何の所の花かうまいので、野菊の版書●を辣
のつけ方かうまいと褒めて、数々の小言を与へた版書の
桜の枝をいろ〳〵毎回を考へ出すし、蕪村は石松の伝
を添へた一帖の文を出して示し、蕪村は石松の伝
書を書くが、こんなもの絵の意がありとして示した
ら、碧梧桐も賛成する所があつて、蕪を蕪村画集の
巻頭に収めたことがある。その時、礼に来られた短冊は
寂寞の佳り交を張つてあるが、自分はあの男が
六朝風の字で俳句を書くことが、翰墨があつて

好きである。

○安田家から雑法（書法）右に記した第一輯を出のせられた。これは
川瀬一馬の接伝で、右人あるの面白く、の強い故人分目
論人記のを見ると、これは書法家の経伝を述
かれたものである。安田大庫の蔵書の蔵書印は侍くを知れさる
優品のファリシミレールをくぬのもあるも、川瀬は安田の生前
書庫を見つて来ると、神ぐもあれから、解説を加へて長
る。北斎まんがの原本を始め、近代家の自筆本を
多く収め、大蔵虎雄自筆の注文は書の見の全文を載
せてある。安田の徒子が作る巻を出したので、父為之翁すら
も春の現れで、自分は此の冊雅伯を手にし、殊に感
激をとこうした。

○酒後時々録（上）

一柳い緑色い紅と云へば彩色を密しく意味あり。まん
ま真面目な文学が性で滑稽諧謔の味合ひ仕ハ
人の眼を解くもおもしろい。明治閣僚が維新の頃の
あり比時政府い財政困難で月給を三ヶ月も遅し滞
るいことがあつたの閣僚い狂詩を綴りて政府の窮状
を笑つたが其詩の結句に月給三月紅とある。紅い
訓でクレナイと読むので赤い。山本北山の漢学塾に
も似たことがある。或る時何人か北山先生に鴨を贈り
たいことがあり、塾生い窃かに肉を切り取つて食い、羽
毛も其儘にして置くと先生肉の無いのを見て

複原製

しかし、先生を叱る代りに、鴨一匹今保つてゐると書生
を呼び、鴨い肉をミトリと読むので緑色である。
生い之を見て默して居た。鮭一片今紅と書い
て先生の眼前の肴とした。先生の塾い検素な鮭
の一片すら食せしめないことを攻撃した人のあ
る。

一ことしの干支に因み丑の玩具を贈り来る。
あり、信州で製産したもので柳で作られてゐる。
体のみが長け一尺餘、上頭に丑の首がある。瓷
器の鶏の形に似てゐる。牛の鼻に紅白の絵を
ヨリ合せた紐が付いてゐる。頭の左右に紅白黄
の鼻が長く垂下してゐる。こんな

考しから伝ぬこと行はれもある玩具が否洋のものもいが
鼻を穿つ化粧を他の同一玩具の紙と接ひ合はせも
兒童の面白く玩具と特に珍り強調を子ふ所
又湖牛の趣があつて一種の興味をつゝくと、

一　いつ頃どや隠業の家共の今昔をあいれることもあるが、
そこに新財天を祀つてあるので、藍者がよく参詣
する。女性が神であるから私も参るまいが、境内に男根
の石像があつても、見い役行者の崇めしい像が刻さ
れてあるが、甚頃都の男根を形どり、昔しから「可
詠地蔵」と称せられ、長の、又はワジルシの略でも
らう。こんい意の成就してしまうと云ふ、石を
極すれば意が成就すると云ふので信仰がある。今

さき天の神時のコンあるものも保れてゝ、
考しの地蔵が男女婦夫の場所であつたのも神
の御思召と解されるも知れない。

一　不忍の池もいどく狭まつたが、競馬場を作ったなる
埋立のが主もく初まりは何年であつたか
自分の記憶ないが、或る雑誌の記載によ
ると、明治十七年共同競馬会社が面積十三
町二畝を埋立てとあるが、其後も多く埋立を
行つた様子である。

一　今は無くなつた松源と云ふ料理屋があつた。
有名で自分も頻る懇意があるが、確か前から
何日か忘、廃業したもあり所、東台の戦争の

時の宮軍は雁鉾と共に松源を生捕ること、なしとあるから、推古前から、あるいは家の相続者、あの家の姓は珍らしい名で小糸と云ふ。自分の小家の所有地入谷を支配をしたこともあるので、自分の若い頃、自転車と迫で可なり散歩したが、松源の妻は有名な美人であつたが、破鏡の後一生を保つた日本橋通りであつたか、待合を出したこともあり、自分かそれ位三度位海人どこもあつた。松源の性格は若い時でも、池を踏んで宜宴酒しに池あを見る性格のあつたことを想ひ起す。乃附記して置くことのあること、小糸姓は珍らしいが、揚げ出しも同姓であるから多分親戚であらうと思ふ。

一　以上を私一つ一つある際柿を複製し、今から来殿山名所と雲し、あるを複製本を配本して、きれ、天和二年出版の書で、欽定いちけんで義田の宮の葉で、無安東殿山の瓦器が実を掘し記録初のものであり、当時の瓦器が実を画さる。桜と宮乐の図や蓮無を乗つて従来する図や若衆の図や蹴鞠の図をも、今見ると真と陳世の感を起さしめるものである。

一　大阪南の吹多が舞いて、天び来たので、枝いて見ること、自（京都）高瞬宮が載せてある

雪と闘ふ

市島春城

私が田園生活をやつてゐた頃、十二月の末方であるのに、雪が案外早く降り出して、翌朝雨戸をあけんとしてあかず、大時を過ぎてゐるのに薄暗くして夜がまだ明けぬかと疑はれ、やつと戸を開けて見ると、見る限り白銀の世界で、家前の道は雪で塞がり、家前の小河に沿ふ竹林に雪に圧せられて枝が垂れ下がり、庭の樹木も半ば雪に没してゐるのに一驚を喫した。正しく昨夜三尺ばかり雪が降り積つたので、初雪としては稀有であつた。

初雪が三尺に及んでも、まだ屋上の雪を落すには及ばないが、こんな機會に雪と闘ふ準備をせねばならない。

（闘雪の武器）

といへば、雪下駄や、カンジキや、蓑の帽子、草鞋の爪掛や、雪を掃ふコイスキなどで、常には物置へしまひこんであるのを、この機會に取り出して、破損したものを繕ふたり、新調したりする。それを見て喜ぶものはまた小兒輩であるが彼らがもつとも欲するものはコイスキとスベリ下駄で、しきりにせがむから、小兒用のコイスキやスベリ下駄を用意せねばならぬ。今は長靴などがどこにもあるから、雪路を踏むに役立つが、昔はそんなものがなく、近隣を訪ふにも雪が深いと蓑笠を穿かねばならず、更に雪が深くなるとぬかりを防ぐために沓の下にカンジキを着けねばならなかつた。三尺くらゐな雪は雪國では格別意としないが、五尺、六尺と降り積もると、隣家の交通すら断絶する。まして五町、六町離れた親族を見舞ふことは容易の業でなく、全く旅でもする如く十分武装を要した。

雪國は恐ろしいが……

雪が降ると空氣が淨化されて一點の塵を止めないので、氣持がよい。空氣が澄つてゐるので氣持がよい。太陽が雪一面の大地を照らすと、反射のためにまぶしいほど照り渡つて、春よりも陽氣を覚える。遠山は十二月に入ると既に雪に戴いてゐるが、間近の山の雪に包まれたのを見るのはこの初雪の時で、これがなか〳〵よい眺めである。雪が降ると萬籟寂として、近く遠行く人が踏する音語も遠く聞える。たゞ時々竹林の雪が風に搖れてガサ〳〵落下するのが

新整腸劑
宿便排除に
常習便秘に
胃酸過多に
胃腸疾患に
乳幼兒便秘に
適便秘腸麻痺症
常習便秘結症
乳幼兒便秘症
胃酸過多症
胃酸性胃腸
口内炎性口腔
特許法第四十一条
西勝造鑑製

ケラー嬢因で婚姻されたるも、御離宮あることであるが、御離宮に童謡があるのも仕用の不便であるが、志かし他の紀念物の如く矢鱈無駄なものであるかと自分の現在時代の佩用術章がいくつも残てゐるから、それやこれを納めて保存することにした。

【カット説明】この抱ッこされた可愛い赤ん坊はベッシイといふ生後六ケ月のお嬢ちゃんです、――この寫眞は今から四十一年前に撮影したもので、この赤ん坊とは今を時めく世界一の噪の主シムプソン夫人なのです、抱つこしてるのはお母あさんのアリス・ワーフィールド夫人です

○英國皇帝陛下を大佐から長かしめれ世界第一の大ローマンスの女主人公ハッピーエンドの赤ん坊であつた

一自分の為めや雑誌を頼まれて頼まれて頼まれて

や姫厳が著さるべき言論検束時代を公憤を満た
化文八美が報(四)いらるべき雅初を招来する。
志一七見ると自分のを[illegible]思はる校正不
備の文も報国的であるからだ。[illegible]
ゴンナ事を思ふて自ら慰めもある。

一　昨年の寒候は自分と同年輩の老人連は皆な
引籠つて煙を擁して寒を防ぐもあるが自分
は(ドンな日でも)術頭に散策して出掛ける。
の降つたのは里程の雪も出掛ける位で出んば
成らぬ。デパートへ入つて式階を上れば井戸
と称する昇降するものもあり、地下鉄道に昇降すること
乗ることもあつて、地下(四)道に昇降すること

も敢て厭はない。所謂老人の冷めたい
笑を恐れるのも別に自分はまるでシナナ
が能ふだけの体力がある。不思議な風をひか
ぬ限り毎日一度は外へ出る。但し閉口するのは寒い時は
ちょっと。但し閉口するのは寒あの出ることで
昇降は寒時も難儀することが出来ない。[illegible]が
[illegible]デパートといふ厠も[illegible]あるが、(金)中
行[illegible]術もうまく[illegible]を漏すやうな失体
が[illegible]すると[illegible]老人の常とは云へ、漸やく
[illegible]の後人[illegible]を否み得ない。(十二年)

一月春の記す

○酒後片々録（下）

一、二度連続して、そうじて、**嗜**無情の浪曲を聴く
へ、素人あるも、素作いらえりとん、エンゴーのう、ミセモブル
の若化るも、浪曲でこれを少くことい老者の楽りて如侍
ヒせりし、浪変、こんも一世相るも、浪曲いもと卑俗
の故ト以て、新作ヒ、浪曲ハ可るも、近歩
し、実作上、出来ずるも、民衆ハ未だ低能ず、音
曲界の一変化るも

一、化物後川板倉侯、家臣侯の為遠と亡滅の
悲耳、今し或い侯者を領ずしと云ハ、老者ハ
く成り行しべき哉、早く推測し、老者の関係
ある日本国の版図ハ徳川家の間と数年

橋原製

繼ぎ五箇の取来の所法ハつき憂愁し、
今勝ち、恐ろ〳〵後川家ニ於も仕弗と為るべき
為ちそうと、吾輩、一昨年既と北支ちる
が、果然、表之の不幸ハ南ハ来を笑ム

一、之古倉城の金鯱の鱗を盗みるよ後ハ挿ハ
白、其の詳細を記し、ハ新の切板ハ北支の後を
こ附す、石川五右衛門の切板ハ北支の後を
所ハ来るの、その鱗ハ、鯱の日鱗も思ハ程のこの
でるる、の各鱗ハ金き七八品きるることるのこと
が知ん此

一、明治新聞紙ハ以て知ん此が、夏今ハ昨日
又次ハ、張後一面ハ、ヒ又（八七品）きず、酒今

又同時五ちがうことあんも童流異ちがうん交ハ一
切ちがう、直ぐ彼れの和歌とちがう相南の
進詩ちがと、歌集の上木を企てるものちがと云
ふ

一高麗錦郎或る人の紙幅を祝するとて琴秀
の畫を持ち来り、色紙を作れ抑亮七と
ともとむ、余即ち大江丸の句を和す

琴秀さよ一花離れて恋をもつの

一京木真長（長谷川）の雲井紙雁が俗の
腰大而氣象、情世風入祇林巡の詩を紙
して宮の七夕の詩の後の姪子、北渡仙花
の中山を訪ふ山を仮の雪井紙雁を出せり

横原製

松平中山を過き毋を懐ふ花泣石に涙を
灑き雪遺跡を訪ひ雪を訪ひ和歌十
数首を詠じ雪冊子を宮七夕まで、一三
の和歌をあす

石ゆ似て我ゆまと泣くこの山の秋風の
中ま来侵いつ

因りんも過きけむ仙花の中山に居が
涙のこぼれ者

毋倚山居がかくる紅涙まんば一義の
紅葉かはいかも散る

一フレヨパトラ以上とも云ふべき大口マンスの女
主人シレンブリン夫人の倚を撰んで見れ、妻の

The Abdiction of Edward VIII

A Record with All the Published Documents

By **J. Lincoln White**

12×19 cm., x, 164 Pages. 近着 ￥2.10

エドワード八世陛下御退位に關して最も機微に觸れた報道記録。

Her Name Was Wallis Warfield

The Life Story of
Mrs. Ernest Simpson

By **E. H. Wilson**

With 9 Illustrations.
14×21 cm., 117 Pages.

￥4.75 〒.14

世界的話題の渦心たるシムプソン夫人の半生記。近世に於ける最大のロマンスのヒロインたる女性の生活史が「その友」の手に依り忠實に點描され新しき事實が展開されてゐる。

宮廷の謁見式へ臨む盛裝姿

○自分の趣味から云ふと、西洋に於ける煙草のミクスチュアーを賣ることが美しい。酒の混合したのは閉口するが、自分の好む煙草の種々の葉を調合することは、最も望ましい。

——市島春城——

のみき書物の名としたが、それが段々進展して
数々変ちがい意味を持ちいろいろの講者を名と
するものが出来、石鹸読本などゝ云ふ変名も
出た

一　北陸詠者を少へた添田飛雄大印は自分七議
席を到る代議士で多の交りもあるが、北
男は陽物の非凡大を以つて同僚等と知る亡
友陸口五郎と北男と懇意で、時々待合に連
込んだが、相手の女性を物色する骨を折つた
ことを思ひ出す

一　自動車が発明される今日、人力車は美人と
都合で影を隠し、併しまぐ銀世界もなくなる

横原製

街頭を疾駆するを見る、誰れが乗るかと問へば
医師と養蚊とのみ、医師の乗る蚊も其行先は
自動車を乗る事の走距離であり、医師
は回診で乗降が数度あるので人車が便利
であり、養蚊は其の組合に抱く置き蚊帳
の手用としてある。但し往々停車時に二三台
の傍りにあるは何故と尋ねると、田舎の老婆
なれば対する自動車を用ふるの比
その用を代するの比

一　竹内栖鳳の支行録の内に画は宮実び
あるべきなれが、いくらかの少が変はらず
が書かれたものと、簡単な味のある記事

宮家まはるウソが美術であるのだのウソがまことに好べフヲトグラフと何人の選ぶ所があらう。

一

梅風が洋行の事或る時和で席畫を作ふんで日本の美術行脚をやつて居ると辭宮の方から元を拵へて出て来たから一題七つ付さる裸婦であつたのを梅風もドギマを抜かれたところが、多分美を宮生七ちと云ふのであつたらう。自分も往年大阪の湖山に時、美人畫に夢中になつたのあるの時生命の支配を画家のアトリエ位の一室があつた。美人他人の出入を

禁じてある所れが、美等が特別に許さんと云ふ人つに、多くの生年四人の像がカンバスの裏にあれが、一人の若い女が絵もあらはれ立ちもあれのみ、美等は目を蔽ふれた。

金鯱を裸に

穴の網金たれさ壊破は印矢●所個たれら取ぎ制を鎖は印△　鑛金の害被は（右上）
鎖の金たつなに棒延（左下）具道し潰錆（右下）一覧木々佐盗怪たれは捕（左同）

大膽！空中夢を實現

求職

女中 至急十六七歳正直子供好者 當方家族四人女中肯バス阿佐谷下車北一丁馬橋三五九村尾

女店 員驛賣店勤務廿歳位迄給十 園中住込隱慶青委細面談 省線東中野驛北口 賣來菓子店迄

女店 員數名募集十八ヶ廿歳位住 込二眼ル委細面談 深川區森下町二ノ二六前田樂器店

女給 募集見習中月給三十圓以上 常設前通カフエ 看物貸ス公省 人 神田淵田驛西口 形の家

食堂 給仕少女、住込の事、 スルガ台下 洋菓子の店 神田ベーカリー

珠算 に經驗有る女事務員募集學 三〇〇車庫歴高女卒程度蒲田區町屋町 裏ガイク機械製造會社

婦人 家庭教師獨身36歳迄地方人 も可住込居有東京赤坂區 台町二四井口電話赤坂三九三三番

婦人 帳場係算筆に優れたる方を 求む住込月收三十圓以上 牛込若宮町十電牛一五〇 松ヶ枝

乳母 昨年十一月以後出生 給三〇圓位 至急募集 品川區大井鹿ヶ原一二六九 木村

看護 婦派出多忙至急募集 看護婦會電話茅ヶ崎上町 彌生 茅ヶ崎一五七（米山）

見習 看護婦募集 在原區小山町十三（目蒲線 電話高輪二五五）

派出 婦大募集 聖心婦人會 親切連絡 派

配達 員入用希望者至急來談 車雜色驛側 朝日新聞六田區京濱電 東京朝日新聞北澤直配所

配達 二名至急增員體健の者 小田急帝都電鐵下車 東京朝日新聞北澤直配所

配達 廿歳前後苦學生書間通學許 家族的優遇來談大森驛下入 新井消防署前朝日新聞大森直配所

配達 員募集 朝日新聞三軒茶屋直配所

配達 員募集 玉川電車 三軒茶屋下車 朝日新聞三軒茶屋直配所

配達 員募集二十歳前後苦學自由 氷體出來者 朝日新聞中延直配所 二

配達 員募集年齢二十歳前後通學 岩戸町十一 朝日新聞中延直配所 至使市電神樂坂下車牛込區 岩戸町直配所

家庭 教師度被雇當方元訓導多年 上懇談望者教程驗者遠近不問御報多參 荏原區中延町四六一今西

事務 員又は筆生に被雇度し中卒 二十二經驗あり通住共可 牛込原町三ノ五〇横山方畠山

文案 懸倒的に商品を賣る廣告原 稿參、本郷勤勉一編輯に確信あり 一九七發達方丘田

雜務 店員他同業可誠實奉仕致升 廿夜商三生通學 京橋築地一ノ卅 小林

貸邸 大邸中丸高級和洋建九室日 五圓 當環境良目黒省市電便賃六 電赤坂一四八六 天野

貸家 四谷永住町新築門構下六三 二上八二湯殿ガス水道庭有 33敷三電四谷四六〇二谷口

貸家 本郷弓町二ノ八住宅向三階 閑靜賃貸住込隱慶青委細面談 閑靜日當良上八六三下八 電小三六七八 吉田

貸家 東中野驛近上品の平家別宅 樹木多閑靜環良賃35電86三九五七

貸住 宅萩窪五丁天沼一の二八 平家瓦葺三間廻縁庭樹有 賃二三〇圓 電銀一六一七 鈴木

新築 初貸邸高田馬場五分バス二 六區賃分門構八田六下八四半三洋 日當極良上六下八四半三洋 電午三六九五川谷

賣工 場二間半七間總二階五間七 賣可價一〇〇圓深川區扇橋一ノ四櫻井

譲店 至急文房具學校用品玩具店 二三〇圓本人來談總原小學 藤谷原宿一ノ一六三增田

譲洋 裝店 居抜 電話大森六九三二吉川 外遊に付盛業中 仲介謝絶三八〇〇圓

タバコ 校前賃三四百急讓本郷有町一小學校 賃二十八圓 電小石川五二九〇迄

タバコ 店家屋付結構至急賃受度 電話代表北六九二五

電話及金融

無盡 合社通帳他淺地 第一有信帝國生 必ず草下電かめや 勤倫講芝琴平町20加藤方高橋方 高便田草 く本原三かめや 即局町八

衣類

金白金暴騰衣類 買入 神保町日活前入り港湯前◎電參上 ダイヤ時計額鎖 電神田三四二五 丸重本店

賣買

ピア ノ純獨逸ラハルス製大型 五〇圓譲度世田谷太子堂 二六太田玉川乘合北澤一丁目下

小型 サイドーカー附英國製ド ラス號30年式自家用大坂 20加藤方高橋方

カメラ 〇〇最高價買入掘出物豐 〇〇電神田四三三八〇番 神田駿河台上明大側山本寫眞機

ピア ノオルガン他諸樂器最高 ◇格安品多數特賣 神田神保町卽金買入通電神ピ芦須賀樂器

ピア ノオルガン卽金絶對高く 入又は金融出物有用 町交叉點電神田小 神田六九六國際ピアノ

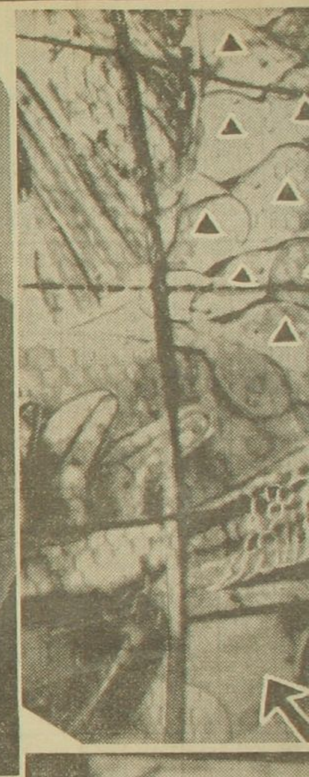
レコード 高價買入 新宿武藏野館前電四谷七五五萬曲 報參萬曲

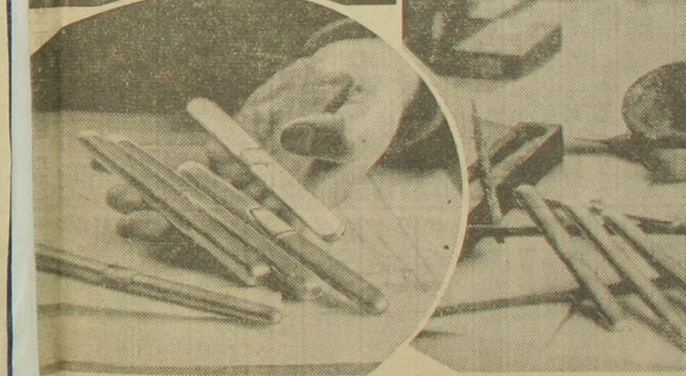
レコード 蓄音器高價買入祥樂モ 特に高く頂拝報參電神ミユズ 神保町電際神田日活横人

ナショナル 金錢登錄器 賣買金融豐島區巣鴨 二の五二電大塚三七〇八小倉商

記事

介人を經て純金百六十匁を持參二千百三十四で賣却し更に殘りの百八十匁の延棒を賣飛ばすべく新世界方面の貴金屬商を賣歩いたが失敗に終つたので人を介して前記今岡時計店に賣飛ばさんとして失敗檢擧されること





（上）は被害の鯱金　△は印を刺ぎ取られた個所　●印は矢穴（右下）鯱の金たつなに棒延（左下）具道し貫通（右下）鯱の金たつなに棒延（左）捕はたれた怪盗佐々木賢一（同）

名古屋城金鯱の怪盗

大膽！空中夢を實現 "昭和金助"大阪で就縛

ミシン職 佐々木賢一（四〇）

禁解事記

【大阪電話】「日本一の鯱盗事件」として城でもつ尾張中京つ子は勿論全國的に衝動を與へた名古屋城金鯱盗難——金鯱五十八枚の盗難は實に年間鯱を利用して二鱗を剝とつたと傳へらるゝ怪盗柿木金助以來の怪事件として名古屋機密局では重大視して事件を發見した去る一月七日夕新聞記事掲載を禁止、愛知縣刑事課は全員をあげて犯捜査を開始、全國に手配中のところたまたま去る廿三日大阪市東區平野町今岡貴金屬時計店に金の延棒六本を賣却せんとしたことから足がつきこの昭和の柿木金助は同市住吉區昭和西一ノ三〇ミシン職工佐々木賢一（四〇）と判明、二十七日夜十時自宅から船場警に檢擧、警視廳捜査課の結果翌二十八日未明犯行一切を自白、身柄は愛知縣刑事課に護送本格的取調べを進める事になり二十八日午後十一時右記事掲載禁止方を解除された

足場傳ひに猿の如く 金網を破り剝とる

木平一の長男、福山中學を二年で中退しその後一家は大阪でメリヤス商を營んでゐたが賢一は來阪後不良の群に入り十八歳の時日本刀を携へて强盗に入り、懲役六年の處刑出所後去る昭和四年夏大阪住吉區日本精華製藥會社に忍び込み約六萬圓の麻藥を竊取賣捌き先を探して居るうち名古屋で捕へられ懲役八年に處せられ

昨年十一月八日名古屋刑務所を出所、迎へに來た母親こと（六〇）とともに名古屋市内を見物、名古屋城にも行つたが五層の天守閣上に夕陽を浴びてきらめく金鯱の姿を見て「あれがあればなア……」と

金鯱 に對する變稽を感じ

そのまゝ廻阪蒲鐵三十日から東區玉造三輪商會のミシン職工として通ひ日給九十錢を貰つてゐたが昭和四年同人が名古屋で檢擧された際別れた內妻（二）と長男（一）長女（六）の行方を探し求めたが判らず妻子を探すにはどうしても金が必要と妻子懷かしさの余り纏つた金を攫むために焦慮の擧句金鯱盗みの大膽な計畫を始め種々研究の結果

一月四日朝天王寺驛から關西線で名古屋に潜入、目ざす名古屋城に赴くと同城天守閣には修理のため足場が組まれて居るのを見て見物人に紛れて午後四時頃小天守に登り人影が疎らになるまでそこに置かれてあつた大木組の陰に身を潜めて時の至るを待つて居たが夜も全く更け、物凄いばかりの靜寂——夜十時、のそ〳〵と這ひ出し小天守から大天守へ、そして五階まで登り詰め同階の窓から這つて猿のやうに足場を傳はつて屋根に上り夜目にもハッキリと見える金鯱の兄に這ひ寄り持つて來たペンチで金網を破つてある金網を破壞體の入る程の穴を明けてもぐり込み、ペンチで鱗の一枚を剝いだところ簡單にめくれたので無我夢中となりペンチと手で一枚々々と鱗數十枚を剝がし——犯人は何枚取つたか判らぬといふ——所持の風呂敷に包み羅りと身につけ再び足場を傳つて五階に降り、足で踏みつけてペしやんこにし、其まゝ天守を驅け下り表門の門を外して松林の中に逃げ込み、ペンチを堀の中に捨てゝペしやんこになつた金鯱を確つかと肌に着け、そのまゝ同城内を脱け出しタクシーを飛ばして名古屋驛に驅け着け五日早曉同驛發列車で午前六時大阪に逃げ歸つたもので

彼は 自宅で素機の坩堝（直徑六寸位）を買ひ込みその坩堝に金鯱を放り込み炭火で鑄潰さうとしたが巧く行かず、やつと鯱の厚烈を變へた程度で紙を剝枚も折り疊んだ形のものとなつたがどうにもならず持て余し去る十五日同市南區大寶寺町中之町金屬分析器根本靜（四〇）方に一部を持ち込み仲介人を經て純金百六十匁を持參二千百三十圓で賣却し更に殘りの百八十匁の延棒を賣飛ばすべく新世界方面の貴金屬商を賣り歩いたが失敗に終つたので人を介して前記今岡時計店に賣飛ばさんとして失敗檢擧されるに至つたのである

金鯱の正體 損害額は五六千圓

【名古屋電話】 中京が誇る國寶建造物の名古屋城の表徴であるこの「金の鯱」は慶長十五年前田、毛利、加藤、福島、黑田、細川諸侯の獻金によつて作られた當時は金色燦として輝いたものださうだが今はそのおもかげはなく時代の流れと共に數度の修復により金の厚さもその都度薄くなり今回の事件で名古屋市亞に愛知縣刑事課の共同鑑定の結果、鱗の裏面には殆ど全部鑄造打付けの年號が入つて居り鯱の厚みは今までの傳說に反して意外に薄く銅の上に紙より薄い金の薄板を張つたもので鱗によつては裏書二枚の厚み位なのもあるが純金分は非常に少く、純金量の比較的多い鱗や尾部は光輝をのがれ發見された五十八板の總重量は七百四十一匁余で、損害は豫想程でなく約五六千圓に過ぎなかつたとはいへ今では神聖なものとして一種の信仰化してゐたものである

處分に窮し延棒に

【名古屋電話】犯人は現場の狀態から初めは實測工事に關係した人夫と推定されこの方面の捜査に主力が集中されたが何等手掛りなく失望、一方犯人が盜み出した金の鯱は名古屋市内で處分することなくおそらく大阪或は東京で潰金にする方法をとるものと當局では金鯱の大きさを一枚一枚セロファンで切り抜きこれを原型として鯱の型を造り金國に手配したもので犯人が自宅に持ち歸つたものゝ處分に持て余し、二十三日今岡時計店で問はれるまゝに十五日分析したたのでピンと來、この旨直ちに船場署に屆け出られ同署では同店に二三日して來るといふ犯人を張り込んで待つてゐたが現れないので二十七日遂に根本を引致取調べの結果犯行が判れ即日檢擧となつたものであつた

大阪市南區大寶寺中之町金屬分析商根本靜の名をいつたのが運のつきであつた

即ちかねて手配によつて今岡時計店では奇難金鯱の賣が十四金であり六本の延棒が同賣であつ

暗の天守閣から市中を俯瞰す

案外脆い鯱のうろこ

白自盜怪

【大阪電話】佐々木は初め取調に口を緘して自供せず「入所前上海から密輸した金を阿倍野の墓地に埋めて隠して置いたのを掘り出した」と逃げてゐたが峻厳な追究に遂に二十八日朝に至つて「私がやつた」と自供重荷を下ろしたやうに輕い口調で

金鯱を見た時、あの金を盜むことが出來れば母親を喜ばし行方らうとペンチではがしたところ案の判らない妻子を探すことも出來るしそれをもとでに商賣でもやつて親子揃つて氣樂に暮らせると考へたのです

天守

閣の屋上に漸く前ひ上つて名古屋市を見下した時空は眞暗闇だつたが足許から誰かにすくひ倒される樣な恐怖を胸一杯に感じた鯱の金が固くてはがしにくかつたのでほろほろ簡單に脱落したものゝ名

古屋駅から大阪行の汽車に乘込むまでは全くの夢中だつたその後自分のやつたことが新聞に出てから實況に十分注意してゐたのだが悪いことは出來ない母親のことを考へると可哀さうでならない、何も知らずに自分の出所を家を借りて待つてゐてくれて親子がやつと一緒に暮せると喜んでゐたが今度の償を果して歸るまで長生きしてをつてくれることやら

大膽 極まる怪盜も流石に面を涙に濡らして係官の前に述懐してゐた、なほ金の賣捌先に付いて取調べを續けてゐたが去る十三日夜天王寺區上汐町三丁目時計店勝村敬之助氏方へ二十五匁百五十四圓九十錢で賣捌いたことが判明したがまだ百匁程不足があるので引續き取調べを續けてゐる

榛原製

國立臺灣大學圖書館

上野の鐘

松浦泉三郎

×

東叡山寛永寺の時鐘に關しては從來殆んど書かれたものを見ない。金龍山淺草寺のそれと並んで俗に石高千兩と云はれてゐた。精養軒側の時鐘で、高さ九尺餘、厚さ八寸、十六瓣の荷花の形の鐘座が、前後二個所にある。鐘樓は二間四方ある。鐘の眞下の部分は、音響の効果と鐘にひゞの入るのを防ぐために、空洞が設けられてある。

時鐘の表面には『東叡山大銅鐘』裏面には『天明七丁未歳八月』とあり、側面には『如來常往無有變易一切衆生悉有佛性』と十六文字の銘が刻れてゐる。

時鐘の維持費、即ち俗にいふ鐘錢の額はもと、寺はその寺の間口の廣さ、大名邸のものはその大名の石高に依つて定められたもので、石高千兩の意はつまりこれである。

明治元年五月以來戰禍のために、この時鐘の音が、二百年來初めて開かれなかつた。翌年二月から時鐘堂頭の私財で復舊した。明治五年十一月再度困難にぶつかつた。一日の十二刻が廿四刻となり、回數倍加のため費用が膨張したのである、六年十一月から舊八町四方の家々から維持費の寄付を仰ぐに至つた。その額は最初、表通りが一戸當り三厘、裏通りが一厘五毛。これが諸式の高騰につれ、三十三年から表通り一戸三厘增し、裏通り二厘增しとなり、更に近くは震災まで各戸一錢宛となつてゐた。

×

先年故人になつた杉田正太郎翁は生涯この時鐘を守り通した人で、祖先代々撞木を握り、正太郎翁が七代目、五十餘年鐘を撞いて暮らした珍らしい人で、日本一の鐘撞きの名人と

云はれてゐた。

筆者も屢々正太郎翁に接してゐたが、あの老人がと、その度毎に不思議な感じを抱かされてゐた。並大抵であの音が出せるものではない。撞木は樫材の上物で、長さ九尺、差渡し六寸餘、重さ廿四、五貫はある。これで鐘に當てるだけでも相當の力が要る。

同翁から聞いた話に依ると、力ばかりでは鐘は撞けず、撞木の握り方、力の入れ方等々に、永年の經驗に依つて初めて體得しうるコツがなくては、到抵鐘の本音は出し得ないと言ふ。力だけで撞いては餘韻が殘らず、力弱ければ遠方へ響かず、又鐘の音も、高過ぎて惡しで、この音色一つを定めるにも、一通りの苦勞ではないさうな。

撞木の尖端が一分一厘鐘座の中央をそれても音が狂ふといふから難かしい。天候、空氣の乾濕、氣流等に依つて相當の相違はあるが、春夏秋冬、普通には、巢鴨から堀の内、神田から日本橋、更に三河島から荒川堤邊までは、この鐘聲が屆くと云ふ。

正太郎翁が名人として畏敬してゐた仙藏といふ老人――この人は日清戰爭當時故人になつた人だが、よほ〳〵な、撞木を執ると云ふよりも、撞木に縋つてゐるかに見える老人になつてからも、別段力を入れてゐないらしく見えながら、至極い〻音色が出て、而もこれが、深川邊まで樂に屆いてゐたと云ふ。

この人に就いては、いろ〳〵逸話もあつたさうで、その中小說の形式でその一二を書いてみやうと思つてゐる。

上野の二ツ鐘といふのが、舊幕時代の名物になつてゐた事は、まだ知つてゐる人も多い事實だが、これは、鐘聲が反對側の湯島邊からも同時に聞えたからなので、今日の常識では當然の事で、何等疑ひを挾む餘地のない事だが、當時は何か神祕めいた事に思はれてゐたらしい。

時鐘の撞き方は、最初に捨て鐘と稱して時刻に關係のない鐘を三度撞いて、それから時刻を報ずるわけだから、一時の時は四度撞く事になる。

上野の時鐘に關してはまだ二三書く事があるが、紙數の關係上先づこ〻いらでペンを擱く事にする。こんな事を書いて貴重な紙面をふさげる必要もないとは思つたが、是非にとの御所望で雜魚のと〻交りにホンのちよつぴり書いた次第、惡しからず思召しが願ひたい。

大學南校と獨逸學

山岸光宣

一、大學南校の獨和辭書編纂

我が國に於て獨和辭書の初めて出版されたのは明治五年（一八七二）で、この年三種のものが出てゐる。出版の時日からいふと、同年八月東京學半社の孛和袖珍辭書が最初である。孛は新井白石などから既に用ひられてゐる字漏生（プロイセン）の孛であつて、當時は未だ孛國と獨逸とを混同してゐたのであらう。この辭書は既に所謂龜子文字（ブラックレター）を用ひ、編者として S. Oda, S. Fudjii, Fu. Sakurai 三氏の名をあげてゐる。最初の S. Oda は元治二年發行の開成所人名錄に獨逸學世話心得となつてゐる小田條次郎であらう。

それに次いで同年九月長崎に於て、袖珍孛語譯囊が出てゐる。これは西園寺公などに佛蘭西語を教へた山本松次郎といふ人が獨佛對譯辭書によつて編纂したものである。彼が姓名を明記せずに、火州後學といふ匿名を用ひて、頗る謙遜な態度を示したのも、獨逸語に關して自信のなかつたためであらう。また羅甸文字を用ひたのも、恐らく龜子文字が讀めなかつたためではなからうか。學半社の辭書は枕字引と稱して當時廣く用ひられたに係らず、長崎版のものは余り流布するに至らなかつたので、今日では珍本となつてゐる。

次に出たものは同年十月東京春風社發行の和譯獨逸辭典で、司馬凌海の書いた獨逸語の序文がついてゐる。司馬は明治初年に於ける我が國獨逸學の第一人者で、その流暢な獨逸語には、明治四年東京帝國大學醫學部の前身なる東校の招聘によつて來朝した獨逸陸軍々醫ドクトル・ミュルレルも舌を卷いて驚いたといふことである。併し直接この辭書の編纂に從事したのは、司馬自身ではなく、その門人なる河村之昌、澤田勝伯、明石文、明石朝幹の四人である。これも羅甸文字を用ひてゐるが、所々に簡單な熟語を取入れたのは、流石に司馬の統率する春風社のものと肯かれる。

その外にも同年京都から語學師鄧度兒夫閑和譯獨逸辭書が出てゐる。これは京都に於て早くから獨逸學の普及に努力した歐學舍の教官が編纂して、獨逸人ルードルフ・レーマンの校閲を經たものだが、同年にはたゞ一部分發行を見ただけで、完結されなかつた。京都帝國大學と石本岩根氏の藏本には明治四年の序文があるといはれるが、私の見た上野の帝國圖書館所藏の完本上下二卷は、明治六年九月新鐫となつてゐる。併しその原稿は既に明治三年に出來上つたともいはれるから、編纂の時日からいへば、恐らくこれが我が國最初の獨和辭書であるやも知れない。ところが、昨年（昭和十一年）四月、東京帝國大學本部の好意により、同部所藏の南校記錄を調査して見ると、明治四年の部に次のやうな文書がある。

大學大丞　加藤弘之

本官ヲ以テ孛語字彙對譯專務被仰付候事

辛未三月廿七日　大政官

これを見ると、東京帝國大學法文理三學部の前身なる大學南校に於て、既に獨和辭書の編纂が計畫されたことは明かである。當時の大學南校は、他日專門學に進む準備として、專ら普通學を教授した。その學科は、講習、傳習、數學の三科で、傳習とは、外國語傳習の意味であつた。初め外國語は英佛二語に限られたが、後には獨逸語をも附加へた。講習といふ言葉も妙なものだが、これは地理、歷史、物理等の諸學科のことである。その後大學南校は大學の二字を取去つて南校と改稱し、また一時閉鎖されたが、間もなく規則を改正して、再び普通科だけを開校し、更に準備教育の充實を計つた。生徒は矢張英佛獨三語學の中その一つを選んで、これを學習した。その中獨逸語が最も振はなかつたやうだが、一方には普佛戰後の獨逸が旭日の如き國威の發揚を見せたので、獨逸語の學習を志すものも決して少くなかつた。然るに當時未だ獨和辭書のなかつたことは、學習者にとつて非常に不便であつたので、その編纂は最高學府として一日も忽諸に附すことが出來なかつたのであらう。初めは同校の教官に命じて職務の余暇に飜譯させたが、後には「十二行一枚料金二分（五十錢）宛ヲ以テ」原稿を買上げることゝした。それにも係らず、余り進捗を見なかつたので、更に民間の獨逸學者の助力をも仰ぎ、また校合の報酬として一枚につき二朱（十二錢五厘）を支給したが、これが完成したといふことは聞いたこともなく、また同文書にも全く見えない。加之、同六年の文書によれば、上海新刻の獨和字典一部十五圓のもの百部を買上げの上貸渡し、或は拂下げ致度き旨文部省に願出でゝ許可されてゐるか

譯方御取計らひ有之度申上候

東京市麻布区霞町
大學南校御中　　東京市麻布区霞町
横濱一千八百七十七年　　横濱一千八百七十七年
獨逸人　　獨逸人
ヒンケ　　ヒンケ
事明治五年　　事明治五年
ヒンケ　　ヒンケ
右蒸氣船無事長崎へ書取
長サ英尺二百二十六フート
十二分ノ四、深サ十八フート
八百十五噸積ミ
内四百三十噸蒸氣機
廿二馬力
千八百五十三年ノ建造
舊米ノ名號　ライン

我が國に於て獨和辭書の初めて出版されたのは、一八七二年（明治五年）であるが、この年三月東京學校から、南校の獨和辭書は遂に流産して了つたものと思ふ。この上海版は、所謂薩摩辭書で、薩摩學生松田爲常、瀬之口隆敬、村松經春三人の編纂したものである。松田氏は私が一高入學の當時、まだ同校の舍監をして居られた。

二、普佛戰爭と大學南校

東京帝國大學醫學部の前身なる大學東校は、明治二年相良知安の建議により、從來の英吉利醫學を捨てゝ獨逸醫學を採用することゝなり、先づ獨逸から陸軍々醫ドクトル・ミュルレルと海軍々醫ドクトル・ホフマンを招聘することゝなつたが、明治三年普佛戰爭勃發のため、二人の來朝が延期された。それと共に南校に於ても諸外國語に造詣の深い獨逸人教師ホルツが一時出征のため來朝が延期となつて、教授上に不便を來たした。その外普佛戰爭が日本に於て惹起した紛擾も、間接ではあるが南校の獨逸學と關係があつた。

明治三年七月北獨逸聯邦の普魯西亞が佛蘭西と戰端を開いたので、我が國も兩國公使の要請により、局外中立を宣言した。當時我が國は未だ國際法などに通じてゐなかつたので種々の紛擾を惹起した。歐洲の現地に於ては、普魯西亞軍は破竹の勢を以て佛蘭西軍を擊破したが、東洋に於ては海軍の狀勢から見て、佛蘭西方は普魯西亞方より遙かに優勢であつた。それで横濱港にあつた佛蘭西軍艦は、我が國の局外中立を無視して、横濱を出港した普魯西亞商船を追跡するやうな不法行爲をも敢てした。この時普魯西亞公使は、同國商船ライン號が和蘭領事の許に抵當に入つてゐたのを處分することを有利と考へて、これを高島屋嘉衛門に四萬弗で賣拂つた。高島は當時横濱屈指の貿易商で、後には易斷を以て有名となつたので、政變ある毎に、當時の政治家が竊かに彼を訪れて伺ひを立てたものである。このライン號讓渡しの契約書が獨逸文で書かれてゐたので、それを飜譯するやうに、外務省から南校へ依頼があつた。明治二年發行の職員錄を見ると、既に外務省の大譯言として

從七位守藤原朝臣政方（石橋）
從七位守藤原朝臣嘉度（立）
從七位守鄭　永寧（鄭）
從七位守橘朝臣宗峻（子安）

と朝臣づきでいかめしい名があげられてゐるが、同省には獨逸語の讀める人は未だなかつたものと見える。明治三年の南校記錄の中に、次のやうな文書がある。

別紙中洋文之儀船目錄に有之由に候へ共ゼルメン語に付き未だ當省には同國の學術心得居候者無之に付き飜譯出來兼候就ては至急入用之書類に付き御校に於て飜

一、大學南校の獨和辭書

大學南校と獨逸學

山岸光宣

一、大學南校の獨和辭書編纂

我が國に於て獨和辭書の初めて出版されたのは明治五年（一八七二）で、この年三種のものが出てゐる。出版の時日からいふと、同年八月東京學半社の孛和袖珍辭書が最初である。孛は新井白石などから既に用ひられてゐる孛漏生（プロイセン）の孛であつて、當時は未だ孛國と獨逸とを混同してゐたのであらう。この辭書は既に所謂龜子文字（フラクトゥール）を用ひ、編者としてS. Oda, S. Fudjii, Fu. Sakurai 三氏の名をあげてゐる。最初の S. Oda は元治二年發行の開成所人名錄に獨逸學世話心得となつてゐる小田條次郎であらう。

それに次いで同年九月長崎に於て、袖珍孛語譯囊が出てゐる。これは西園寺公などに佛蘭西語を教へた山本松次郎といふ人が獨佛對譯辭書によつて編纂したものである。彼が姓名を明記せずに、火州後學といふ匿名を用ひて、頗る謙遜な態度を示したのも、獨逸語に關して自信のなかつたためであらう。また羅甸文字を用ひたのも、恐らく龜子文字が讀めなかつたためではなからうか。學半社の辭書は枕字引と稱して當時廣く用ひられたに係らず、長崎版のものは余り流布するに至らなかつたので、今日では珍本となつてゐる。

次に出たものは同年十月東京春風社發行の和譯獨逸辭典で、司馬凌海の書いた獨逸語の序文がついてゐる。司馬は明治初年に於ける我が國獨逸學の第一人者で、その流暢な獨逸語には、明治四年東京帝國大學醫學部の前身なる東校の招聘によつて來朝した獨逸陸軍々醫ドクトル・ミュルレルも舌を卷いて驚いたといふことである。併し直接この辭書の編纂に從事したのは、司馬自身ではなく、その門人なる河村之昌、澤田勝伯、明石文、明石朝幹の四人である。これも羅甸文字を用ひてゐるが、所々に簡單な熟語を取入れたのは、流石に司馬の統率する春風社のものと肯かれる。

譯方御取計らひ有之度此段御掛合に及び候也

庚午十一月十七日　　外務省

大學南校御中

それに續いて次のやうな飜譯文が載つてゐる。

日本在留獨逸北部聯邦ゼネラル・コンシュラート即今記錄中に北部獨逸蒸氣船ライン各號一艘商人ア・グレーレン氏ヨリ日本人高島屋へ洋銀四萬弗ニテ賣拂ヒタル事明證ナリ

横濱一千八百七十年第十二月二十七日

獨逸北部聯邦

ゼネラル・コンシュラート

ブラント手記

右蒸氣船旗章證文書取

長サ英尺二百二十六フート十二分ノ一、幅廿八フート十二分ノ四、深サ十八フート十二分ノ六

八百十五噸積ミ

内四百三十四噸蒸氣機械ノ量

廿二馬力

千八百五十三年グラスゴーニテ造ル

舊來之名號　ライン

南校獨逸語教官の飜譯によつて、獨逸汽船の賣買は滯りなく濟み、高島もまた比較的安くこれを買受けることを喜び高島丸と改名して、早速函館へ廻航させようとすると、佛蘭西公使が突然外務省に向つて嚴重な抗議を申立てゝ來た。日本は局外中立を宣言しながら、我が敵國の船舶を買入れて、これを北海道に廻航させんとするのは、中立國としての義務に戻るものであり、また船舶の代金は彈丸と變じて佛蘭西へ不利を齎すものであるから、佛蘭西はこれを觀過することが出來ないといふのである。それで外務省は大に狼狽して、高島に命じて船舶の廻航を禁じ、また代金を拂戻させんと努めた。これを聞いた高島は大に憤慨して、國際慣例に無知なのに付け込んだ相手方の不都合を非難し、また佛蘭西公使にも直接談判を試みたが、不得要領に終つた。それで高島丸は全船消燈の上、夜陰に乘じて横濱港を脱出すると、忽ち佛蘭西軍艦の感知するところとなり、追跡急なるものがあつたが、わづかに虎口をのがれて函館に到着した。この事件は我が國に於ける最初の局外中立宣言に關聯した紛擾であつたが、大學南校の獨逸學がまた間接これに關係のあつたことは、興味のあることである。

（昭和十二年一月）

郷土研究所載

上の右　棕櫚帽子と棕櫚蓑

上の左　ヒロラ蓑

下の右より　藁深沓（雪中用）　甲（スッポリ）　同短沓（スッペ）　藁深沓二

（説明參照）

扨ヒロ繪は棕櫚帽子、棕櫚蓑、ヒロラ蓑と、スッポン（藁深沓二種）とスッペ（藁短沓）で何れも雪中用具である、棕櫚帽子、棕櫚蓑は其に中魚沼郡千手町で得たものだが大阪方面から來るらしい、ヒロラ蓑は方言ヒロロ（ミヤマカツスゲ）を秋季に刈つて冬季に作る、上越下越一般であるがラロロ或はヒロラ、ヒロワと訛る、雪を擬いて輕快な特長がある、南魚沼郡六日町渡邊行一君の寄贈である、藁深沓甲は東頸城郡松の山採集、長靴のやうに足をスポリと差し込むもの、乙は南魚沼郡鹽澤町採集、前が袋けてゐて合はせて紐で結ぶもの、しかもそこに脛當風のものが附いてる、藁深沓は西頸城郡ではズンブク或はサカシマ（郡誌）といひ、中魚沼郡でスッポン又たスッポリといひ種々の形式があるが蒲原平原あたりのは又た別式で脛當てのないものばかりである、スッペイは俗にいふジンペイ草履に側をつけたやうなもので、普通に沓といふ突掛け式のものよりは遠道に適し構造も餘程丁寧である、次號はカンジキ類を載せて見たい（編者）

昭和十一年の干支は丁丑に當る爲め、書院表紙等に用さらるべきものが多く使用せられるであらう。先づ傳つた頃、此人の筆も輸入され、唐の張彥遠の名畫記に載せられたものであらう。源實朝が、宋の陳和卿を招き、東山義政公も、此人の畫を珍藏したと傳へられてゐる。又南宋の岡次平も、鎌倉時代に當り、支那との交通も頻繁なりしため、種々の繪畫が、盛んに我國に輸入せられ、江南の生人畫も、或は元の張彥方の繪畫が、我國へ傳つたもの、又は南宋の岡次平も、此時代で、我國へ渡つたものは數が多く、殊に牛の畫で其名を得て居るが、東山義政公も、此人に畫牛の妙手と改めた。後に剃髮し、世に雪舟と稱し、後世、雪舟を能阿彌といひ、桂雪齋、春陽齋、及び雪舟が有名である。雪舟は通稱を能阿彌といひ、文に足利時代に至りて、遺憾が誠に少いとの事であるが、此人も亦、寺攝政と稱し、後に雪舟と改めた。雪舟は元の張彥方の繪畫を能く、世人に畫牛の妙手と稱せられたが、殊に畫牛を能く、古來有名で、古人に、牛を畫いた人に、牛を畫いた人に、牛を畫いた

古志路所載

上の右
棕櫚帽子と棕櫚蓑

上の左
ヒロラ蓑

下の右より
蘆深沓（雪中用）
甲（スッポリ）
同短沓（スッペ）
蘆深沓二
（説明參照）

表紙繪と口畫牛侯

ものゝ表紙繪は牛侯生長の本業ですが、寫生を主一途の生活に入つてから、本業をおろそかにして夏の永い日も、やがて秋の夜長くなる頃、牛侯の手で、半若紙のヤーく原位置に置かれる。

やがて舞じて、見後脚で、外はなし。此時牛侯の口畫、淡左工門殿のフンドシ、牛取り音に優び著に、だと思ふ。かくて解かれて、牛侯は、ホッとして、

畫牛侯

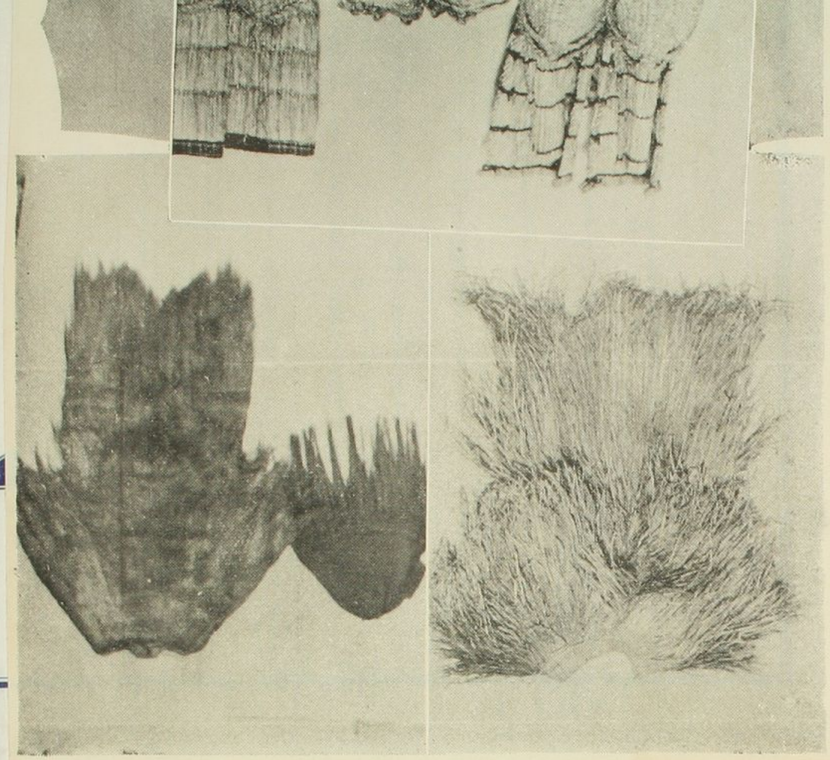
松風閑話

松風軒主人

湯の茶

武帝時代の畫人とあれば、是も距今千七百三十餘年前、即我國の寧楽時代は、元の張汝方の牛は、一説に南宋の寧宗年代である。遺憾が誠に惜しいとの事であるが、此人も亦古来有名である。倚左右候記に抑牛を畫いた人にて、世に稱せられたが、殊に畫牛の妙手として、寺攝政と稱し、後に禪門帝の頃、摂政関白を能阿彌と云ふ。蔡鵬

蔡鵬の牛畫を珍藏した事は、君曙堂觀左右候記に記されてある。翠牛の圖の中部に記して、倚基通公が有名である。藤原基實公の子である。古くは近衛家の祖で、鳥羽上皇御門帝の頃、摂政関白を能阿彌と稱し、後に禪門帝の頃、摂政関白を能阿彌と稱し、後に禪門帝の頃、摂政関白を能阿彌と稱し、後に禪



松風閑話

（二）

湯の

七百三十餘年前、即我國の鎌倉時代に當り、又元の張汝秀武治時代にて、距今千百餘年前に當り、又元の張汝秀武治時代の畫人とあれば、是も距今一説に南宋の寧宗年代は、遺憾が誠に妙いとの事である。次に足利時代に至りて、世人に賞讃せられたが、春屋妙葩、松雪齋、及び夢叟等が有名である。春屋妙葩は頂稱を能阿彌といひ、畫くこと最も妙にして、其眼球を淡紅色にする事が、特色とされて居り、其師の梶も亦牛馬野獸を畫て頗る巧みである。子の雪も亦牛を畫て凡でない。何れも生趣あり、氣韻ありて、少しも俗氣もなく、床に飾りて更に一段の風格ある點に於て、寧ろ神化の感がある。

東山義政公も、此道、嶋の牛畫を珍藏した事は、君藏觀左右帳記の中部に記されてある。藏牛の圖として、は古來此人の畫を第一に推す樣である。尙左右帳記に、鳥羽土御門帝の頃、攝政關白たりし人にて、世に普賢寺攝政と稱し、後に剃髮して行理と改めた。書畫を能くし、殊に畫牛の妙手とし、て、世人に賞讃せられたが、我國へ渡つたものは數が少い樣である。

扨て我國に於て、好んで牛を畫いた人に、古くは近衛基通公が有名である。基通公は藤原基實公の子にて、後公は、

表紙繪と口繪解説

からの表紙繪は郷土玩具の中新潟の泥天神と廿村郷の木牛であす、寫生を早野一谷先生にお願ひしました、泥天神は新潟に傳

やうが無い、只後脚に付けた繩を引張つて首振を如して居外はない。此時群衆をかき分け小柄の人が黑牛の傍に走りつた。此人は、牛取りに其人ありと言はれた渡澤村の有力、彦左工門殿のアンニヤ（兄樣の方言）である。ヒラリと牛首に飛び着いたと思ふや、モウ牛の首は捩上られて居たとふ鮮かさである。かくて二匹の大牛は觀衆の拍つ雨のやう拍手と、牛若衆のヤーツと上げる勝鬨とに送られて、元氣く原位置へと引き上げた。飼主は大樽の鏡を拔いて村中の衆をねぎらう。

かうして夏の永い日もいづしか傾いて米山の端にかかり。

果山殿に仕へて同朋となり常に公の左右に侍し、或は和歌に或は點茶に、或は鑑定に、非凡の才能を顯した人で、畫は初め周文に學び後牧溪の畫風を習ひ、筆意頗る輕妙にして、其落款ないきものは、宋畫と誤られた程である。

殊に水牛牧童の圖の如きは、得意中の得意であつた。學叟は則藝阿彌の事で、春鷗齋の子である。是亦宋人の畫風に倣ひ、頗る氣韻の高い畫をかいた。又其子眞相は、俗に鑑岳と呼び、父子三代の内、最も秀でた人と云はれ、君臺觀左右帳記を作つたのも、實に此人であつた。畫を父祖に學びたるは勿論、牧溪をはじめ、唐畫を學んで堂に入り、好んで牧童野牛等を筆にし、其牛も亦水牛が多いのである。宋人の風趣を、捉へたる點に於ては、恐らく春鷗以上であらう。此三人の畫は、左程稀品でなく、世上に散見せられ、中には六七尺幅の大幅も珍らしくない。

先頃見たものゝ内に、許由の圖があつた。是は堯が箕山の隱士、許由の賢なるを聞き、牛を曳かして其出處を促がした圖で、山樂や永德等も好んで畫いた題目であるが、眞能の畫は、如何にも朴雅にして韻致あり恰も宋元の名畫を見るの感がある。又能く見る牛の圖に、五牛の圖、政黃牛の圖等、佛說より出たものや、寧戚飲牛高誦の圖、魯公明儀の對牛彈琴の圖等、唐宋名家の遺墨、或は我朝の周文、祥啓等の名蹟が、相當世に殘つて居る。德川時代の畫にも、是等牛に關するものが澤山あり、江月、玉室、澤庵等の賛のあるものも、可也の數に上つて居るが何れ本春は其床上に飾らるる事であらう。

政黃牛の圖は、釜にも澤山あり、大西淨清は、圓相內に、此圖を鑄出したものを多く作り、茶家の愛玩する所となつて居る。芦屋にも此圖の釜があり、彌阿彌古淨味の作品にも、此圖のものがある。又牛の圖を鑄出したものもあるが、此十牛は廓庵志遠禪師の作と謂はれ、見性の順序を十牛に例へたもので、尋牛見跡より、忘牛人牛俱忘等に至る、十の例を引いた禪の教にて、是は往々水指や、茶碗にも畫かれ、又畫卷物として飾らるゝ事もある。宗旦や遠州公、澤庵、江月等の畫賛物、近くは川上不白も澤山之を畫いた

現に實見したものも二三に止まらない位、多いものである。是は僧家よりも、寧ろ茶人に悅ばれたものである。又香合には、人の知る臺牛、笠牛、菱牛、葛籠牛等、牛の型物や、圖を畫いたものが澤山ある。其名器に至つては、巨萬の價値を有するものも尠くない。是には交趾もあり、染付もあり、安南もあるが、何れも渡り物にて、年代も可也古いものがある。臺牛や笠牛は隨分數多く見受けらるゝのである。

尙ほ牛に關する、古語の一行物や、茶器類についてお話する時は、際限もないことであるから、何れまた機會を得て執筆することに致し、此度は以上の程度にやめておきます。

ゐる牛の香合にて、其笠は多くは白檀色、身は青又は黃色が多いやうである。

臺牛は臺の上に、牛の居る香合で、何れも貴重品である。此型物香合番付に、記載せられて居るものの外に、牛の形や、牛の模樣のある香合は澤山ありて、茶人の好み物も亦、相當にあるやうだ。兎に角牛は、一般に黑牡丹とも稱し、古來畫家や、美術工藝家の、好題目となつて居る。故に、前記の如く繪畫に、茶器に、

昭和十二年一月十七日　（日曜日）
（第三種郵便物認可）

世界文化の視野へ
現れ出た滿洲國

三百年興亡
清朝の

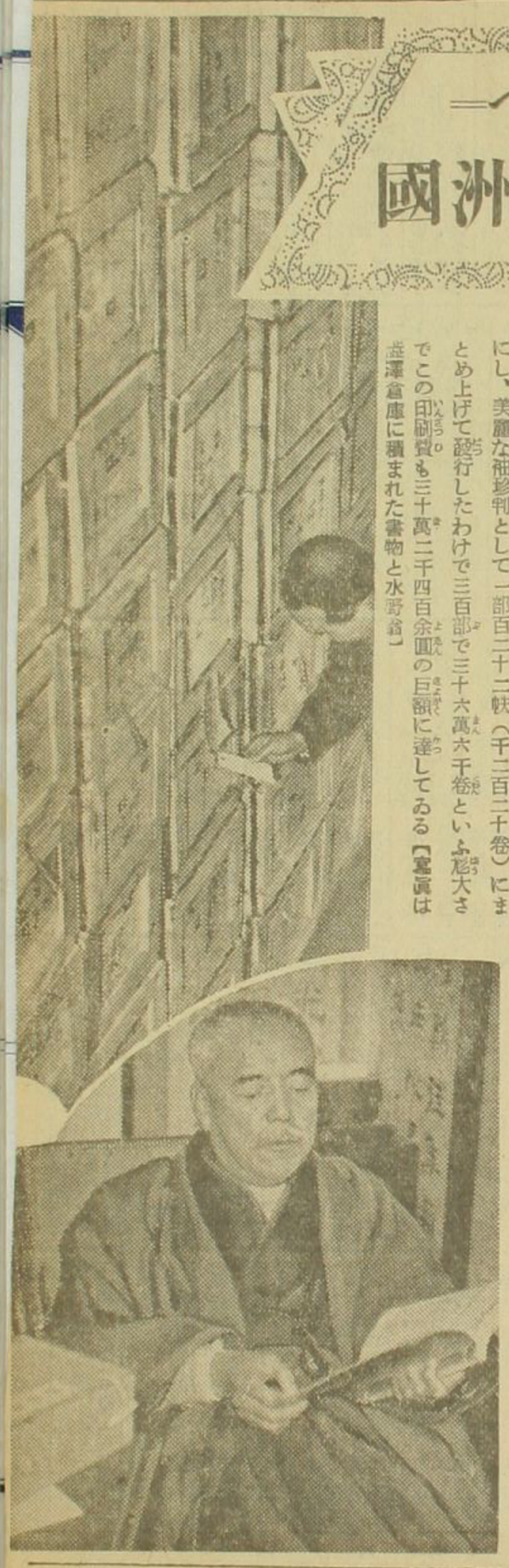
何を

滿洲國建國の意義を文化的に世界に宣明する「大清歷朝實錄」百年の努力漸く報いられて舊臘末完成、新春と共に清朝三百年の同國並に我が國は勿論世界各國の各國立大學或は圖書館へ贈呈の地滿洲奉天舊宮殿內と北平の舊宮殿內に各一部づつ御祥上傳へられたものに更に宣統帝四ヶ年の「宣統政記」を加へ、美麗な袖珍判として一部百二十二帙（千二百二十卷）にし、とめ上げて發行したわけで三百部で三十六萬六千卷といふ。でこの印刷費も三十萬二千四百余圓の巨額に達してゐる。

〔澁澤倉庫に積まれた書物と水野倉〕

業務
レコード　東京市麻布區霞町一番地　電話麻布一一〇八番
東京市麻布區霞町一番地　電話麻布一一〇八番
東京市麻布區霞町一番地　電話麻布一一〇八番

世界文化の視野へ
滿洲國は出れ現



三百年興亡のあと
清朝の祕扉開く
何を語る？　三十六萬卷

滿洲國建國の意義を文化的に世界に宣明する「大清歷朝實錄」の複製出版は同國政府から委囑された日滿文化協會で着手以來滿二ケ年の努力漸く報いられて舊臘末完成、新春と共に清朝三百年の祕められた扉が全く開かれて、三百部の限定版中、特製の三部を除き同國並に我が國は勿論世界各國の各國立大學或は圖書館その他に寄贈され一段と國際的光彩を放つことゝなつた、この實錄は清朝發祥の地滿洲奉天舊宮殿内と北平の舊宮廷内に各一部づつ御物として太祖以來十一代德宗に至る代々の政治の實際を記載、順次嚴封の上傳へられたものに更に宣統帝四ヶ年の「宣統政記」を加へ合計卷首四十一卷本文四千三百六十二卷といふ大部なものでこれを縮册にし、美麗な袖珍判として一部百二十二帙（千二百二十卷）にまとめ上げて發行したわけで三百部で三十六萬六千卷といふ尨大さでこの印刷費も三十萬二千四百余圓の巨額に達してゐる【寫眞は澁澤倉庫に積まれた書物と水野翁】

出版委員は滿洲國側は鄭孝胥、羅振玉、榮厚、丁士源の各氏日本側は羽田亨、池内宏兩博士並に水野梅曉氏が當り、技術方面の總監督は小野玄妙博士及び前記水野氏、よつてまづ奉天に臨時作業場を建設京都の小林寫眞館主以下三十數名が晝夜兼行で一枚々々寫眞に撮り、大藏經出版會社の手を經て芝浦の單式印刷會社で印刷、非常なる苦心の下に完成したものでこの種出版のレコード破りであつた

かう

して出來上つた實錄は目下は澁澤倉庫に保管してある一部を除き既に奉天の國立圖書館内に嚴封の上納められてあり、近く特製の三部中の一部を同國皇帝陛下より我が皇室に御獻進遊ばされたのち一般に同國政府より配布、初めて公にされるもので

その内容は二十六萬八千六百余ページにわたり、日本では元和二年より大正元年に至る二百九十七年間即ち秀忠將軍から德國時代を經て明治維新、更に日清日露の兩役から明治大帝の崩御に至るまでに當りこの間立場を變へて最も

重大

な關係にあつて亜行して變轉した友邦の歷史の齒車を然もその時代々々の英傑が盛く現れて活躍する生きた大繪卷を一貫して眼のあたり辿ることが出來、興味盡るところを知らないものがあることは容易に想像され、國際的にいろ〳〵な意味で異常な關心の下に待たれてゐるわけである

反響を呼ばん
水野氏談

右につき水野梅曉氏は次の如く語る

やつと重荷をおろして全くホッとしました、苦心した點といへば何しろ貴重なあの大部なものを然も短日月にやるので氣骨の折れたことで全く想像以上でした、これを活字を拾つて普通に印刷するとなるとそれこそ大變で何年かゝるか判りません、特に滿洲國皇帝陛下の御喜びは非常なもので各要人と共に出來上るのを御待ち兼ねて居られたやうな始末でそれだけにこちらも眞劍にやりました、然も

内容

は東洋近世史の實際でその時代々々に有名な人物が盡く現れて内政外交いはゆる國策の根本について上奏したり協議したり實に面白いもので現に生きてゐる人物も相當あり、これが發表された時には國際的に非常な反響を生むことでせう

學叟は則藝阿彌の事で、春鴎齋の子である。是亦宋人の畫風に倣ひ、頗る氣韻の高い畫をかいた。又其子眞相は、俗に鑑岳と呼び、父子三代の内、最も秀でた人と云はれ、君臺觀左右帳記を作つたのも、實に此人であつた。畫を父祖に學びたるは勿論、牧溪をはじめ、唐畫を學んで堂に入り、好んで牧童野牛等を筆にし、其牛も亦水牛が多いのであ

盧を促がした圖で、山樂や永德等も好んで畫いた題目であるが、眞能の畫は、如何にも朴雅にして韻致あり恰も宋元の名畫を見るの感がある。又能く見る牛の圖に、五牛の圖、政黄牛の圖等、佛說より出たものや、寗戚飲牛高誦の圖、魯公明儀の對牛彈琴の圖等、唐宋名家の遺墨、或は我朝の周文、祥啓等の名蹟が、相當世に殘つて居る。徳川時代

も此圖の釜があり、彌阿彌古淨味の作品にも、此圖のものがある。又十牛の圖を鑄出したものもあるが、此十牛は廓庵志遠禪師の作と謂はれ、見性の順序を十牛に例へたもので、尋牛見跡より、忘牛人牛俱忘等に至る、十の例を引いた禪の教にて、是は往々水指や、茶碗にも畫かれ、又畫卷物として飾らるゝ事もある。宗旦や遠州公、澤庵、江月等

有するものも尠くない。是には交趾もあり、染付もあり、安南もあるが、何れも渡り物にて、年代も可也古いものがある。臺牛や笠牛は交趾。引捨牛、葛籠牛、水牛、櫻牛等は古染付。吳洲臺牛、地紙牛は吳洲。何れも安政二卯年發行の、型物香合相撲に記載されてある。櫻牛は六角にて、櫻の如き花の下に、牛の走る模樣あり、又笠牛は、背に笠を載せて

に黑牡丹とも稱し、古來畫家や、美術工藝家の、好題目となつて居る。故に、前記の如く繪畫に、茶器に、隨分數多く見受けらるゝのである。

尙ほ牛に關する、古語の一行物や、茶器類についてお話する時は、際限もないことであるから、何れまた機會を得て執筆することに致し、此度は以上の程度にやめておきます。

近史雜話（二）

牧野謙次郎

我國改暦の眞因

明治の初期に於て改暦の議が起り、太陰暦を改めて太陽暦としたことは、人のよく知るところである。その改暦には種々原因があつたのであるが、その原因の一つとして、嘗て大隈老侯から聞いた話がある。

當時維新政府の中にあつて、財政問題に關連して急に改暦の議が起つた。是より先き政府は舊幕の制度を繼いで、諸官員に俸祿を支給した。即ち例して言へば、何の官は何石と言ふやうに、官等の等級によつて祿の高下があつた。それを今日で言ふ月給制度に改めた。即ち祿を廢して金錢を以つて支給することに改めた。そこで太政大臣は何百圓、參議は何百圓といふことで一年の豫算を立てた。算盤上の計算は夫々の役人があつて立派に立ち、先づ實行することになつた。ところが玆に意外の故障が起つた。それは一年度總額幾らといふことに豫算はなつてゐるが、一年を十二ケ月と見ての豫算であつて、平年ならばそれでよいが、閏年には一ケ月餘計に出る。即ち一年十三ケ月ある。その餘分の豫算といふものは、十二ケ月の豫算の中から何う割出すべきか、といふことを或人が氣付いた。なるほど之はもつともな話で、事實閏年のあることは大臣參議と雖も如何ともなし難い。けれ共太政官の名を以つて天下に布告したことであるから、今更容易に改めることも出來るものでない。しかし一年十三ケ月には困つた。

ところで、西洋では何うしてをるかといふことになり、調べて見たところが、西洋では一年十二ケ月と極めてをる。閏年などといふものがない。そこで是非之に改めなければならぬといふことになつたが、何を言ふても我國王朝時代に閏を用ひたのが支那暦

に據つたので、それから千幾百年といふ年數を經て來た今日、習慣といへば千幾百年の習慣、之を一朝に改めることは、如何に革新論者は多數あつても、急に改めることは難しい。西洋暦が便利ならばそれを用ひてもよいが、漸次に改めるといふ說が多かつた。しかし改暦した明治五年の翌年かその翌々年が、その時の暦によれば閏年に當る。今年の豫算は出來たが、次の年が閏年で、忽ち財政上の困難が生ずるといふことが起るので、急に新暦を採用することになつた。しかし久しい習慣を急に改めるには、何か重大な理由を付けなければ、必ず民間から苦情が起るといふことを憂慮した。そこで改暦の名義は、從來の暦は太陰暦であるが、王政維新で萬事改革を計るといふことから、今度用ふる暦は太陽暦にする、といふことにした。太陰暦を廢して太陽暦を用ふると言へば、名義は立派であるが、事實は前に申したやうな財政問題が重要なる一原因となり、急に改めたのであつて、この事は當局の外は知らなかつた。後になつて學者が說をなして、太陽暦が正しいといふことになつたが、その實は必要問題から出たのであつた。

我國紀元確定の經緯

王政維新になつて國の紀元を定めなければならぬといふことになり、何時の時代をもつて我國の紀元とするかについて論議された。或學者は、我國の紀元といふのは神代からであると言ふ。しかし神代といふものから現代まで幾年あるか、之は議論のあるところで、幾千年あるか、幾萬年あるか漠として判り難い。さういふ漠然たるものを以つて紀元となしては、今日の文明開化の世に天下萬國に笑ひをとる。それより西洋紀元と同じものを採つた方が宜しい。さすれば萬國交際上に於てもよく判り、總ての點に於て便利である、といふ議が有力者から起り、朝議が纒つて紀元千八百何年といふことになりかけてゐた。當時有力者であつた西鄕隆盛氏の如きは、さういふことには殆んど無關係であつた。それは西鄕氏が知つてをるが沈默してをつたのか、それとも知らなかつたのか、兎に角何の言も發しなかつたといふことである。その時外務卿であつた副島種臣氏が「我國の建國は古く遠いが、之を神代から求めるといふことは議論が起り易い。それより神武天皇御即位の年を以つて紀元とすればよいではないか。西洋の紀元は耶蘇教國ならばそれもよいが、我國は耶蘇を信じてゐる國ではない。水戸の大日本史等は神武天皇から書始め、その中に神代のことを記述し、神武天皇は神代から皇統を御受けになつてゐることを、流石大見識ある德川光圀の筆に於て識されてをる。之は眞に穩當なる書方で、自分も神武天皇の御即位を以つて紀元として然

るべきであらうと思ふ」といふことを、三條、岩倉兩大臣に建議した結果、如何にももつともであるといふことになり、今日の如く神武天皇御即位の日を以つて我國の紀元とし、又紀元節といふものが定められた。この事は往年私が副島氏から直接聞いた話である。

佛蘭西中毒

明治の初期、日本から佛蘭西に留學した西園寺公望、光明寺三郎、中江篤介といふやうな人が歸朝した頃は、ルソーの民約論が盛に讀まれて、民權自由が盛に論ぜられ、自由黨といふものが出來て、その大將が板垣退助氏であつた。もつともその時は自由黨といふやうな形式張つたものではなく、之が固形態になつたのは後のことである。

或時自由黨の領袖數名の人々が、日本の國體は如何にしてよいかといふことを論じ合つた。當時のことだから隨分過激な議論もあつたが、之は一つ內地の人だけで決するよりも、外國人の說も聽かふといふことになつて、この人々が相携へて英國公使館に至り、公使パークスに會つてこの話をなして、此說もありかういふ說もある。貴下の說は何うかと意見を求めた。パークスは三人の說を聽いて、暫らく何も言はずに三人の顏を交ゝ見てゐたが、漸てロを開き、「それはあなた方がよく考へて見る必要がある。今更そんなことを言ふのは實に不可解である。日本には萬世一系の皇室を戴いた立派な國體が儼然としてある。あなた方は佛蘭西の國體をいゝと思ひ、私の英國々體をいゝと思ふかも知れないが、我々の國では、日本の國體のやうなものを急にやれといつたとこでやれるものでない。それ故に諸種の事情に基いて適當な國體を作つてゐるのであるが、日本は奇蹟的にも、如何なる原因があつた知らないが、實に良く出來た立派な國體である。察するに貴君達は佛蘭西中毒ではないか。」と言はれて、この人々は言葉を失つて了つたといふ感じで其處を辭し、板垣退助氏のところへ行つてこの話をした。すると板垣氏は、「諸君はそんなことを外國人に聽くなぞといふことはない。判り切つたことである。我輩は前から處々に於て政府を攻擊する演說をなしたが、それは有司の專橫に對して言つたのであつて、國體のことは實に明かではないか。」と人々を戒めた。

この話は嘗て此人々の中の一人河野廣中氏が後年大隈邸に來た時偶然逢つて聞いたのであるが、大隈老侯が傍で此話を聞いてをつて、「そりや河野君、板垣許りじやない、維新の鴻業に關係した者は誰しもその意見を持つてをる。パークスの先見でもなければ板垣の卓見でもない。その點では皆一致してをつたんだよと。」言

我國改

明治の初期に於て改
たことは、人のよく知
あつたのであるが、そ
いふ話がある。
當時雜報政府の中に
が起つた。是よりも先き
を支給した。即ち例し
等の等級によつて祿を
そこで太政大臣は何百
を立てた。算盤上の計

呉服四谷報知新聞

近史雜話（二）

牧野謙次郎

我國改暦の眞因

明治の初期に於て改暦の議が起り、太陰暦を改めて太陽暦としたことは、人のよく知るところである。その改暦には種々原因があつたのであるが、その原因の一つとして、嘗て大隈老侯から聞いた話がある。

當時維新政府の中にあつて、財政問題に關連して急に改暦の議が起つた。是より先き政府は幕幕の制度を繼いで、諸官員に俸祿を支給した。卽ち例して言へば、何の官は何石と言ふやうに、官等の等級によつて祿の高下があつた。それを今日で言ふ月給制度に改めた。卽ち祿を廢して金錢を以つて支給することに改めた。そこで太政大臣は何百圓、參議は何百圓といふことで一年の豫算を立てた。算盤上の計算は夫々の役人があつて立派に立ち、先づ實行することになつた。ところが茲に意外の故障が起つた。それは一年度總額幾らといふことに豫算はなつてゐるが、一年を十二ケ月と見ての豫算であつて、平年ならばそれでよいが、閏年には一ケ月餘計に出る。卽ち一年十三ケ月ある。その餘分の豫算といふものは、十二ケ月の豫算の中から何う割出すべきか、といふことを或人が氣付いた。なるほど之はもつともな話で、事實閏年のあることは大臣參議と雖も如何ともなし難い。けれ共太政官の名を以つて天下に布告したことであるから、今更容易に改めることも出來るものでない。しかし一年十三ケ月には困つた。

ところで、西洋では何うしてをるかといふことになり、調べて見たところが、西洋では一年十二ケ月と極めてをる。閏年などといふものがない。そこで是非之に改めなければならぬといふことになつたが、何を言ふても我國王朝時代に閏を用ひたのが支那暦

なくなつてゐるから、如何ともしようがない。

「御式定通御四位の日」

ものの公定あるとおもふ。

佛蘭

明治の初頃、日本の江戸に當たる、巴黎に謂まれて、巴黎まで、そのあ來て、そのあ來たいふ。

[illegible]

はれた。

木堂罪を一身に負ふ

これは犬養木堂氏から其の少年時代の話として聞いたのである。木堂氏が少年時代、福澤諭吉氏の塾に居つた時の話である。十二月も押詰つた或一日、塾頭の渡邊洪基氏の室に呼ばれた。渡邊氏が言ふには「君に一つ内々の用を頼みたい。それは年をとつた人では難かしい。君ならば出來る。」犬養が「僕の出來ることならばやります」と答へると、「外ではないが、先生の家の座敷に鏡餅が飾つてあるが、見るからに甘さうではないか。あれを取つて來て食はう。だが形を崩さないで内身だけ抉り取つて來て貰ひたいんだ。」といつてナイフを渡された。自分でも食ひたい慾があるので、それを引受け、夜分ソツト忍んで座敷に入り、重なつてゐる上の餅をとつて下の餅の内身だけを抉つて持歸り皆で失敬した。ところが翌日福澤先生が見ると下の餅がへこんでゐる。流石小供だものだから、下の大きな方の餅を抉つて來たのはいゝが、上の重身で潰れることには氣付かなかつた。こんな惡戯をするのは塾の奴に相違ないといふので、早速渡邊氏が先生の許へ呼付けられ、之は他から入つた泥棒ではない。家に居る者に違ひないから、お前が取調て來い」と命ぜられた。渡邊氏は之には弱つた。取調べれば張本人は自分である。そこで「先生さういふことを荒立たせるのは如何なものでせう。第一外に聞えても面白くありません。之は年をとつた者は致しませんよ。多分大養あたりの年少者がやつたのでせうから、私からよく戒めてをきます」「ではお前に一任する」といふことで木堂氏が惡者になり此場は無事に納つた。

北山先生塾生に仇討さる

前の話に一寸似た話がある。舊幕時代江戸に山本北山といふ有名な儒者があつた。この北山は元資産家で、塾を開き塾生も澤山をつた。

之も歳暮のことであるが、或所から鴨を贈られた。それを北山は書齋に置いて用事に出たところが、書生がその鴨を塾に持つて行つて内部の肉を料理して食べ、外部の羽だけをもとの所に掛けてをいた。北山が歸つて來て「この鴨は何うしたんだ」と女中に問ふと「書生さんが持つて行つて食べて了ひました」といふ返答である。北山といふ人は學問もあつたが、詩も大家であつた。早速狂詩を作り、其の句中「鴨一羽兮緑」と書いてそれを塾へ持つて行つて張つた。つまり鴨の羽色の緑と、身取りとを掛けたものである。すると今度は北山の留守を窮つて書生が、北山の書齋に

「鮭一片兮紅」といふ狂詩を書いて張つた。之も鮭の色と鮭一片すら吳れない、といふことを掛けたので、北山が常日頃書生達に碌な物も食はせない仇討をしたのであつた。

明治の一奇女子

若江薫子は號を秋蘭といふて、梁川星巖の夫人紅蘭女史の門弟である。父は若江某といつて、京都の五攝家の一なる一條家の家來である。

秋蘭は若い時から學問を好み、その人物は女丈夫の評がある。孝明天皇の御時代、尊王攘夷論の盛んであつた時、京都に集つた諸國の志士達で、薫子の名を聞いて面會を來めた者は、薩長其他多數に上り、薫子といふ名は諸藩の志士の間に響き渡つてをつた。

明治天皇が御即位になられ、皇后冊立の議が起り、如何なる御方を御立てするかについて、三條、岩倉兩公の間で相談の結果、一條家の三人の姫君の中から御選定したらよからうといふことになつた折、薫子が一條家の御姉妹三方に學問をお教へしてゐるといふことを聞かれた岩倉公が、薫子を呼ばれて、三方の中で何れが宜しいかといふことを訊かれた。その時薫子が答へていふには「皆樣御立派な方でありまするが、たつてのお訊ねならば申し上げます。第一番のお姉姫君は誠に淑愼聰慧と申上げて宜しい。末の姫君は御美人で人づきの良いお方であります。但し至尊に配して國母となり御内助の才德がおありになるのは第二番の姫君でありませう。御器量は外の御方にお讓りになるでありませうが、先づ妾が御見上げ申したところでは、此御方は皇后樣として然るべきやうに思ひまする」と申し述べた。岩倉公は三條公にその話をされて、それから議が段々進んで決定したお方が即ち昭憲皇太后である。

皇后にお立ちになつた後も、秋蘭には時々お訪ねの御内旨が傳へられた。

斯の如く秋蘭は後に宮中にも關係があつたが、時勢が改つた後までも攘夷論を主張して持論を枉げず、攘夷說を陛下に進白するやうなことがあつたので、岩倉公や三條公も困つて了つた。そこで若江薫子は發狂を致したといふことにしたので、宮中の皇后樣からもお使が絶へるやうになつた。

秋蘭慷慨の詩歌は頗る多くあつた。其の一に

誓障頹波張二國維一　鯁骨那顧一身危
從來每誦文山句（文天祥）　百鍊丹心涅不緇

と云ふ詩がある。明治十四年迄存命したが、晚年は往年の如き意氣もなく評判も少し落ち、讃岐の丸龜に來て歿した。要するに秋蘭は明治の一奇女子といふべきであらう。

朝日賞に輝く九氏

不撓の努力に榮光
「文化日本」の珠玉
見よ！偉大なる業績

「文化日本」のため絶大なる貢獻をなした功績者として一月十五日東京朝日新聞社において昭和十一年度の「朝日賞」を贈呈される九氏――我が植物學界の至寶、牧野富太郎氏、電氣通信學界の權威、關口金治郎氏、第一次南極學術調査研究團團長、德永重康氏、運動日本の精髓、田島直人氏、碩學顧氏、遊佐正憲氏、杉浦重雄氏、田口正治氏、新井悌雄氏が光輝あるその榮譽を獲得したのは全く人力を盡しての苦心と不屈不撓の努力の結果にほかならぬ、燦然として輝くその世界に誇るべき業績の跡をこゝに辿つて見たい

世界に名聲嘖々
日本植物の父」
國寶學者・牧野博士

牧野博士と最初の著作

略歷

牧野富太郎氏は文久二年四月二十二日高知縣高岡郡佐川町に生れ、初め寺子屋に學び、明治七年小學校に入り半途退學、明治十一、二年頃授業生（月給三圓）として小學校に教鞭を執つたことあり、明治十二年高知に出で弘田止郎氏の五松學舍に學ぶ、明治十四年初めて上京、博物局を訪ひ田中芳男、小野職愨氏等の敎へを受け、更に十七年再度上京して當時の東京大學に出入し日本植物の研究に從事した、明治二十六年東京帝國大學理科大學の助手に任ぜられ（月給拾五圓）大正二年頃講師となり引續き今日に至つてゐる、昭和二年四月六十六歳の時東京帝大より理學博士の學位を授與せられた

博士は酒造家の一人息子として生れ、幼少の時父母を失ひ、祖母の手に養育せられた、子供の時から非常に植物が好きで、鄕里の山野を跋渉して手當り次第に植物を採集し、小野蘭山の本草綱目啓蒙や畝傍叢書の草木圖說等を參照して名前をつけてゐた

明治 十四年上京の際、當時丸之内の山下町にあつた博物局（博物館）に赴き、田中芳男氏などの敎を受け、植物標本の製法を習つた、關關後土佐國内の各地を植物採集して廻り、土佐の植物志の編纂を企てたりして、益〻植物の研究に精進し、明治十七年再び上京して東京大學の植物學教室に出入し、書物や標本を自由に利用することを許され、研究の方法に進歩を加へ、同教室の教授、學生諸氏とも親しくなつた

その後この日本植物の研究はめきゝと進展し明治廿一年には日本植物誌圖篇の第一集を出版し、年々續行を續けて第十一集にまで及んだ、これ等はその出版の費用を自弁するのみならず圖畫も描き、石版印刷術まで學んで自ら印刷した、明治二十年同好の士と相謀り初めて植物學雜誌を續行したが、その雜誌第一の植物の石版畫は博士自身の手刷である

牧野 博士の學術上の功績として第一に特筆すべきは、日本人として最初に日本植物に學名をつけたとある、當時の植物學者としては矢田部良吉博士を始め數名の先輩があつたが植物分類學の研究は尙幼稚であつて、採集した植物を外人の著書を見て學名を索きあて、不明のものは外國の學者に送つて學名を聞くといふ有樣であつた、然るに小學校すら完全に卒業しない無名の青年、牧野富太郎氏は明治二十二年一月にヤマトグサにテリゴヌム・ジャポニクム（Theligonum japonicum）といふ學名をつけて、これを植物學雜誌で發表した、かうしたことは日本植物に關する豐富な知識と學問上の自信がなければ出來ないことで牧野博士にして始めてなし得たところである、その後牧野博士は日本植物に續々と新學名をつけたが矢田部博士を始めその他の人々もこれに則り敎せられて少しづつ新學名を發表するやうになつた、その後十年間に發表された

日本 植物の新學名の大多數は博士の命名にかかるもので、日本の植物學のこの方面では殆んど博士の獨り舞臺の觀があつた

即ち現在學名の知られてゐる日本の高等植物（草木）は約六千種あるが、その中半分は歐米の學者の命名にかゝり、博士が命名した新種一千を越え、新變種及び新に改訂した學名を加へれば一千五百に達してゐる、從つて世界の植物分類學者で牧野博士の名を知らぬものは殆どない

博士の植物に對する熱愛は非常なもので、あれば必ず山野を跋渉し、七十六歳の今日、尚壮年たる元氣と一植物學徒の熱意を以て採集に努めてゐる、從つて六千の日本植物全部の學名を暗記してゐるのみならず、葉の形態から花の色、大きさ、形、花期、果實等に至るまで一つとして知らないものはなく、その博覽强記と豐富な學識には時々來朝する歐米の植物學の大家も驚歎するほどである、

世界

博士の如きは植物の知識に於ては論のことゝ世界の第一人者たるは勿論、古今を通じて百年に一人出るか出ないかといはれる程の植物學であつて、眞正の國寶的學者といつても過言でない

現在各帝大その他の學校、研究所にゐる數十名の植物分類學者を始め、全國に分散してゐる植物同好者數百名は直接間接に博士の指導を受けた門下生といつてよいものである、博士が日本植物分類學の創設者、日本植物研究の第一人者たるの功績は没すべからざるものであるが、同時に日本の植物分類學者の大多數に親切に手ほどきして、養成した功勞も亦甚大なるものであるといはねばならない

博士は最近、過去五十年間の研究「集大成」として「牧野植物學全集」を完成し、これを十一年十一月に刊行されたが全巻何れも本邦植物界に印せられた博士の偉大な足跡を物語るもので本社はこの全集完成を機として牧野博士の偉大なる業績を顕彰するものである

記念講

一、開會の辭　本社主筆
一、牧野博士の業績　東大教授理學博士
一、我が懷古　東大講師理學博士
一、岡部博士の業績　阪大教授工學博士
一、極超短波の研究について　阪大助教授工學博士
一、第一次滿蒙學術調査研究團　農林省農事試驗場長農學博士
一、熱河の探險　團長　早大教授理博、工博

右手に劍・左手に書
科學の聖十字軍
匪賊横行の奥地踏査

滿蒙調査團

昭和七年の滿洲事變直後、兵亂の中心熱河では秩序いまだ保たれず、兵匪土匪至るところに横行し、交通の途も絶える程であつた、而も熱河についての科學的知識は極めて貧弱なもので、此地を實地踏査した内外の學者は數々たる有様であつた、かゝる際に學

術の中から決然奮起、日滿學界の權威と產業資源關係のため陣頭に立ち、昭和八年七月、危險困苦を冒して學術探檢に赴いたのが、滿蒙學術調査研究團の十八氏とこれを助ける同伴者四十四名の人々であつた、探檢には危險が伴ふことは必定であるが熱河探檢には疫病の流行、交通の不便等は暫く措き同地には衆匪なる兵匪、土匪、馬賊の盛んに横行する際であつて、右手に劍を揮り、左手に書を按ずるといふ有様で、機關銃

銃劍

を携へる兵士三十余名に常に保護され、無線電信、飛行機等にて偵察しつゝ奥地に踏み入り、烏丹城にては馬賊の襲撃を目の邊りに望み、廟場にては匪賊の部隊より射撃を受くる等、幾多の危險にさらされたが、幸ひにも一人の負傷者も病者もなく四ヶ月の調査研究を遂行して十月無事歸京した、ところで調査團員並に關係者は次の通りである

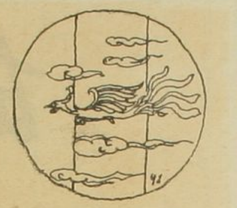
【團長】理學博士、工學博士德水重康氏【副團長】理學博士中井猛之進氏【團員】地質學理學博士清水三郎氏、伊原敬之助氏、佐藤捨三氏、松澤勳氏、小用不二男氏（地理學）多田文男氏（植物學）理學博士本田正次氏、北川政夫氏（動物學）理學博士森爲三氏、岸田久吉氏（人類學）八幡一郎氏（醫學）醫學博士都留親氏（通信）大朝社員藤木九三氏（寫眞及び映畫撮影）東朝社員島田謹介氏（事務）山本武氏（警備）陸軍少佐村岡鑑吉郎氏、特務曹長宮田哲氏警備兵三十一名その他助手、通譯、運轉手等總計六十二名

以上の諸氏によつてもたらされた貴重な材料は爾來三ヶ年間の日子を費して整理研究され、昭和十一年十一月彩大なる報告書となつて現れた、而してこの報告書完成に

複原製

丑年に因む牛の話

會長　徳永重康



本年の丑の歳に因んで牛の話を書いて見る。生物として世の中に牛程、人の爲め貢献する物は、極めて少なからう。生きて居る間は、性質從順で然も力强く勞役用に理想的であり、其乳汁の効果は洽く知る通りである。今世界に五億數千頭も養はれてあると稱せられ、我日本本島だけで百五十萬頭が生存して居る。死して後の牛肉の滋養品たるは云はずもがな、其牛皮は鞣(なめ)されて靴、鞄、革類、馬具、文房具其他に供され、牛蹄は櫛、笄、釦等に製される。加工した物で「バタ」は牛乳中の脂肪(牛乳中の八割四分を占める)より採られ、「チーズ」は牛乳中の蛋白質、脂肪分を含む濃厚な滋養食品である。又牛乳及び副産物を原料となす食用品には「コンデンスミルク」粉乳「ヨーグルト」「カルピス」「アイスクリーム」乳糖其他數多あり、化粧品中の材料ともなる。又醫學用として種痘は犢の身體に天然痘の疫菌を接種したものである。

斯く述べて見ると若し牛が此世の中に生存して居なかつたら、蓋し文化も斯く進まなかつたかも知れない。これは文明人は素より古代の原始人も、此牛を家畜として盛んに用ひた爲め、今や牛は人間の手を經たもの計りはびこつて、原始牛は僅かに人跡の到らぬ未開地に生き殘つて居る。人間が原牛を捕へて飼育して居る内種々身體の變化を生じて、今日は天然自然の原牛とは差つた種類となつて仕舞つた。其を學名で Bos taurus L.(家畜牛)と稱へる。天然物を人力で、異なつた種類に變化させた例は猫犬の獸や鷄も同樣である。家畜牛も飼養方法に由り更らに種類(亞種と稱さる)に分れて居るが、歐洲では類原牛(Bos taurus primigenius Rut.)長頸牛(B. taurus longifrons Ow.)大頭牛(B. taurus frontosus Nil

ついては我が學界の美擧として内外に誇るべき事實がある、それは調査團成立の精神とその

蒐集

せる材料の貴重なる所以を認識して、我國專門家五十余名に及ぶ多數の學者が、銳意その材料により研究を進め、こゝに立派な報告書を完成したことである、即ち我國の學者は學問のためには決して排他的でなく、極めて公平な態度があり、相倚り相助けて學問發達のため、邁進しつゝある實情は誠に痛快とするところである

また鬼角探檢事業は龍頭蛇尾に終り易く、最後の結果が不徹底になり勝ちであるが、この調査團の報告は僅か三ヶ年で首尾徹底せる結果を世上に發表したもので、その論文の數は實に百三十八篇の多きに及び、各部門にわたつて新發見、新事實が充滿してゐる

例へば植物の種名の確定された數は實に八百八十七種、四亞種、百五十三變種、二十六品種に及び、内新たに學界に發表された新發見の種類七十五、新變種四十三、新品種十六である、動物で記載された種類は九百三十種の多數で内新發見の新種類百十四種に及んでゐる、その他この研究報告によつて從來暗黑であつた

熱河

の知識は俄に光彩を放つ樣になり、その結果、支那と朝鮮、日本本土間の學問的連絡が極めて明瞭にされた

同報告書の内容の應用によつて殖産興業上の指針に役立つ點も多大である、調査團員及び團員外の研究者諸氏の多大の努力と學識によつて我國未曾有の綜合的な學術探檢の光輝ある結果がこゝに立派な實を結んだことを賞讃し、我社はこれ等の諸氏の功績に對して代表者たる團長德永博士を表彰する次第である

【寫眞は團長德永重康博士】

榛原製

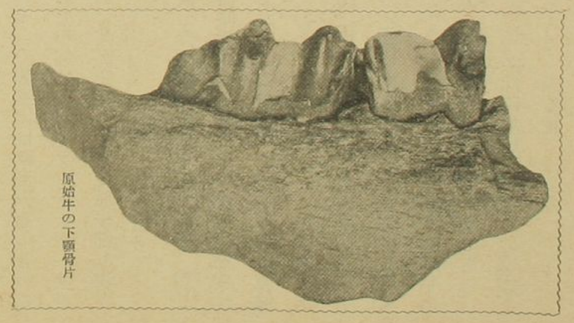
吳瀝筆　山水圖

閲覧室

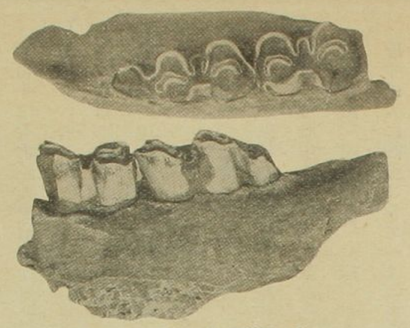
短額牛 B. taurus brachycephalus Wil.）に分ける。其内類原牛が最も原始的の牛に近い性質を持つもので、頭骨の額（ひたい）の形、頭の大さ其他で他の三が區別されてある。猶現今家畜牛の生息し居る地方から分けると、荒原種、低地種、「アルプス」種となる。荒原種の牛は家畜牛中の最古のものと云はれ「アリアン」人種が始めて歐洲に侵入した時に最早歐洲には此牛が盛んに繁殖したと稱せられ、瑞西國の最古人類の遺跡中に此牛の遺骨が多數混入されてあつた。其は今より五千年以前の昔である。低地種は北國種とも稱せられて、繁殖の地は極めて廣く東は「カムサツカ」より「シベリヤ」、北支那、朝鮮、「ロシヤ」、瑞典、諸威、英國、獨逸、白耳義、「ポーランド」に擴がる。「アルプス」種は「アルプス」地方の産であり、是も既に石器時代から現はれて居る。

家畜牛は太古の人民が何れ何處かの天然牛を捕へて飼育したものであるが、其は遠い數萬年の昔で、學問上の舊石器時代（中の若い方）一名氷河時代と稱して居る。其遺骨は歐洲の所々に古代人の遺物と一處に發見され、又は古い壁畫や壁に刻んだ原始的の彫刻に現はれてある。此原始的の牛は前掲家畜牛程身體が未だ變化されて居ないので、原牛（Bos primigenius Boj.）と稱へる。原牛は此世の中に昔は天然に非常に生息して居つたものである。昔出來た地層の中を掘ると此原牛の化石が所々に發見される。私が三年前滿蒙學術調査研究團長として滿洲の探檢をした際、「ハルビン」市郊外で昔の地層中から數多い獸の化石を掘出して報告書で發表した。其内に此原牛を多く發見した。圖（次頁參照）が其一である。

原牛は人に飼養されて一は家畜牛といふ別種類の牛に變體したが一は舊體の儘で山



原始牛の下顎骨片



ハルビン郊外で發掘したる原始牛の下顎骨片

野に生き殘つたらしい。古代「ローマ」「ギリシヤ」の著述には歐洲固有の牛には野牛と原牛が居ると記してあり、現に西暦一六二七年迄は「ポーランド」の「サモイスキー」伯の動物園に飼養された記事があるが、其が死滅して、此原牛卽ち現今の牛の先祖は此世の中から影を沒したのである。

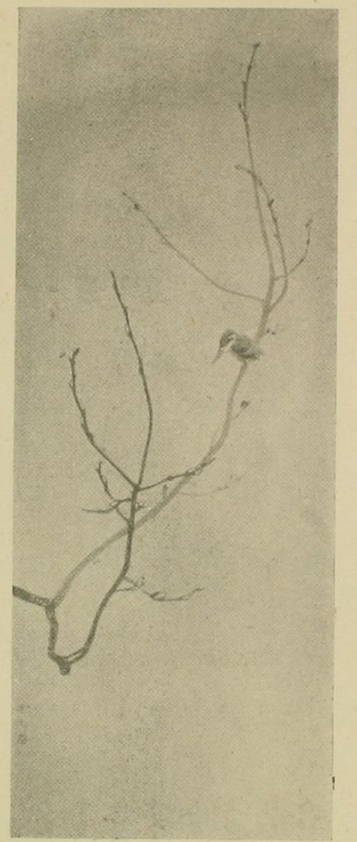
牛の由來は右の通りであるが、扨日本人が飼養した牛の起源は不明である。然し千葉縣の守谷及び神奈川縣の萱山の貝塚（新石器時代）から家蓄牛の骨が發見された故、日本人でも古代人が飼養したことは確かである。古墳時代には牛の形の埴輪が出た。古い歷史を見ると大國主神が田を營むに牛を以てしたと記され、神武天皇が兄猾弟猾を召された時弟猾が牛酒を設けたと書物に見えてある。聖武天皇が四天王寺を移轉された時の材木運搬に百濟國から献上の牝牡の牛を用ひられたとある。蓋し牛が外國から輸入された最古の記錄であらう。其後日本には朝鮮支那から盛んに牛を輸入したが、中古以來獨り朝鮮牛のみならず印度牛たる「ゼブ」も輸入された。推古天皇の御代に印度と交通が始められ其後に牛の輸入が始まつたのである。

終りに牛の語源を調べたが、餘り要領を得た解釋はない。一說は和名鈔に牛を宇之と記すが此は馬に對して名付づけたので、馬は立上る時前足を先にし牛は後足を先にする、宇之は宇之路の略語と云はれてある。或る說では大獸（オホシシ）といふ言葉の變化したものだと云はれてある。「ウシ」の別名は地方に由り「ベコ」「ベブ」「コツトイ」「コテ」「アマ」「ヘベノコ」「コトヒ」とも唱へられる。

牛に關する利用法其他書くことは多くあるが先づ牛の起源を主にして記したので、牛に關する常識を知る一端ともなるかと思つて簡單に記述したのである。

師匠が手本を描いて弟子に渡す。弟子はその手本に依り、師匠の持てゐる特質に之たがはざらんとして描いて行くことはどうしてもありがちとなる。その爲に畫が墮落するのはまた當然である。手本を自分のわきに置いて描く場合、それ丈が標準になり、それ以外何もないのでは、寧ろ學ばざるに若かずと申したい。

支那の明朝から清朝に掛けての文人畫は、或は蘭の隱逸、竹の高節など、すべて儒教から來た人格を托したと云ふことから撰ばれて、さうしたものが畫の修練の便宜上にもなるのではあらうが、やはり最初に描いたものは蘭なり竹なりをよくよくのみこんで、それが筆墨にあらはれて來ると云ふことになるのだから、從てよき繪が出來るのは當然だ。それが、次に來る人は、その本然の對象からある一つの繪畫化された手本に則るのであるから畫技の落ちるのは當然としなければならない。



松村景文筆

雪舟筆（線の雄健しかもそのあるところを注意せよ）

假に芥子園畫傳の蘭竹を描くにしても、その描く者に、當然本然の蘭竹その實物が髣髴しない限り、お手本の意義は全く失はれるに等しい。

◇狩野家の手本に見える特色

前述の如く、探幽から始まつた狩野家の手本は、代々師匠が門人に描いて與へたものでその手本にはごく以前から一つの方式があつて、手本

吳瀛筆　山水圖

關覽室

短額牛B
たち（の形
ルンルン」垂
にはこの牛が
千年以前の
ムサツ「
義ーボーイ
石器時代か
家畜牛は
い歎為年の
道骨は歐洲
的の膨彩に
のでい原牛
生息して居
れる。私が三
外で昔の地層
く發見した。
原牛は人に